

写真8 神庭荒神谷3号銅鐸（左列）と伝脇町銅鐸（右列）

1・2：A面鐸身右肩部 3・4：B面鉢上部 5・6：B面鐸身左肩部

## 第2章 神庭荒神谷遺跡出土銅劍形祭器の「細かい研究」

岩 永 省 三

### 5年後の総括

1984年の神庭荒神谷遺跡第一次調査から5年後の1989年6月26日に、某新聞に神庭荒神谷特集が出了。そこでは、神庭荒神谷遺跡をめぐる疑問を、①だれが埋めたのか、②なぜ埋めたのか、③出雲にあった理由、④どこでつくったのか、⑤原料の産地は、⑥埋めた時代の出雲弥生時代人の遺跡はどこか、⑦記紀神話や出雲風土記との関係、にまとめ、考古学者が①～⑥の素朴な疑問に積極的に発言しておらず、「形はどの類型に分類できるかなど、細かい研究をしていける研究者はいる」ものの、研究が停滞していると断罪。「正式報告書がでないことには」という考古学者の発言に対しては、県教委の概報で「かなりのことはわかる」のだから、「報告書ができれば本当に期待出来るか疑わしい」と結んでいる。考古学者の無能ぶりを揶揄・慨嘆しているのである。第一次調査から10年後、同じ新聞社の件の記事を書いた編集委員氏から電話があって、「もう10年も経ってるんだから、少しは研究は進んでるんでしょう?」と詰問される。「10年経ったとは言っても、諸般のやむをえぬ事情で遺物が長らく東京に行っており、その後は保存処理過程に入ったので、調査の当事者ですら、観察も実測も写真撮影もほとんどしておらず、情報量は10年前とほとんど変わってないので、弥生時代の社会像とか、墳墓や集落跡の情報から見た出雲地域の情勢とかいった大枠の話でなく、神庭荒神谷の出土遺物に話を限った場合、考古学者が物に即して発言する以上、遺物が戻ってきてデータが蓄積されるまで研究の進めようがありません」と正直に言ったところ、呆れ果てて二の句がつけぬ風で、すっかり馬鹿にされてしまった。<sup>(1)</sup>もっとも、何らかの成果があったところで、その公表は調査主体者からなされるのが筋で、当事者ではあっても調査主体者ではない私が、未報告の時点で部外者しかも新聞記者氏にリークするはずも無いのだが。

こと神庭荒神谷に関する限り、遺物の「細かい研究」の評判はすこぶる悪い。前述の新聞記事にも「出土した青銅器をこれ以上分類しても、なぞと呼ばれるものは解けない。弥生の集落跡と結び付けて研究する以外になさそうだ」という著名な文献史学者の発言を引き、考古学者にも同意見の人が多いと強調している。まるで「細かい研究」など無用と言わんばかりだ。とはいっても、集落や墓の研究がどうあれ、華々しい結論が出ようが出なかろうが、物の研究は物の研究としてやらずにすませられるものではないし、弥生時代青銅器の「細かい研究」しかしてこななかった私には、他にやりようもない。以下は「細かい研究」しかしてこななかった人間が、神庭荒神谷遺跡出土の銅劍形祭器について考えた「細かい」話であるが、神庭荒神谷遺跡の正

式報告書である本書でなら、このような「細かい」話もお許し頂けると思う。私にこの特論執筆の機会をお与え下さった島根県教育委員会の皆様に感謝申し上げます。

### 中細形銅剣c類という型式の実態

神庭荒神谷遺跡出土の銅剣は、すべて岩永が1980年に設定した中細形銅剣c類（以下c類と略す。）に属す。<sup>(1)</sup> 中細形銅剣はa・b・cの3類に細分でき、大勢としてその順に変化した。1980年以前には、c類をb類あるいは中広形銅剣と同一型式に繰める研究者もあったが、両者の区別は容易であり、c類を分離しておくことを有意と見た。その後1984年に荒神谷でc類が358本もまとめて出土し、「出雲型銅剣」と呼ぶ研究者さえ現れた。その評価を認めるか否かはともかく、c類を独立させておくこと自体は広く承認されたと言えよう。

本書第4章第1節2A(3)では、2A(2)での同範品識別作業によって、358個体が鋳型の数にして226種にまで整理・統合されたのを受けて、それら226種を、形態的類似度でさらに纏めて分類することが可能か検討した。226種は、c類には属するものの、形態・法量の細部に注目すると相当の変異が存し、他遺跡出土のc類にない特徴を有す個体も相当数あるから、こうした形態的変異が何らかの意味を持つのか、具体的には、製作時期、鋳型を製作した工人などの差を反映しているのかどうかが問題だった。

226種を通覧して形態的な差異がもっとも際立つのが、剣身両側の突起の位置であるので、関から突起までの実長を剣身の実長で除した値（T値）で突起位置を表すこととし、その差に意味があるのか検討した。しかし、突起位置の如何は、剣身長・剣身幅・脊厚といった要素と無関係で、突起位置に基づいての型式細分は難しいことが判明した。そこで、T値の広がりの中で、中央部が本来目指された形で、その両側は誤差に当たり、T値の如何にかかわらず許容範囲内の変異で同時存在した、と考えた。

さらに、剣身長・剣身幅・脊厚に基づいた型式細分が可能かも検討したが、T値の場合と同様に、数値の広がりの中の中央部付近が本来目指された形で、その両側は誤差に当たるのであって、数値の如何にかかわらず許容範囲内の変異で同時存在したと考えざるを得なかった。

このように、神庭荒神谷のc類には、T値・剣身長・剣身幅・脊厚などに相当の幅があるにもかかわらず、それらに基づく型式細分は無理で、それらの数値が大きい者も小さい者も同時に存在の変異と考えた。中途まで作業を行なったものの、十分の時間がなく本文中に記載しなかった他の形態的属性、たとえば元部から関部への収束の仕方、元部両側・剣刃・突起の形状などに基づいても同様との見通しを得ている。358点から數～数十点を抽出した程度の出土数であったら、かえって形態的特徴で区切ることは容易であったろう。しかし本一括資料ではあまりに点数が多いため、無理に線引きした「小型式」の間を埋める中間形態が続々と出現して、恣意的境界を雲散霧消させてしまう。358点の銅剣が全体として中細形銅剣c類という型式の実

態、その中の変異の洗い落しを見せてているのである。

人が鎌形に銅剣の形を彫り込むに当たって、彼の脳裏にある「描かれざる設計図」・「範型」・「mental templates」、呼び方は様々あろうが、一種の「理念型」の中で、目指された形があったにせよ、そこからの誤差・揺らぎの許容範囲がC類についてではすこぶる広がっていたのだ。

さて、神庭荒神谷遺跡出土青銅器群に対する鉛同位体比研究の成果から、銅剣358点について<sup>(4)</sup>は、唯一朝鮮半島の鉛を含み華北の鉛を含まないA26がモデルだったという説が出されている。当初私は、A26モデル説にはまったく否定的だった。モデルと言う以上、製作時期がもっとも古いわけだから、剣身が短く、身幅も狭く、脊も厚い個体でなければならぬと考えたからだ。A26はいずれでもない。しかしC類の分類作業を試みた後には、必ずしも全否定の必要はないと考えるに至った。何故か。A26は、剣身長49.34cm、元部最大幅6.52cm、関部での脊厚実長0.99cm、T値0.375であって、いずれも度数分布の最頻値の近くに位置する。したがって「こんな銅剣」と言う程度のアバウトなモデル、理念型の原型として最初に与えられた可能性は有り得る。もちろん、揺らぎの大きさから見て、石型に剣形を描くときの「型紙」ではないし、真土に押しつける原型でもありえない。<sup>(5)</sup> 工人の座右にあって常に参照されたのではなく、他の個体に紛れてそれがモデルだったのかも判らなくなってしまった程度のものと考えざるを得ない。ただ最初に工人の脳裏に与えられたイメージの元と言うほどの意味でのモデルであった可能性までは否定できないと思う。

ここで私が本書第4章第1節2A（3）で銅剣を扱った方法に触れておきたい。私は銅剣各部の寸法や比率を扱った。中細形銅剣C類という型式・個体群の個性、あるいは各個体の個性を他と比較して論じるには、計量的方法を避けられない。もちろん研磨による形の変化を考慮する必要があるが、足立克己・松本岩雄・三宅博士・吉川広・佐藤綾子の諸氏とともに蜿々と行った同範関係認定作業の中で、吉川氏の執筆項目にもあるように「鎌上がった素材を大きく改変するような研磨は基本的にやっていない」、「型ズレや端面を研ぎ残す例の多いことから、刃部でも鎌型の外形を大きく改変することはまずない」という感触を得ていたからである。ところで、佐原真氏は刃物の分類における計量的方法に対して冷淡である。杉原莊介氏が青銅製鎌先を刃部の形で分類して誤った例を掲げ、先が折れた武器を研ぎ直して新しく先を尖らせたために、武器の各部分の形や比率が、元々のものから変わってしまったものがあるという橋口達也氏の指摘を受けて、「銅剣の形・大きさ、各部の比率を比べて新旧を論じることも、安心できない」とのべ、「刃物の分類法」に対して警鐘を鳴らした。<sup>(6)</sup> さしつめ槍玉にあげられているのは私の1980年・1986年の仕事であろう。確かに、研ぎ直して形が変わった個体がままある細形武器類を計測値のみに基づいて細分するのは危険である。しかし私が設定した程度の大ざっぱな型式の場合、鎌型に彫り込まれた形や、研ぎの影響を受けずに鎌型の形状を残す部分による

チェックは当然行って設定している。中細形銅劍 b 類を研ぎ込んで中細形銅劍 a 類になったりはしないのである。そもそも研ぎ直しされる前の形や比率をいかにして知るのだろうか。橋口氏も研ぎ直しの影響を受けた個体とあまり受けていない個体とを識別しており、後者の識別可能を前提としている。我々が分類する場合、実際の作業上失敗する場合もあるにせよ、後に基づくことを念頭に置かぬほど注闇で、佐原氏が警告するほど気楽に計量的方法を用いるであろうか。否である。私が1986年の仕事で、研ぎ直された物とそうでない物とを別型式に分類した例をご指摘頂きたい。

### 中細形 c 類と他型式との関係

中細形 c 類が中細形 b 類に後出することは間違いないが、中広形や平形との関係については、私自身、定見を持つに至っていなかった。本書第4章第1節2A(3)では突起位置からみた他型式との関係を検討した。

中広形銅劍が中細形 b 類と c 類のどちらから成立したのか、平形銅劍が中広形銅劍と中細形銅劍 b 類のどちらから成立したのかについては、意見が分かれている。中広形と平形の突起位置は大差無く、いずれも中細形 b 類より低い。中広形と平形が中細形 b 類より後出することは確かだから、中細形 b 類から中広形・平形への変化は、突起位置が低くなり劍身上半部が長くなる方向と要約できる。平形 I 式→II式 a 類→II式 b 類へも同様な変化である。中広形と平形 I 式の突起位置はほぼ同じである。

ところが、中細形 b 類から c 類への変化は、T 値が b 類より上下両方向に広範に拡大しつつも、度数分布からみて、重心は T 値が増大し突起位置が高くなる方向に変化したと要約できる。T 値が減少する中細形 b 類から中広形・平形への変化が型式変化の本流とすれば、中細形 b 類から c 類への変化は本流から分岐した支流とみなせる。c 類の位置付けが明瞭になってきたのである。

突起位置からみると中広形の祖型は中細形 b 類・c 類のどちらであろうか。かつて私は中広形の祖型として「中細形 b 類ないし c 類」という曖昧な表現を探っていた。当時は b 類と c 類が形態上大差無いと認識しており、一方、法量上では中広形と b 類に大差があり c 類の方が近いため、c 類が中広形の祖型となる可能性は排除できないと思いつつも、確実に中広形の製作地の一点がある北部九州に b 類が及んでいるのに対し、c 類が九州に存在したとはとても思えなかっただため、断定を避けたのである。しかし現在では、上述のように、b 類と c 類の形態差が明かとなり、b 類→c 類→中広形とすると、T 値の変遷上も不自然が生じること、北部九州特に文化的中心部での b 類の出土例が増えたことによって、中広形の祖型は b 類に限定すべきと考えている。

中細形銅劍 c 類以外にも b 類より突起位置が高い型式がある。近藤喬一氏が「平形銅劍 C タ

イブ」、私が中細形銅剣 e 類とした型式である。身が扁平板状で鐔を立てず刀も付けず、剣方下端の後が消滅している。とくに兵庫県赤穂郡上郡町別名遺跡出土品には剣身の周間に突線が巡り、研磨を加える以前の範に彫り込まれた段階での c 類の形を示す神庭荒神谷 B62 と一見した印象が近い。もっとも、この型式が c 類から出現したと主張したいのではない。私は中細形 b 類→d 類→e 類の変遷を考えるが、c 類から推して b 類にも研磨以前には剣身の周間に突線が巡る物があり、それが d・e 類に引き継がれたと考えられる。つまり、c 類と e 類はともに b 類から突起位置が高くなる方向で分岐した関係にあると言えよう。

1991年12月に鳥取県鳥取市西大路遺跡で出土した銅剣も突起位置が高い。関から突起までが 17.4cm と中細形 c 類に匹敵するほど長いにもかかわらず、元部復原最大幅が 5.2cm 程度と狭い。<sup>(10)</sup> 元部が異様に長く、c 類の元部両側を切断した再加工品の可能性も考えてみたが、突起より 4 cm 上方での復原身幅も約 4 cm と狭く、c 類の剣身両側を輪郭線と並行にわざわざ 5~6 mm ずつ削り狭めるのは不自然で、翼部厚も 1 mm に満たないことから、別型式と考えておく。現状で欠けている剣身上半部は、身幅からみて長くても 26cm 程度にしかならず、T 値は 0.40 を越えるであろう。c 類との関係はどうか。西大路の突起位置は c 類のそれの範囲内に収まるとはいえ、c 類で T 値が 0.40 を超すのは 5 種にすぎず、b 類 (T 値 0.365 以下) から西大路を経て c 類が成立したとは考えがたい。残る可能性は、① c 類と兄弟、② c 類の後続型式である。①の方が可能性が高そうだが、私が②の可能性を残しているのは、註 16 に記したように、西大路(鳥取市)が竹田(隱岐)と同類すると、山陰地域に圧倒的多数で展開した c 類(神庭荒神谷 358・志谷奥 6・イヅチ頭 4?) が僅かに残した子孫が山陰に有っても悪くはないと思うからだ。

### 中細形銅剣 c 類の製作時期

中細形銅剣 c 類の年代の直接的手がかりはない。前項で検討した c 類と他型式との関係を基に、他型式の年代観から検討しよう。

#### ① 中細形銅剣 b 類

c 類に先行する b 類の年代は、1993年に佐賀県吉野ヶ里遺跡、1994年に佐賀県植比本村遺跡で相次いで中細形銅剣 b 類が甕棺から出土し、明瞭になってきた。それ以前は福岡県峯遺跡の甕棺出土例しか手がかりが無かった。植比本村遺跡では SJ1114・1124・1135・1140 の 4 甕棺から 1 点ずつ出土し、甕棺型式はいずれも汲田式と発表された。詳細については正式報告を待たねばならぬが、汲田式の後半と見られる。吉野ヶ里遺跡では須玖式の SJ1057 甕棺から出土した。したがって、b 類は汲田式後半から須玖式にかけて確実に使用されており、従来の説より上がることが判明した。

#### ② 中広形銅剣

中広形銅剣は、c 類と同様に b 類から成立し、c 類とは兄弟に当たる。吉田広氏は、中広形

銅劍の脊上の鋲出し鎬、匙面状の樋、突出部以下の樋の欠落を、中広形銅矛からの影響と見て、<sup>(23)</sup> 中広形銅矛並行とした。しかし、中広形銅矛の出現が中期後半のある時点まで遡るにせよ、時期幅は後期前半いっぽいまで有るから、中広形銅劍を中広形銅矛並行とすると、中細形銅劍b類との間が開いてしまうのである。脊上の鋲出し鎬が中広形銅劍の不可欠要素だとは思わないが、匙面状の樋に仮に銅矛からの影響があったとしても、中広形ではなく中細形銅矛c類からであって、中広形銅劍は中期後半（IV期前半）中心と考えられよう。

### ③平形銅劍

平形銅劍の祖型について、1980年には中広形とし、1986年には二つの可能性—①中広形から直接に、②中細形b類から間に1～2型式介して一を提唱しておいた。吉田広氏は②説であって、「中細形B類」と平形銅劍との間にに入る型式として「中細形B'類」（兵庫県古津路1号）を充てている。<sup>(24)</sup> 私自身も最近では②説に傾いているが、中細b類と平形との間の型式は古津路1号ではなく、未出土だと思う。

平形銅劍にも年代の直接的手がかりはない。しかし、平形銅劍I式は中細形銅劍b類に後続するから中期後半（IV期前半）中心であろう。平形銅劍II式については銅鐸との並行関係が推定可能で、近藤喬一氏によって扁平鉢式と並行する可能性が説かれている。根拠は、①平形銅劍II式と扁平鉢式銅鐸との間には鋲掛けの特殊な技術が共通する。<sup>(25)</sup> ②平形銅劍II式b類の愛媛県一万1号剣の元部の鹿の表現手法は、扁平鉢式銅鐸とともに関係が深い。<sup>(26)</sup> ③平形銅劍II式b類でも最後出の岡山県瑜珈山1号剣のS字状連続渦文は、銅鐸を通して扁平鉢式でもっとも多用されたモチーフである。以上の近藤氏の指摘に加えて、瑜珈山1号の文様の鋲上がりは真土製鉢型によるものと断定でき、扁平鉢式銅鐸を石型による古段階、真土型による新段階に編年する難波洋三氏説に従えば、扁平鉢式新段階並行に限定できる。ただし、平形銅劍II式の存続年代幅のすべてを扁平鉢式新段階に並行させるのか、瑜珈山1号が属す末期だけを扁平鉢式新段階並行とし、他を扁平鉢式古段階並行とするのかは、瑜珈山1号以外の平形銅劍II式が石型製か真土型製か確定的でないので、意見が分かれるところだろう。では扁平鉢式の年代はいつか。

かつて私が銅鐸の年代観について整理した際、佐原眞氏の外縁付鉢I式銅鐸をII期（畿内第II様式期）に限定する説に反論し、外縁付鉢I式には土器でII期に見られる横型流水紋のみならずIII期に出現する複合縦型流水文がすでに見られるので、外縁付鉢I式で横型流水紋を施す個体と縦型流水文を施す個体とが同時期なら、外縁付鉢I式はIII期に下る可能性が強いと述べた。ただし、外縁付鉢I式で横型流水文を施す個体と縦型流水文を施す個体とを前後に編年できれば、前者をII期、後者をIII期に振り分けることは可能だと述べておいた。難波洋三氏の1986年説・1991年説は、私の提言には触れていないが、結果的にそれと同様の主張をしており、前者を外縁付鉢I式としII期に、後者を外縁付鉢2式としIII期を中心とする時期に編年している。

また扁平鋤式については、兵庫県今宿丁山遺跡出土の石型がIV期の土器を伴った例を挙げて「扁平鋤式古段階銅鐸の製作年代の上限は、畿内第IV様式あるいはこれを遡る時期」としている。また扁平鋤式～尖線鋤式前半の線画を土器絵画との比較からIV期に当たるのは佐原真氏がつとに指摘してきたところである。<sup>29</sup> したがって從来から言われてきたことではあるが、上限はともかく扁平鋤式をIV期とするのは妥当であろう。もっとも、扁平鋤式の古段階・新段階をIV期のどこに割り振るかが難しいが、すでに述べたように平形銅劍I式がIV期前半頃であることを勘案すると、平形銅劍II式の主体が扁平鋤式古段階並行であればIV期の中頃までには収まり、扁平鋤式新段階並行であればIV期後半には収まろう。

#### ④中細形銅劍c類

以上検討してきた中細形b類・中広形・平形の年代を勘案すると、c類の年代は中期後半（IV期前半）を中心とし、中期中葉（III期）に上がる可能性あり、と見るのが妥当だろう。この年代観は、「中細形C類銅劍」・中広形銅劍・扁平鋤式古段階を、北部九州の中広形銅矛・中広形銅戈の前半並行（中期末～後期初頭、IV期中頃）とする吉田広氏説より1時期繰り上げており、銅矛との並行関係で表現すれば中細形c類銅矛並行となる。その細かい差異を捨象すれば、吉田氏も私も中細形銅劍c類をIV期以前に収める点で一致している。

神庭荒神谷遺跡第1次調査の直後に、近藤喬一氏が有名な青銅祭器2段階説を提唱した。<sup>30</sup> 第1段階（II～IV期）には西日本各地で銅鐸と武器形祭器（劍・矛・戈どれでもよい）を農耕儀礼に併用した。第2段階（V期）には各地が銅鐸か武器形祭器どちらか一方を選んで祭祀儀礼の具体的対象物とともに巨大化させた。具体的には、北部九州と山口・四国の西半部に広形銅矛・播磨以東の近畿と四国の東半部に近畿式銅鐸、三河・遠江に三遠式銅鐸、広形銅矛と近畿式銅鐸で閉まれた瀬戸内海に平形銅劍・出雲を中心とする日本海側に出雲型銅劍（中細形銅劍c類）が成立するという。この説によれば中細形銅劍c類はV期になってしまのである。ところが、近藤氏が第2段階に含めた平形銅劍や中細形銅劍c類に銅鐸との共伴例があることがすでに氏の仮説を危うくしているうえに、上で検討したように、平形銅劍や中細形銅劍c類の製作年代が扁平鋤式銅鐸の年代を下らないという年代観自体が、そもそもは、複数型式の青銅祭器の共伴と言った曖昧な根拠からではなく、より確かな方法によって近藤氏自身によって提唱されたものであり、我々は近藤氏の1970年説を追認しているにすぎない。平形銅劍や中細形銅劍c類は、まさしく氏の1985年説の第1段階の産物である。

中細形銅劍c類がV期まで下らないことを補強するために、鉛同位体比法による青銅器原料產地推定法の成果を援用しよう。神庭荒神谷の中細形銅劍c類がV期の製品であれば、近畿式銅鐸・三遠式銅鐸・広形銅矛にみられる画一的な華北の鉛を含むはずである。ところが実際に神庭荒神谷のc類の鉛同位体比は、外縁付銚式～尖線付銚II式と同様の広範な広がりを示し、非画一的な華北の鉛を含むものが343点、朝鮮半島の鉛を含む物が1点、華北の鉛に朝鮮半島の

鉛が混ざった物が14点あるという。製作年代はV期まで下がりようがない。もっと単純に考えても、中細形銅劍 b類がII期後半～III期なのに、どうして c類がV期なのだろうか。不思議である。

もっとも平形銅劍や中細形銅劍 c類の使用年代をV期まで継続させ、V期においては広形銅矛・平形銅劍・中細形銅劍 c類・近畿式銅鐸・三連式銅鐸の分布圏が併存していたとする説の出現が予想される。この場合、中細形銅劍 c類の使用地域ではIV期中頃以降、平形銅劍の使用地域ではIV期末以降、青銅祭器の新規導入あるいは新規製作は途絶し、中細形銅劍 c類や平形銅劍を延々と伝世使用したことになる。しかしこれに述べるように神庭荒神谷遺跡の中細形銅劍 c類にその可能性は認め難く、さらには香川県瓦谷遺跡のc類を含む遺物は製作年代の並行する器種の集合、島根県志賀奥遺跡・高知県波介遺跡の資料はc類と並行ないしやや古い器種との集合で、長期の伝世は考えにくい。近藤喬一氏も、平形銅劍には言及していないが、中細形銅劍 c類については使用期間が短いと再三強調しており、これは支持できよう。<sup>(24)</sup>

#### 製作場所

中細形銅劍 c類の製作地の直接的着手がかりはない。後続型式の可能性があるものもあるが製作地は不明である。それでは先行する型式の製作地はどこか。中細形銅劍 a類は佐賀県千代田町姫遺跡・兵庫県尼崎市山能遺跡で出土している。中細形銅劍 b類は鋳型の出土例はないが、出土数からみると a類同様に北部九州・畿内での製作が推定できる。すると c類もそうなりそうだが、事はそう単純ではない。

本書第4章第1節2A(3)で検討したように、中細形銅劍 c類の「理念型」の許容範囲が広いのは、型式学的に先行する b類の許容範囲が相対的に狭いことから、c類の段階で生じた現象とみられる。その背景としては、幾つかの考え方ができる。① b類と c類は、銅劍製作の伝統のある同一地域で連続的に製作されたのだが、c類の段階で規範が揺らいでしまった。② b類と c類は、銅劍製作の経験のある別地域で製作されたが、c類の製作地において c類の段階で規範が揺らいでしまった。③ b類と c類は、銅劍製作の経験のある別地域で製作されたが、c類の製作地の方が、b類の製作地よりもともと規範が緩かった。④ c類が銅劍製作の経験の無い地域で製作されたため、銅劍の形状かく有るべしという規範がそもそも無かった。

多少具体的に言えば、c類の製作地が、①は北部九州ないし近畿、②は瀬戸内海沿岸地域で中細形銅劍 b類以前の銅劍の製作が行われていた場合の瀬戸内、④は当面神庭荒神谷の地元出雲が考えられるが、瀬戸内海沿岸地域で中細形銅劍 b類以前の銅劍の製作が行われていなかつた場合には瀬戸内も入る。①～④のうち、蓋然性が強いのは①・④だと考える。

ここで別の観点を導入しよう。馬淵久夫・平尾良光氏の鉛同位体比研究の成果によると、銅鐸では型式変化と鉛産地の推移がきれいに対応している。<sup>(25)</sup>ところが、北部九州出土の青銅武器

類では銅鐸ほどは鉛産地と型式の推移とがきれいに対応しない。<sup>(39)</sup>

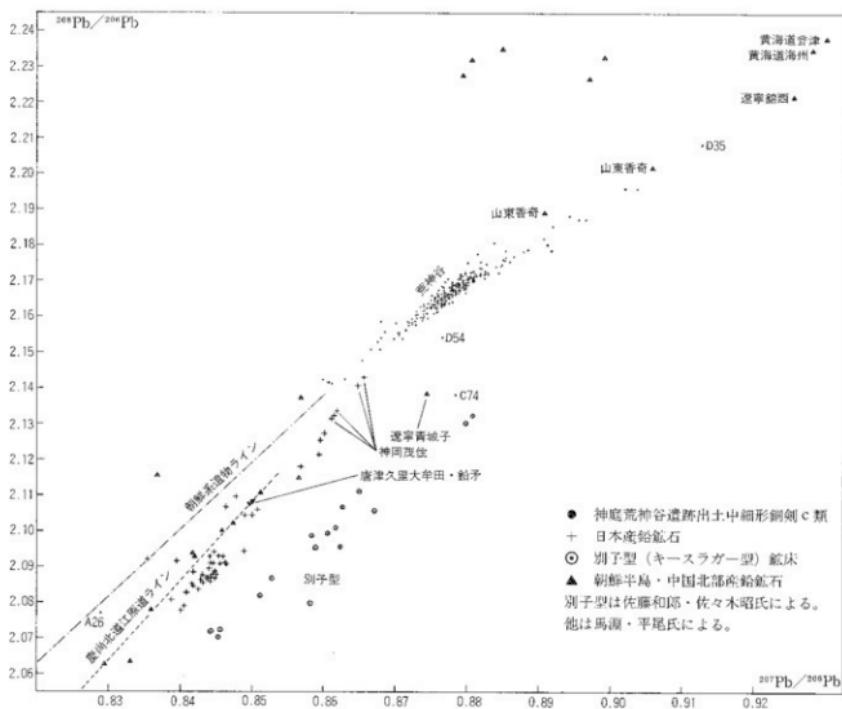
①細形銅剣には朝鮮産も見られるが、非画一的華北産が多い。しかもすでにII期の例に見られる。②中細形以降の型式には華北産が多いが、中細形の剣矛戈のみならず中広形銅矛にも朝鮮産の鉛が見られる。

つまり北部九州では、II期からIV期後半まで朝鮮産と華北産が併存しており、中細形以降華北産の鉛が多くなるとはいえ、中広形銅矛の新しいものまで朝鮮系鉛を用いたものがある事を考えると、當時朝鮮系鉛も併存する環境にあったと見られる。北部九州と銅鐸製作地で輸入原料の入り方が異なったか、古い青銅器の鉛漬しの存否が異なったかであって、しいて言えば後者の可能性が大きいと思う。

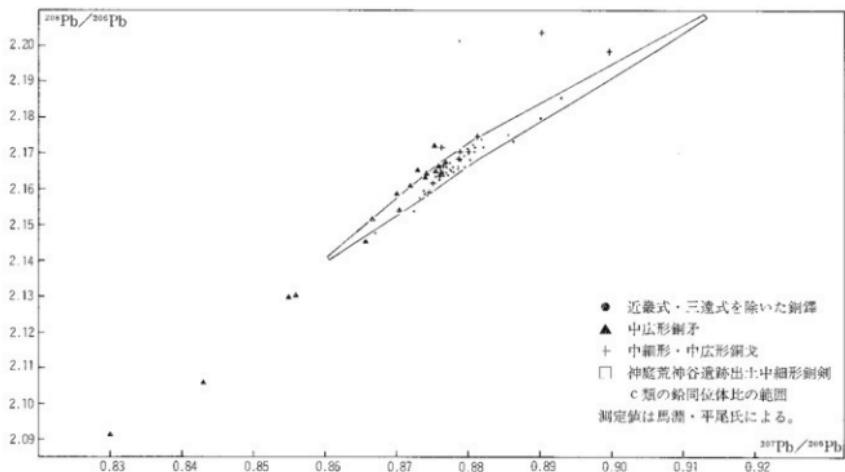
では中細形銅剣C類はどちらに近いであろうか。中細形銅剣C類の時期は、銅鐸では扁平錐式古段階にはば並行し、近畿を中心とする銅鐸製作圏では非画一的華北産鉛が用いられ朝鮮半島の鉛が残っていない時期にあたる。中細形銅剣C類が銅鐸製作圏内の作品なら華北の鉛のみになるはずである。にもかかわらず、中細形銅剣C類には、朝鮮半島の鉛を含む物1点、華北の鉛に朝鮮半島の鉛が混ざった物14点が存在する。そうすると、中期後半（IV期前半）に至っても朝鮮半島の鉛が残る地域の方が蓋然性が高い。製作地の候補のうち銅鐸製作圏は脱落するであろう。問題は銅鐸製作圏外の中国四国地方での状況であるが、この地域で確実に製作された青銅器の鉛同位体比はほとんど不明であるから、ここで視点を変えよう。

#### 鉛の由来—製作地との関わりで

馬淵・平尾氏らが発表した神庭荒神谷の中細形銅剣C類の鉛同位体比は、A式図において銅鐸の鉛同位体比と似た直線状に長く伸びる分布を示す（第94図）。しかしそのうち、華北の鉛<sup>(207)Pb/206Pb>0.870</sup>を含むものに限っても、華北の鉛を含むと発表された50点を越える銅鐸の鉛同位体比の範囲<sup>(207)Pb/206Pb<0.8929</sup>を、すなわち銅鐸製作圏が入手した鉛の同位体比の範囲を、低い方にも高い方にも越えている。測定された華北の鉛を含む銅鐸は外縁付錐1式から突線錐5式まで含み、製作期間は300年を超え、製作地もかなりの数に及ぶと思われる。それに対して神庭荒神谷の中細形銅剣C類は、同一箇所で「同時期」に製作された（既述）にもかかわらず、なぜそれらを超える鉛同位体比の広がりを示すのか。すでに平尾良光氏らが述べているように鉛同位体比の差が大きい「各種材料の混合」の結果を見るのが最も理解し易い。銅鐸に含まれる華北産鉛より低い同位体比の成因は、前項で触れたように、製作に際して銅鐸よりも朝鮮系鉛との混合の機会が多かったことであろう。高い方の成因は私には判らないが、A式図で両軸とも大きい値をとる中国北部あるいは朝鮮半島北部の鉛との混合であろうか。とくに、<sup>(207)Pb/206Pb>0.882</sup>の範囲に注目すると、分布が右上へ向かって長く伸びている点からみて、遼寧省錦西・山東省香奇・黃海道海州・黃海道蓋津の諸鈍山にみられる中国北部な



第94図 神庭荒神谷出土中細形銅劍c類と日本・朝鮮・中国の鉛鉱石の鉛同位体比



第95図 銅鐸・銅矛・銅戈の鉛同位体比

いし朝鮮半島北部の鉛との混合の可能性はないのであろうか。もっともその点については、銅鐸でも0.8821を境に線状分布の傾斜が変わり0.8929の個体もあるから同様である。ただし、同じ傾斜で銅鐸よりも $^{207}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$ の値が大きいものがう点あるから、混合の度合いがより大きい材料だと言えないだろうか。素人考えなので専門家のご教示をお願いしたい。

他方、神庭荒神谷の中細形銅劍 C 類の鉛同位体比を、北部九州圏で製作された中広形銅矛( $^{207}\text{Pb}/^{206}\text{Pb} < 0.8763$ )、中細形・中広形銅戈 ( $0.8747 < ^{207}\text{Pb}/^{206}\text{Pb} < 0.8814 \sim 0.8996$ )のそれと比較すると、神庭荒神谷の銅劍には $^{207}\text{Pb}/^{206}\text{Pb} > 0.8814$ の個体が多いことが判る。もっとも、北部九州製の銅矛・銅戈では0.8814以下に収まるものが多いものの、0.8903・0.8996の個体もあるから、神庭荒神谷の C 類の原料が北部九州圏に入った原料と異なるとは言い切れない。しかし神庭荒神谷の C 類の直線状に細長くなる分布は、北部九州製銅矛・銅戈のやや面的な広がりをもった分布と異なった趣があり、註(4)に述べた視点から、中広形銅矛と中細形銅戈・中広形銅戈の鉛同位体比を区別し、それぞれを神庭荒神谷の C 類の鉛同位体比と比較すると、神庭荒神谷の C 類と他の 2 者の分布の形の違いをさらに強く感じる。

総じて、神庭荒神谷の C 類の鉛同位体比は、華北系が細長い線状分布を示す点では銅鐸に近く、朝鮮系鉛との混合が多い点では北部九州製青銅器に近い。銅鐸の鉛と北部九州製青銅器の鉛との混合に近いが、A 式図において縱横両軸とともに傾が大きい右上方向への線状分布の伸びが大きい点では銅鐸とも北部九州製青銅器とも違う特徴を示し、混合だけでは説明がつかない。この点に注目すれば、前項で神庭荒神谷銅劍の製作地の候補から銅鐸製作圏を落としたが、北部九州圏とも言い難くなり、前項で述べた中細形銅劍 C 類の「理念型」の揺らぎの成因とも合わせると、出雲ないし瀬戸内海沿岸部、あえて紋れば出雲での製作を考えて良いと思う。ただこのように考えると、銅鐸製作圏が北部九州圏と別の鉛入手ルートを有し、出雲がさらに違うルートに依ったと主張するのと同然となるから、鉛同位体比の分布型の差からそこまで読み取れるのかいささか躊躇があり、専門家のご教示をお願いしたい。

## 日本産鉛の有無

神庭荒神谷の C 類の原料が鉛同位体比の差が大きい「各種材料の混合」である場合、次に問題となるのは、久野雄一郎氏が主張するように、混合された材料の中に日本産の鉛が含まれているかどうかである。久野氏は、A 式図の $^{207}\text{Pb}/^{206}\text{Pb} = 0.882$ 付近より右側で直線状の分布の傾斜が低くなる点について、その原因を別子型（キースラガ一型）鉛の影響と見ている。しかし、華北の鉛と別子型鉛の混合なら、 $^{207}\text{Pb}/^{206}\text{Pb} = 0.882$ より右方でのみ傾斜が低くなるというような形でなく、華北の鉛の範囲と別子型鉛の範囲の間に多数の点が面的に分布すると言う形になるのではなかろうか。ただ、いずれにせよ神庭荒神谷 C74 は山崎氏の示した別子型鉛の範囲に入り、D54 は華北と別子型の間に来る。馬淵・平尾氏は C74・D54 についてまったく触れて

おらずA式図からも除外しているが、久野氏は別子型の影響と見ている。A式図を見る限りそれを否定できないが、混合の相手を別子型と限定できるのか、馬淵・平尾氏の御見解を伺ってみたいものである。

また久野氏は岐阜県神岡鉱山茂住鉱区の鉛が、神庭荒神谷出土青銅器群の鉛同位体比を同一のA式図に示した場合の直線状点列のほぼ中央に位置することから、神庭荒神谷出土の青銅器群の鉛は、「中国、朝鮮半島産鉛が数種類、神岡鉱山鉛とともに使用された、そして、神岡鉱山鉛の使用頻度が増すにつれ、混合の結果、神岡鉱山鉛の鉛同位体比に近い値を示す青銅器が増加した」と見ている。しかし問題もあって、茂住鉱区の鉛は点列のやや下側にはずれており、横軸でそれより大きい値をとる点列の方向が茂住鉱区の点の方へは向かっていない。また日本列島にあまたある鉛鉱山のうち、神岡鉱山茂住鉱区の鉛を弥生時代に特に用いていたとしなければならず、さらに「島根県下の鉱山の自然銅」使用の主張へと考えを飛躍されている点も疑問だ。<sup>(50)</sup> 島根県下の自然銅に含まれる鉛の同位体比は茂住鉱区と同じなのであろうか。

神庭荒神谷遺跡出土青銅器群と直接の関連はないが、最近、平尾氏も弥生時代における日本列島産鉛の使用を認めているから、それに言及しておきたい。問題となるのは、佐賀県久里大牟田遺跡出土の鉛矛の鉛、および福岡県八女市野山遺跡出土鉛矛の鉛である。久里大牟田の矛が鉛製で、後年馬淵・平尾氏が日本産鉛とする範囲に入る鉛であることは、1987年にすでに山崎一雄氏によって図中に示されていた。しかし山崎氏の論中では「後漢鏡と同じ」すなわち馬淵・平尾氏の言う華南産の鉛と記されていたため、他の研究者の注意を引くに至らなかったようだ。その後平尾氏が再分析し日本産鉛としてあらためて発表した。しかし私はこの鉛が馬淵・平尾氏の言う「慶尚北道・江原道ライン」=「新羅ライン」<sup>(51)</sup> の鉛ではないかと密かに考えている。馬淵・平尾氏の発表したデータに照らしてその可能性が多分に有るにも関わらず、平尾氏が日本の鉛だと速断したのは理解に苦しむ。勇み足ではなかろうか。もっとも、慶尚北道・江原道ラインの鉛は日本の鉛と同位体比が一部重複しているから、弥生時代に慶尚北道・江原道ラインの鉛が用いられていれば、弥生時代の出土青銅器に用いられた鉛において、日本・朝鮮・華北の鉛が截然と区別できるとする馬淵・平尾氏の持論が崩れることになり、また慶尚北道・江原道ラインの鉛は日本には7世紀でないと出現しないと言う見通しから、弥生時代における使用の承認に躊躇されたのだと思う。ただ考古学的脈絡から見れば、朝鮮半島では久里大牟田遺跡の鉛矛（III期）に並行する時期以前に、すでに青銅器文化の中心地は忠清道・全羅道の西海岸部から慶州を中心とした東海岸部へとシフトしており、それに伴って鉛の採取地も西から東へ移ったと速断は出来ないものの、慶尚北道・江原道ラインの鉛が使用され始めた可能性が無いとは言えないだろう。久里大牟田の鉛矛には節帶に複合鋸歯文があり、慶尚北道大邱市新川洞遺跡出土矛に類似するのも暗示的である。

そもそも馬淵・平尾説は鉛同位体比の产地による差の存在、日本列島・朝鮮半島・華北・華

南の鉛の同位体比が区別できることを前提としている。ところが馬淵・平尾氏自身が1987年に示したように、日本・朝鮮半島・中国各地の鉱山から得た鉱床鉛の同位体比は、それぞれ全体同士を比較すると、互いの重複部分が多く截然とは区別できない。同様の事実は、久野雄一郎氏<sup>(36)</sup>・佐々木昭氏<sup>(37)</sup>も述べている。そもそも馬淵・平尾氏が「華北の鉛」と言う場合、その同位体比の範囲は、現実に華北で採れる鉛全体の同位体比の範囲を意味してはいない。全体の内で、例えば前漢時代に、鏡などの文物の製作に実際に使用された鉛の同位体の範囲を、考古遺物から限定的に抽出したものである。そのために、ある地域で特定の時期に作られた考古遺物が示す鉛同位体の範囲が、その地域の既知の鉱床鉛の同位体比より狭かったり、ずれていったりする。最初から考古学的脈絡を参照することにより本来鉛同位体比の重複部分が多く有る中国・朝鮮・日本の鉛の中から、特定の時期に使用され互いに同位体比が重複しない部分を切り離した形になっているのだ。馬淵・平尾説の巧みさと危うさはそこに由来する。

弥生時代における日本産鉛の使用の有無の問題に戻ると、日本産鉛が、その時期に華北や朝鮮半島で採れた鉛と截然と区別できるのか。馬淵・平尾氏が考古遺物の鉛の識別に用いる図に示す「日本産鉛」の範囲は、日本列島産の鉱床鉛の全範囲よりは狭い。全範囲を用いても、華北の鉛とは重ならないが、朝鮮系遺物ライン、慶尚北道・江原道ラインとは一部重なり、神岡鉱山茂住鉱区の鉛は華北産・朝鮮産の混合物と、A式図で若干下にずれるものの近い。

### 鉛同位体比と青銅器の年代

「製作場所」の項で述べた事と関連して、鉛同位体比研究を応用した神庭荒神谷青銅器の年代観に關する新説に触れておきたい。馬淵氏らは神庭荒神谷出土の銅鐸・銅矛に銅剣よりも「朝鮮系の鉛を含むものが多いことから、銅剣よりも製作時期が若干早いように思われる。」と述べている。<sup>(38)</sup>これによって氏らが、銅鐸の鉛同位体比の推移を敷衍し、武器類でも朝鮮系の鉛をより多く含むものがより古ないと図式的に理解している事が判る。しかし、氏らは銅鐸と異なり北部九州製の武器類では朝鮮系鉛が遅くまで残る事を見落としている。銅鐸や1・2号銅矛（中細形銅矛a類）はともかく、他の中広形銅矛の年代を銅剣より先行させる見解には従えない。神庭荒神谷4・5・10号銅矛の鉛が朝鮮系であっても、それらを華北の鉛を含む3・6・7・9・11・12・14・15・16号銅矛より古いとは言えないし、ましてや同じく朝鮮系の鉛を含む菱環鉄式・外縁付鉢1式銅鐸並行まで遡らせ得るはずもない。

平尾氏らは鉛同位体比と化学組成が一致することを根拠として、5号銅鐸とA26とが「同一時期に同一工房で、ひとつの溶融るつぼで金属を溶かし、二種類の資料を鋳造したと考えることもできる。もう少しゆるく考えれば、同一組成の材料を手に入れることのできた集団、あるいは関連した工房が時間的に少々のずれがあって製作したとしても良い」と述べた。また久野雄一郎氏は鉛同位体比で「銅剣とクラスターをつくる銅鐸、銅矛がいくつか存在するので、そ

れらは銅劍と同じ原料で鋳造された。したがって、同じ場所、同時期に鋳造されたとかんがえる」と述べた。<sup>(66)</sup> いずれも從来の年代観を否定している。しかし、考古学的方法とそれなりの根拠に基づいて求めた年代観を、これらの自然科学的見解を受けてただちに改訂したり撤回する必要はない。私は、菱環鉢式銅鐸を中細形銅劍C類並行まで下げたり、中細形銅劍C類を菱環鉢式銅鐸並行まで上げたりするのは不可能と考える。では鉛同位体比や化学組成の一一致の背景は何か。菱環鉢式～外縁付鉢式古段階並行期には、北部九州から近畿に至るまで朝鮮系原料が共通して流布していたと考えられる。本項で述べるように、中細形銅劍C類の製作地では朝鮮系鉛が扁平鉢式並行期まで残るが、これが古い青銅器の鋳潰しに由来するなら、5号銅鐸とA26のように時期と地域を隔てて同じ原料から作られる物があっても不思議ではない。

### 埋納坑内の配置

馬淵氏らは神庭荒神谷の銅劍の鋳造場所について、出土時の並び順と同位体比に関係があることから、A26以外の357本が神庭荒神谷のないしその付近で鋳造され、鋳造順に並べたと推定した。<sup>(67)</sup> その関係とは、①鉛同位体比の度数分布を列ごとに描くとA列のみが他と異なる、②各列の一本ずつの<sup>207</sup>Pb/<sup>206</sup>Pbを並び順にプロットすると蛇行する人の行列状を呈する、の2点である。しかし、並び順と鉛同位体比の関係を説明するために、氏らが想定した銅劍鋳造時の「操作」にはいささか非現実的な部分がある。

同位体比が誤差の範囲で一致するものが無いことから、湯を一本ごとに用意したとする。しかし鋳型を複数並べて一回に複数鋳造しないのだろうか。一つの湯の中の場所によって同位体比が異なる場合がないのか、一度測定をお願いしたい。

「鋳造されると1本ないし数本毎に現地に並べていった」とする。すぐ並べるというニュアンスであろうか。しかし、鋳型からは必ずしてすぐ並べることは有り得ない。研磨に相当の日数が必要。仕上げて並べるまで次の鋳込みをしないのだろうか。次々と鋳込んで研磨工程に回ってくれば鋳造順は乱れてしまうだろう。各列の一本ずつの<sup>207</sup>Pb/<sup>206</sup>Pbを並び順にプロットした図を見ると、連続と同位体比を少しづつ違えながら蛇行状に続くというよりか、同位体比が近い個体が数点続いたあと、値が飛ぶ現象がかなり見られる。また、馬淵氏らはA列に<sup>207</sup>Pb/<sup>206</sup>Pb<0.878の個体が多いことをA列の特殊性として強調するが、0.875<<sup>207</sup>Pb/<sup>206</sup>Pb<0.882が最も個体数の多い標準値として、それから大きくはずれる個体は、A1～A22、A31～34以外にも、B1～7、B17～33、B44～51、B59～65、B71～79、B105～108、C54～64、C70～78、C86～91、C103～109、D1～5、D35～42、D52～60、D71～75の範囲に偏る傾向がある。ただし、各範囲の中で標準値の個体とそうでない個体が無秩序に混在している。こうした現象からみて、ある時点に作られたX本と、次の時点に作られたY本が別の束にくくられており、埋納に至るまでその状態で保管され、埋納に際して紐が解かれたので、結果的にX本がまとまって

近くに置かれたという想定が可能だ。もちろんその場合でも、X本の中での鋳造順は乱れていいであろうし、別の時点製作のZ本の一部が混じったり、並べる順番としてはX本よりY本の方が先という可能性は排除できない。

さらに注意すべきことがある。銅剣の置き方は、A・B列が「うちちがえ」、C・D列が「峰そろえ」であるから、A・B列とC・D列とで配置担当者が異なったのか、C・D列を先に「峰そろえ」で置いてからA・B列を「うちちがえ」で置いたのかはともかく、A・B列とC・D列とをそれぞれペアで考えるべきであろう。久野雄一郎氏は、同じ鉛同位体比を示す個体が別の列にも存在するため、「鉛同位体比と並べ順序とは無関係」とする。たしかにすぐ近くに並んではいないから鋳造順に並べてはいないことの傍証となるのだが、久野氏が示した14組は、A・C列間1組、B・C列間2組があるものの、B列同士2組、C列同士1組、D列同士3組、A・B列間3組、C・D列間2組で、A・B列内、C・D列内に収まる方が多い。したがって、紐でくくったX本を、たとえばD列にすべて並べた場合と、C列とD列とに渡って並べた場合とがあったと考えるべきであろう。

馬淵氏らは、鋳造順に並べているという認識に基づいて、鋳造が神庭荒神谷の中または近隣で行われ遠隔地からの運搬ではないと考えたが、上記のように考える場合には、遠隔地からの運搬の可能性は排除できない。総数がいかに多くても、紐で数本ずつの束にくくってあれば、運搬者の頭数さえ揃えればどこにでも運べる。馬淵氏らの鋳造場所推定法は残念ながら十全ではない。私は先に出雲での製作を認めたが、それが神庭荒神谷の近所と特定はできないと思う。

### 鋳型の数の多さ

本書第4章第1節2A(2)で示した、銅剣の鋳型数が200を超えるという所見には疑問を抱く人がいるであろう。同範品識別作業を行った私自身がここまで多いとは思っていなかった。1鋳型平均の鋳造本数は1.31本であって2点に達しない。ある研究者から、「200以上は多すぎるから同範認定の基準を多少ゆるめてでも鋳型数を減らせ」と言われた。彼は、1鋳型で5点作れる一方で、1本しか作っていない鋳型が多数あるのは不合理だという。現在同範品が未発見の個体群中からさらに同範品が検出できる可能性、あるいは本米358本よりはるかに多数の剣が製作されておりその中に同範品があった可能性は否定できない。それでも1鋳型1個体の場合が多ければ、それこそが神庭荒神谷の銅剣を製作した工房の技術水準を示してはいないだろうか。安定して同範品を作れるに至っていないのだ。同範認定基準をゆるめて、かりに現状で同範品が無いと認識し1点で遊離しているものを、すでに同範品があると判明している個体や、他の遊離した個体と繋めても、相当数の鋳型が用いられた趨勢は変わらないだろうし、そうして無理に繋めた個体群が「同範品」の集合体でなくなることは確かだ。同範品5点の事例は銅鐸にもある。1鋳型あたり5点作れば鋳型は72個ですむが、72あるいは100なら妥当で多

すぐると見るか否かは、弥生時代青銅器製作の技術的側面が断片的にしか伺えない現状からすれば、現代人研究者の感覚の問題に帰着する。弥生人は我々の合理性に合わないことをたくさんしている。358点の銅劍の出土自体がそもそも1984年以前の「常識」はずれだったのだから、鋳型数が200を超えていても常識はずれだと誰が言えようか。多数出土している銅矛で同范品がどれほどあるか確認せよとも言われた。たしかに銅矛の同范品もわずかに知られてはいる。しかし、中広形銅矛にせよ広形銅矛にせよ、「同時」に同一地で作られた可能性が高い神庭荒神谷の銅劍と異なり、製作期間も長く製作地も複数ある。神庭荒神谷と同条件での同范品識別など出来るはずがない。吉田広氏が執筆したように、我々は、1 mm単位の突起位置毎に、誤差を前後2 mm以内と想定して、その範囲に含まれる個体の実測図をすべて重ね合わせた。突起位置18.0 cmの個体は、他の70個体と重ねたのだ。研磨の影響が小さい突起位置・脊幅・脊厚・元部外形ラインの4点に特に留意したのは言うまでもない。軒瓦の場合、同范品でも焼成時の収縮率に個体差が大きいので、法量がばらつくのは周知のことだ。青銅器の場合、わずかに法量に差がある相似形の処理はどうすべきか。同范の可能性も否定は出来ぬが、文様がなく范傷も残らない本型式の場合、断定する根拠がない。その程度の類似性の場合、第18図において実線ではなくとも、破線では囲んであると理解して頂いて良い。もちろん我々は、我々の同范品識別作業に誤りがあれば、改訂するにやぶさかではない。しかし、200は多すぎるといった感覚的感想ではなく、本書で公表した実測図、それで小さければ島根県教委所蔵の原図によって、さらに不明の点が有れば現物同士を突き合わせる事によって同范品認定作業を追試し、その結果に基づいた対案を是非ともお出し頂きたい。その上で互いの意見を戦わせるのでなければ生産的議論にはならないし、より妥当な対案の出現こそ、叩き台を作った私達が待ち望む事なのである。

### 青銅器の入手と埋納

神庭荒神谷遺跡の銅矛には中細形銅矛a類、中広形銅矛a類、同b類、銅鐸には菱環鉢1式、外縁付鉢1式、同2式が含まれる。各型式がそれぞれの製作時期内に順次出雲に流入したのか、銅鐸と銅矛がそれぞれまとまって流入したのか問題があるが、製作された順に流入したとすると、私の年代観では、①菱環鉢1式鉢→②外縁付鉢1式鉢→③外縁付鉢2式鉢・中細形銅矛a類→④中細形銅劍c類→⑤中広形銅矛a類・同b類の順となる。③のなかでの外縁付鉢2式鉢と中細形銅矛a類の先後は微妙で決め難い。中広形銅矛a類は⑤に入れたが、中細形銅劍c類と重複する時期に入っている可能性はある。

菱環鉢1式の5号銅鐸、外縁付鉢1式の2・3・4・6号銅鐸は近畿系である。1号銅鐸は外縁付鉢2式に含めたが、近畿製か北部九州製か説が分かれている。北部九州製とすれば、神庭荒神谷には③の時期以降、近畿系の青銅祭器が入らなかったことになる。しかし出土全体で見れば、外縁付鉢2式（志谷奥1号・熊野）、扁平鉢式占段階（志谷奥2号）があるから、②の

時期で出雲と近畿との関係が切れたとは言いにくい。扁平鉢式新段階以降の銅鐸が出土していない点は、隣接地域の石見（扁平鉢式古段階・新段階、突線鉢1式がある）、伯耆（外縁付鉢1式・2式、扁平鉢式古段階・新段階がある）に比して異なる様相ではあるが、銅矛の入手開始がただちに近畿系銅鐸の流入の途絶を結果したのではない。

神庭荒神谷遺跡第1次調査区の銅劍群は、他の器種や他の型式が混じらず、長期の使用の痕跡が無く、しかも本書第4章第1節2A(2)で検討したように同范品を多数含むことから、同一箇所で「同時期」に製作され、その製作からあまり長い時間を経ずに埋納された可能性が高い。各地からの集積あるいは、いったん分配した後の再集積とは考え難い。これに対して、第二次調査区の青銅器群は、器種・型式が複数に渡り（中細形銅矛a類、中広形銅矛a・b類、菱環鉢1式銅鐸、外縁付鉢1式銅鐸、外縁付鉢2式）、製作地・製作時期が異なるものの集合である。そうすると隣接する二つの青銅器群の埋納時期の関係はどうなるのだろうか。銅矛・銅鐸の埋納はもっとも製作時期が下る中広形銅矛b類の年代（IV期後半）に近い頃と考える。中細形銅劍c類の埋納が製作後すぐであればIV期前半に収まるだろう。ただし後述する理由から、中細形銅劍c類の埋納を若干下げて銅矛・銅鐸とはほぼ同時期とする可能性も残しておきたい。

春成秀爾氏は、1992年には「埋納時期は、銅劍は中細形c式を参考にすれば、弥生III期後半以後、前一世紀後半以後、銅矛・銅鐸はそのうち最も新しい中広形銅矛の時期とすれば、弥生IV期、一世紀後半～二世紀初め」、すなわち銅劍→銅矛・銅鐸の埋納順としていたが<sup>(17)</sup>、1995年には銅矛・銅鐸→銅劍と変えてしまった。<sup>(18)</sup>それを可能にしたのは中細形銅劍c類の年代観の変更である。1992年には中細形銅劍c類を中広形銅矛より1時期古く置いていたが、1995年には銅劍の年代を神庭荒神谷で出土した銅矛の中で最も新しい「中広形b式」<sup>(19)</sup>より下らせてしまった。春成氏は青銅武器類の年代観について銅鐸の細分型式との並行関係で示しているが、1992年説と1995年説との間で、銅劍と銅戈は銅鐸1型式分離り下げ、銅矛については銅鐸1型式不分ないしその半分繰り上げることによって、上記の埋納年代観の変更を行ったのだ。こういう所で青銅器の細かい年代観が効いてくることがお判り頂けよう。総じて、春成氏の説では、青銅器の埋納や祭りの終了に関する説が先にあって、青銅器の製作年代を強引にそれに合わせる、あるいは既存の年代観諸説の中から都合の良いものを場当たり的に選択する傾向が見られる。春成氏のシナリオは、……①出雲勢力が近畿勢力のシンボルである銅鐸と九州勢力のシンボルである銅矛を用いた祭祀をやめて、両地域との関係を絶ち、②その後自前のシンボルとして、多量の銅劍を入手し配布を始めたが、何らかの非常事態で配布を中止し埋納し、それをもって出雲での青銅器祭祀が終了した……であるから、銅劍の製作年代や埋納年代が銅矛より新しくなければ困るのである。

先に述べた 青銅器の入手順についての私見から見れば、銅鐸の入手を通じた近畿との関係は統けつつ、他方で銅矛を入手し北部九州とも関係を形成し、その渦中で自前の中細形銅劍を

多景に作るという一筋縄では行かぬ複雑な動きが伺える。事態の推移が春成氏説ほどすっきりと説明できぬが、事態が複雑ではなかった、単純明快であったと、最初から決めてかかる必要はない。埋納の時期は、銅鐸・銅矛がIV期後半で銅劍がIV期前半か、と先に述べたが、銅劍の埋納時期が下がる可能性も考えたのは、次の理由による。銅劍埋納坑と銅鐸・銅矛埋納坑の高さは、青銅器を並べた床面の標高で50cmの差があるが、現地ではその差が気にならず、ほぼ同じ高さに並ぶと言って良い。これは意図的な設定だろう。一方の埋納坑は近畿にせよ北部九州にせよ出雲にとって外部世界から来た祭器の場、他方は内部世界で新たに生み出した祭器の場、両者の米歴の差は明瞭に意識されており、しかと表現される必要があったと考えたい。もちろん銅劍埋納坑が先に造られ、銅鐸・銅矛埋納坑がそれと揃えて後から造られたとしても不都合はないが、最初から2基一対で設定されたと考えてはどうか。

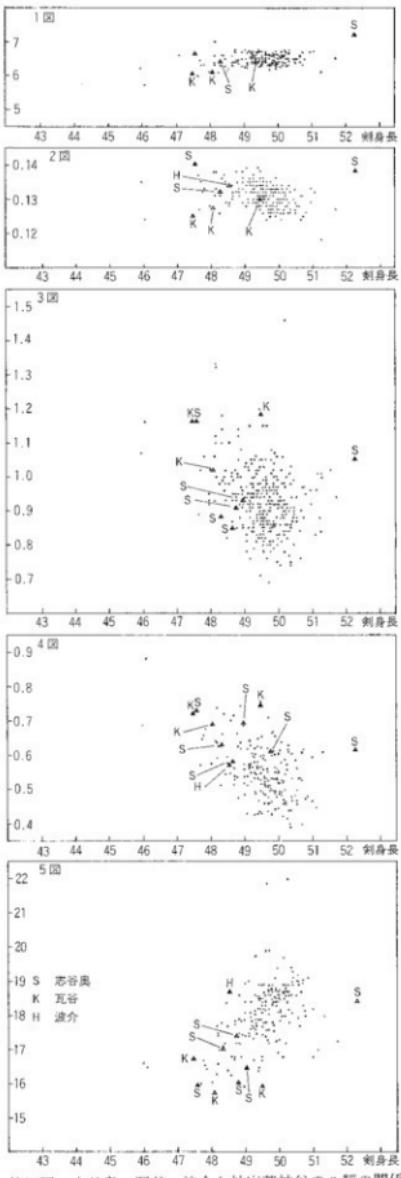
祭器を送り出す側の事情も考慮すべきだろうが、この地に馴染みの銅鐸のみならず、中細形銅矛という中国地方では稀な九州製祭器をも複数受け入れていることを勘案すれば、何か呪力の増強を図るべき差し迫った事情があったのだろう。しかし、それら外米の祭器だけではその事態の解消には至らず、自分達固有の祭器たる事を形自体として示す祭器、つまり、銅鐸でも銅矛でもない第三の祭器を急速創作し、しかも異常な数投入するに至った、と考えてはどうか。中細形銅劍c類の製作期間はあまり長くなかったと思うが、神庭荒神谷に埋納された個体群を含む製品の製作1回で終了してしまったというわけではない。次項で述べるように、神庭荒神谷の個体群と志谷奥・瓦谷・波介の個体群とは、同時の製品ではなさそうで、若干の時間的深みの中で数回の製作がなされ、各所に製品が分配されている。ただ神庭荒神谷においては、銅劍だけでは足らず、さらに引き続き九州から中広形銅矛をまとめて導入していることから見て、中細形銅劍c類の創作は外米の祭器の排除を結果するものではなかったし、また事態は容易ならざるものがあったことが伺える。剣形祭器は余り効き目がなかったのではないか、とまで言うと言い過ぎか。

## 分 布

神庭荒神谷遺跡の発見後、中細形銅劍c類の分布のあり方にに関して出された幾つかの仮説の中に、A列だけが34本と少ない事に注目し、島根県志谷奥遺跡の6本などは神庭荒神谷遺跡のA列から抜かれた、というものがある。第1次調査時、A列だけが少ないと判明した時点で、我々調査員は、抜き取り痕跡の有無を平面的にセクションでも細心の注意を払って確認した。一度埋納した後で再度部分的に穴を掘って抜き取ったのであれば、抜き取り痕跡が検出できるはずであるが、無いと認識した。現場での認識が絶対正しいなどとは言わないが、その認識は今も変わらない。抜き取り説の妥当性の判定上、茎に刻まれたX印は有効である。神庭荒神谷のc類では、ほとんどの個体でいずれかの面にX印が有り、確実に両面とも無しと断定できる

のは数例にすぎない。したがって×印を刻むタイミングが、「鋳造→刻印→神庭荒神谷に埋納→余所にも配布」であれば、余所の出土品でも95%以上の確率で×印が有るのが普通だろう。しかし余所では知られていない。もっとも×印を刻むタイミングが、「鋳造→余所にも配布→神庭荒神谷に埋める直前に刻印」であれば、その限りではないが、その場合には、神庭荒神谷出土品と他遺跡出土品との形態の細かい比較検討が有効となる。

そこで、島根県志谷奥・香川県瓦谷・高知県波介のC類を神庭荒神谷と比較しよう。90頁の第20図にそれらのC類のT値を示した。志谷奥・瓦谷・波介のT値は、瓦谷8665（東博列品番号、T値=0.375）・波介（T値=0.384）を除くと0.322～0.357で、神庭荒神谷のT値の幅の下半で度数分布の少ない所に偏ることがわかる。第96図の1図には剣身長と元部最大幅実長、2図には元部最大幅実長を剣身長で除した値と剣身長との関係、3図には関部での脊厚実長と剣身長との関係、4図には元部最大幅部での脊厚実長を脊幅実長で除した値と剣身長との関係、5図には突起から関までの長さと剣身長との関係を示した。一見して明らかなのは、1～5図に共通して志谷奥・瓦谷・波介のC類には神庭荒神谷の分布域の縁辺部に偏る者が多いことである。もちろん神庭荒神谷の分布域内に入る個体もあるし、神庭荒神谷との間に明瞭な線が引けかもしれないから、神庭荒神谷と別の細分型式に分かつことはできない。しかし、神庭荒神谷と同時に鋳造され、そこから適当にピックアップされて余所に配布されたのであれば、こうした偏りは生じないであろう。志谷奥・瓦谷・波介



第96図 志谷奥・瓦谷・波介と神庭荒神谷のC類の関係

は神庭荒神谷とは異なった傾向を持った個体群と言え、まったく同時の产品ではないと考える。

春成秀爾氏は、出雲勢力が中・四国の諸集団に配布する予定で「新たに鋳造した約四〇〇本の銅剣」を入手・用意し、中・四国の諸集団に配布し始めたが、配布が中止され神庭荒神谷の地に約358本が埋納されたのであって、中細形銅剣c類の分布圏は未完成のまま形成を中止したと言う。これが先に述べた「鋳造→余所にも配布→神庭荒神谷に埋める直前に刻印」説とすれば問題がある。もっとも同論文の別箇所で、中・四国へ配布した剣と神庭荒神谷に埋納した剣の鋳造に時間差があるとの記述もあるので（春成前掲論文P218）、その場合には成り立つ余地がある。ただし分布圏が未完成で本來は中・四国の広域をカバーするはずだったとまで言えるのであろうか。中細形銅剣c類の「理念形」はA26ないしそれに近い形態の個体であって、b類を肥大させて突起位置を上げたものであった。c類の創作に当たっては、先行型式たるb類についての知識が必須だっただろう。b類そのものが出雲に入っていたかどうかは定かでないが、b類の主要分布地たる瀬戸内海沿岸地域からの情報の導入があったに相違無い。中細形銅剣c類が青川に至っているのは、そうした繋がりを逆に辿っての事だろう。春成氏はc類の分布の先端が高知県波介に達しているのを根拠に先の主張を行ったが、私には中広形銅矛が鹿児島県下原や他ならぬ神庭荒神谷に達し、中広形銅戈が朝鮮半島江原道に達し、大阪湾型銅戈が長野県北安曇郡に達している現象との区別が難しい。中細形銅剣c類は平形銅剣と同様にローカルな色彩が強い祭器で、仮に分布圏が未完成であったとしても、本来山陰を大きくは出ない範囲のもので、現状の分布（出雲～伯耆：神庭荒神谷・志賀奥・横田・イヅチ頭）はその主要範囲をカバーしていると思う。ただ神庭荒神谷に青銅祭器を埋納した集団の居住地となると、その範囲の中のどこかには違いなかろうが、神庭荒神谷に近い斐伊川下流域か、現在の松江市付近か、意宇川流域か、飯梨川流域か、はたまた日野川流域か、これらの地域の弥生時代集落の状況がまだ十分明らかになっていない現状で限定するのは、時期尚早だろうと思う。

「中細形銅剣c類の製作時期」の項で述べたように、神庭荒神谷第一次調査後、近藤喬一氏が唱えた青銅祭器2段階説は、弥生V期における広形銅矛・平形銅剣・出雲型銅剣（中細形銅剣c類）・近畿式銅鐸・三遠式銅鐸の排他的分布圏の併存を主旨とする。氏の作成した分布図は、概説書・図録類にも盛んに引用され広く流布している。しかしそれら5器種の年代観からみて、広形銅矛・近畿式銅鐸・三遠式銅鐸の製作時期は相互に重複部分があるものの、中細形銅剣c類・平形銅剣は他に先行する。したがって、V期における5者の併存を主張するには、中細形銅剣c類・平形銅剣の製作終了後の長期の伝世を想定しなければならず無理だと考える。

私は中細形銅剣c類はIV期前半を中心とすると考える。銅剣では平形銅剣I式、銅矛では中細形銅矛c類～古手の中広形銅矛、銅戈では中細形銅戈c類～古手の中広形銅戈、銅鐸では扁平錐式銅鐸古段階がほぼ並行する。II～IV期前半にかけての中国・四国地方での青銅器分布の現状を概観しよう。

①伊予西部から土佐西部にかけて。銅鐸は入らない。中細形銅戈 a・b 類・中広形銅戈、中細形銅劍 a・c 類が入るが量は少ない。②伊予中部から讃岐にかけて。讃岐には外縁付鉢式・扁平鉢式古段階と終始銅鐸があるが伊予側にはほとんど無い。中細形銅劍 a・c 類、平形銅劍 I 式、中細形銅矛 a・b・c 類などが点々とある。平形銅劍 I 式は高縄半島沿岸部で成立したと見られる。③土佐東部から阿波にかけて。阿波は終始銅鐸の中心的分布地の一角であり、外縁付鉢式・扁平鉢式古段階が入る。他は平形銅劍 I 式が僅かに入るにすぎない。土佐東部にも多くはないが銅鐸が及ぶ。④瀬戸内海北岸部。終始、銅鐸が主体である。中細形銅劍 b 類、中細形銅矛 b 類、中細形銅戈 b 類などが点在する。⑤日本海沿岸部。まず中細形銅戈 b 類・中細形銅矛 a 類が入る。出雲以東には外縁付鉢式銅鐸が比較的多く入る。続いて、扁平鉢式占段階銅鐸は伯耆まで多く石見に達するが、出雲には少なく、代わりに中細形銅劍 c 類が異常な数で展開するが後が続かない。このように、II～IV期前半にかけて、どの器種も、ある地域で排他的分布圏を形成するに至ってはいない。

IV期前半の後半からIV期後半になると、伊予西部から土佐西部にかけて中広形銅矛が増え、以後定着する。伊予中・東部では平形銅劍 II 式主体となり他器種はほとんど無くなる。讃岐側でも平形銅劍 II 式が多いが扁平鉢式新段階も比較的多く、なぜか中広形銅矛が少ないながらも点在している。阿波では僅かに平形銅劍 II 式が入るものほとんど扁平鉢式新段階のみとなる。瀬戸内海北岸では、平形銅劍 II 式と扁平鉢式新段階が拮抗する。日本海沿岸部では石見・伯耆・因幡に扁平鉢式新段階が及ぶが多くはない。出雲に扁平鉢式新段階は無く、中広形銅矛が長門から間を飛ばしてまとまって入る。

次の段階には、伊予西部・土佐西部に広形銅矛、土佐東部・阿波に突線鉢式が残る以外は、次々と青銅祭器が消滅し始める。伯耆は扁平鉢式新段階まで、石見は突線鉢 I 式まで、備前・備中・讃岐は突線鉢 2 式までである。

こうして見ると、広形銅矛や近畿式銅鐸に並行する V 期の瀬戸内海沿岸地域や日本海沿岸地域では、剣形祭器が消滅するとともに、銅矛や銅鐸もほとんど存在しない。いち早く青銅祭器全般が無くなるのであり、この現象は四隅突出形墳や方形台状墓などの大型墳丘墓の出現と有機的関連の元にあると考えたい。<sup>(14)</sup>

中国・四国地方の中・西部において、ある時期以降青銅祭器が消滅する現象を、この地域の独自性を持った政治的統合の開始と関連させる説は、私の知る限りでは間壁忠彦氏の指摘が早い。<sup>(15)</sup> 氏は、この地域に「新しい突線帶式銅鐸」が見られないことを畿内中心部勢力の影響からの離脱と地域の独自的統合の開始と関連させる一方で、平形銅劍の出現を地域的性格の顕現と評価し、その祭祀の終焉と地域の統合との有機的関係を示唆した。氏は、平形銅劍の製作時期を「中期末」(IV期…岩永注) としつつも後期(V期…岩永注) の前半までの継続使用を認めているから、地域の政治的統合は銅鐸を消滅させた段階と、平形銅劍を消滅させた段階と前後

2回考えられていることになる。平形銅劍の伝世がどの程度認め得るか今後の検討を要する。

間壁氏説の「平形銅劍」を「中細形銅劍C類」に置き換えると春成氏の1995年説に近くなる。春成氏は、出雲における銅鐸と銅矛の埋納は、出雲が近畿と北部九州の影響下から離脱すべく銅鐸・銅矛の祭りをやめた結果なされたのに対し、それに遅れる銅劍の埋納は祭りをやめたからではなく(結果的にたまたま埋納後ほどなく祭りが終了したが)、祭りの正常の執行の中でより大きい効果を期待してなされたと解している。<sup>337</sup>しかし私の考えでは、中広形銅矛の大半の入手は中細形銅劍C類より後であって、中細形銅劍C類や平形銅劍は時期的に並行する銅矛・銅鐸を排除する関係にはない。墳丘墓の出現と発展はこれらの青銅祭器を用いる祭祀すべての没落と並行する現象と考えたい。

### 分布論の行方

1980年の佐賀県安永田遺跡での銅鐸鋳型の出土、1985年の神庭荒神谷遺跡での銅矛と銅鐸の共伴以来、定説であった「銅劍銅矛文化圏」と「銅鐸文化圏」との対立図式が崩れたとする一般的の受け止め方がある。はたしてそうだろうか。

この対立図式は、和辻哲郎氏が『日本古代文化』で唱えたのだが、この書は1920年初版で、25年(改訂版)、39年(改稿版)、51年(新稿版)の3回改訂されているから注意を要する。一般的に和辻説として知られる39年説の原型が25年説にある事を見落としている人、39年説が<sup>338</sup>20年初版時にすでに形成されていたと誤解している人がいる。

初版では青銅器の分布には触れていない。その後、梅原末治氏から考古学関係の教示を受け1925年に改訂する。そこでは梅原氏・高橋健自氏と同様に、「山陰より大陸と交通した近畿中心の銅鐸の文化」と「筑紫より大陸と交通した筑紫中心の銅錐銅劍の文化」の対峙を確認したが、そこに留まらず「いづれが他を征服したかの問題」を解こうとした。記紀の古伝説における「武器の崇拜」、および大和中心の「古墳の示す文化」における鏡玉剣(鉄刀剣と後漢以後の鏡)崇拜が、大和中心の銅鐸崇拜と関係薄く、九州中心の鏡玉剣(銅錐銅劍・前漢鏡)崇拜の系譜を引くと認め、銅矛銅劍と銅鐸の対峙の消滅が、前者による後者への「東征」によった事、その時期が「三世紀前半よりも後」に鉄の武器が優勢になり「鉄の刀剣」に即した鏡玉剣の崇拜が生じた後である事を推定し、「邪馬台が九州であり、それが後に大和となった」と見た。

中山平次郎氏が<sup>339</sup>1929年に唱え始めた説は和辻説と近い。すなわち「金石併用時代に於ける文化圏の中心が近畿と九州とに分かれて居て、それが相対峙して居た」のを認める。そして、鏡玉剣の「三器尊重」の風を有す古墳時代文化が、銅鐸に象徴される近畿文化でなく、「銅錐銅劍」に象徴される北九州文化の延長と見られることから、「後漢初以後」に「我皇室」が北九州を征服し、統いて「神武天皇の東征」によって政治的中心が近畿方面に移った、と主張した。氏は邪馬台國を畿内大和とする点で和辻説と異なるが、氏が『日本古代文化(改訂版)』を読んだか

どうか興味が持たれる。<sup>(81)</sup>

和辻・中山説に対して他の考古学者はどう対処したのか。小林行雄氏は1938年、「船載銅利器」と「国产銅利器」とを区別し、後者と銅鐸がともに「祭りの器」であり、国产銅利器の分布圏を「利器ならざる利器の尊崇を以て特徴づけられる様態の文化圏」と見たが、「国产銅利器」と銅鐸が示す「明確な分布の異り」を「二つの信仰形態の対立を想定する以外によい解釈を見出しえない」と述べるに踏み留まった。小林氏は、神武東征神話の背後に歴史的事実があり、それが弥生時代の考古資料に反映されているとする和辻・中山氏の論とは、以後一貫して距離を保つ。

和辻氏は1939年、『日本古代文化』を大幅に改訂した。青銅器分布論の基本は25年説と大差無いが、銅錫銅剣と銅鐸の対峙の消滅、前者による後者への「東征」の時期を2世紀に繰り上げ、邪馬台国九州説から大和説に変わった。この変化は、弥生文化についての小林行雄氏の1938年の叙述を学ぶことによって、「銅鐸の文化と銅錫銅剣の文化との対峙は、丁度弥生式文化の中期の出来事」であり、「この対峙の消滅は丁度鉄器普及の時期（後期・岩永註）の事件」と認め、「鉄の刀剣を中心とする鏡玉剣の尊崇」が「三世紀以前から銅鐸の中心地をその本拠」とし、3世紀前半には「それの指示せる勢力が筑紫を支配していた」と認めたことによる。また、「銅錫銅剣文化圏」・「銅鐸文化圏」の語を初めて用い、当時の政治は祭事であるから、「権力の支配」が、祭器の分布で示される地域の「祭事的統一」・「文化圏の統一」の形を探ると説いた。

第二次大戦前の諸学説では「銅錫銅剣文化圏」と「銅鐸文化圏」の対峙を認める点では、森本六爾氏の同一文化・異段階説以外のはほとんどの説が一致していた。和辻説の主要論点は、古墳時代文化を担ったのが「銅錫銅剣文化圏」と「銅鐸文化圏」のどちらかという点であり、その結論に対しては、古墳文化が「銅錫・銅鐸文化」の上に形成されたとする後藤守一氏の反論もあった。しかし、青銅器分布圏が祭祀圏に留まるのか、その背後に政治勢力圏を考え得るのかという点については、小林行雄氏の対応や山内清男氏の交易路説を除いて、表だった論点にはならなかった。しかもこの基本的構図は、弥生式土器と青銅器の編年研究が進展し、分布圏自体の研究が進展した第二次大戦後も変わらない。

まず、青銅祭器の分布圏を政治勢力圏と見る説の系譜を見よう。藤間生太氏は1951年、青銅器分布圏を「一つの共通な政治圏」と明言し、そこに「心理的な共通性と統一性」が見られ、「他に大きな地域的共通性・統一性をもつためのテコ」が生まれる基盤と見た。こうした考えは1970年代末以降主流となっていく。酒井龍一氏は1978年、銅鐸に強い政治性を認め、その分布圏を「畿内大社会」の政治的影響力の範囲と見た。春成秀爾氏も1978年、銅鐸・銅矛の分布状況から「かなり広範囲におよぶ強固な一個のまとまりをもった社会」の存在を説き、1982年には「イデオロギーの共有状況」・「宗教的そして政治的結集」とも言っている。最右翼は下條信行氏の見解だ。1982年、銅矛形祭器が「福岡平野を中心とする北九州先進地帯の象徴的祭器」

であって、その広がりが「北部九州中心勢力の拡大」や「福岡的文化の対外進出」を「そのまま意味する」という。<sup>(91)</sup>

他方、青銅祭器の分布図を政治勢力圏と見ない説の系譜はどうか。

原田大六氏は1954年、「四種の青銅祭器が本質的に同類のもの」で、それらの分布上の相違は「各地住民の好みの違い」にすぎず、「決して政治圏の相違によって生じたものではなかった」として、分布圏の分立から「政治圏」の対立を読みとることを拒否する。そして他種の遺物に基づき、和辻・中山氏と同じ論調で、北部九州から近畿への侵略戦を説く。<sup>(92)</sup> 小林行雄氏は1958年、「銅鐸と銅利器とを、二つの勢力圏の対立を示す遺物として強調する、過去の学説」が、考古資料と神話と整合させようとする考えから出てきたとして「幻影を追う結果に終わる」と断じた。そのため、国産銅利器分布図が、北九州の「国産銅矛が製作された地域」と西部瀬戸内の「国産銅劍が製作された地域」に分かれると指摘しつつも、それを、宗教的宝器として銅鐸を持たない地域において「個々に生じた処理の仕方」の差とみるととめた。<sup>(93)</sup>

原田・小林両氏ともに、青銅祭器の分布図を政治勢力圏と見ない点で共通する。しかし裏がある。両者の本意は別の所にあった。そもそも原田氏は近畿における強大な政治勢力の存在を認めず、小林氏は九州におけるそれを認めなかつた。その一方で、原田氏が北部九州の、小林氏が近畿の政治的優位を説く手だけは、別の所にちゃんと用意されていた。このことから逆に、青銅祭器分布図を政治勢力圏と見れば、強力な対抗勢力の存在を認めざるを得なくなると、両者共に認めていたことが伺われる。

田中琢氏は1987年、一定の地域的広がりを持つ範囲で確認できる埋納行為から、共通の意識で埋納行動をとった人間集団の存在が推定できるとし、1991年には「銅鐸や武器形祭具によるまつり」の広がりに、「心理的な精神的な共通基盤」の成立をみるが、「そのなかに政治的に統合しようとする心理を読みとることは不可能」で、分布圏に「政治的なまつり」・「連合や国家を見ない」と断言、小林氏の立場を踏襲・遵守した。<sup>(94)</sup> また、青銅製祭具類によるまつりの拡散には、村どうしの連携、情報・思想の伝達という歴史的役割を担った過渡する「青銅器職人」があずかったとしているから、分布圏を工人の活動圏、一種の経済圏と見ているわけで、1932年の山内説と通じる所がある。

青銅祭器分布論で転換点となる重要な研究が1970年代に登場する。近藤喬一氏は1970年、平形銅劍の形成と成立が大阪湾沿岸を中心とする地域の銅鐸工人グループによって行われたと論じ、分布圏外に生産地がある事を主張した。<sup>(95)</sup> 続いて佐原眞・近藤喬一氏は1974年、それ以前の考古学的知見を総動員して「武器形祭器」（小林氏の「国産銅利器」とほぼ対応）分布圏を解体した。<sup>(96)</sup> まず西日本の「西部地域」（北部九州中心）と「東部地域」（中国・四国地方～中部地方西部）を土器その他の文物によって区別する。両地域にまたがって分布する武器形祭器が一つの大きなまとまりとは見なせず、「近畿地方西部、中国・四国地方、および内海沿岸西部地方と

もいえる九州東岸に分布する中細・中広形銅剣、中国・四国地方の内海沿岸に分布する平形銅剣と大阪湾型銅戈は、西日本の「東部地城」すなわち銅鐸分布圏内部で作製したものであり、「銅鐸分布圏内の武器形祭器の大多数、およびその範囲をこえて、さらに西（愛媛県）へまで達している武器形祭器の多くが、銅鐸分布圏内で製作されたことが確実視される」にいたり、和辻氏の「銅鉢銅剣文化圏」は解体縮小され、「九州および四国西南部の銅鉢分布圏」と「九州型銅戈分布圏」が残されることになるという。

1980年、佐賀県鳥栖市安永田遺跡で福田型銅鐸の鋳型が出土した。この鋳型の出土をもって、定説であった「銅剣銅矛文化圏」と「銅鐸文化圏」との対立図式が崩れたとも言われた。しかし上で述べたように、「銅剣銅矛」の中に北部九州の製品でない物があり「銅鐸文化圏」の製品すらあることが判明した事によって、「銅剣銅矛文化圏」の一体性は、1950年代に崩れ始め1970年には完全に崩れていた。安永田の鋳型の意義は、「銅鐸文化圏」側の一体性を崩した点に有るが、福田型銅鐸が銅鐸の中でも特殊な一群で、分布が銅鐸分布圏の西端部に限られることは以前から研究者に意識されてきたことであり、安永田の鋳型の出土によって、かえってその特殊性の成因が理解し易くなつたと言えるだろう。神庭荒神谷遺跡での銅鐸・銅矛の共伴も、確かに組み合わせとしては初であったが、從来から中国・四国地方にあっては武器形祭器と銅鐸の共伴例が知られていたのだし、北部九州<sup>⑨</sup>の指摘のように、互いの排他性を増す以前の段階であるから、理解を絶する事ではない。

こうして見ると、安永田遺跡・神庭荒神谷遺跡のような新発見によって、それまで強固に信じられてきた定説があっさり崩れ、頑迷な考古学者達は火薬けだった…式のお定まりの報道の通りにはならない。もし本当にそうであれば、考古学者は発掘だけにして土中からの新発見で当然と歴史が書き変えられるのを待つては良く、研究なんぞしなくともよさそうだ。ただ「銅剣銅矛文化圏」と「銅鐸文化圏」との対立図式については、安永田・神庭荒神谷の発見以前にすでに研究の積み上げによって崩れていたと言えるが、「銅矛銅剣」と「銅鐸」といった大ざっぱな器種別でなく、それぞれを分解して、「北部九州地方製」・「近畿地方製」・「他の地方製」の青銅器群に纏め直せば、どれに含めるか未定のものが有るにせよ、「北部九州地方製」と「近畿地方製」の分布圏が、西日本の東西に分かれて対峙するという基本的構図まで否定されたのではないから注意を要する。しかもそれを強固な政治勢力圏とみる説（春成秀爾・酒井龍一・下條信行氏）が主流であるから、大きな構図は和辻説段階と大差が無いとも言えるのだ。

田中琢氏は近年の弥生青銅器研究を総括し、「詳細な研究は進む。しかし、多くは年代論であり、分類論であって、その分布からする青銅祭器の歴史的評価や歴史的機能の推定などは決して盛んではない」と苦言を呈した。<sup>⑩</sup>年代論と分類論からいっては先に進まない私などが批判の対象であって、もっと本質的な研究に早く進むように諭したのだろう。青銅器分布論の焦点

は、異なった種類の青銅祭器の分布図どうしの関係をどう読み解くか、であった。当然、同時に存在した者どうしの比較でなければならない。何度も言及した近藤喬一氏の有名な分布図も、そこに示された5種の青銅祭器の同時性が保証されてはじめて意味を持つ。青銅祭器の分布からする歴史的機能の推定のためには、それのみの動向ではなく、それが他のいかなる文化要素と共に変動するかを見なければならない。田中琢氏の不満・注文に対しても、詳細な年代論・分類論に基づかない分布論は危ない、とあらためて申し上げておこう。

### 追記

私は神庭荒神谷遺跡の調査関係者であり、本報告書の事実記載の執筆者の一人ではあるが、小稿はあくまで私見であり、本報告書の他執筆者担当分とまったく時間的に並行して、かつ独立に書いた物である。小稿の執筆時点で、報告書本文の他執筆者の原稿やゲラを読んで内容の調整をしたりはしていないので、報告書本文と内容的に齟齬を来すこともある。報告書の見解としては当然、本文の方に譲られたい。私は調査関係者と言っても調査主体に属すわけではなく、多くの方々のご厚意で調査に参加させて頂いた一余所者にすぎない。そのため報告書本文の執筆に加わらせて頂くには躊躇があり、上司からも控えるように教育的指導があったが、調査・整理に現実に参加させて頂いている以上、当然負っている責任からは逃れられないという県教委の方々の御指摘を受け、報告書本文については、遺物の事実記載の項目に限って執筆を引き受けさせて頂いた。

本文とは別に、私には「特論 日朝青銅器文化関係」という題目が与えられたが、荒神谷遺跡の遺物・遺構そのものが、朝鮮半島・中国の青銅器文化と直接的な関係を有するわけではないから、枠を大きく取って、日本列島と朝鮮半島・中国の青銅器文化の関係・交渉の中で醸成された彼我の青銅器文化の特質を対比して論じ、その全体的構図の中に、神庭荒神谷遺跡出土品に代表される、埋納される特殊化した青銅器群を位置づける作業を行う必要があった。しかしこの課題をこなすには、時間はもちろん肝心の力量が不足していた。それについては、すでに近藤喬一氏の御仕事があるし、本書特論で町田章氏が「快刀亂麻を断つ」予定になっていたのだが、御病気・入院のため延期されたのが残念である。そこで私は、神庭荒神谷遺跡という希有の遺跡の調査に参加させて頂き、自分自身の手で青銅器を掘るという経験をさせて頂いた研修レポートのつもりで小稿を書いたが、またしても「細かい」話に終始し、出来の悪さはご覧頂いた通りである。とはいって、正報告書刊行成了の今後は、「大きくて本質的な」論を立てる場合にも、こういった資料操作の上に立論して頂く必要が生じてくるのではなかろうか。あらためてこの場で、11年前の第1次調査以来、私に発掘調査とその後の遺物整理に参加する機会を作って下さった鳥根県教育委員会の皆様、および私が松江に頻繁に行き仕事に穴を開ける度にフォローして下さった奈良国立文化財研究所の皆様に篤く御礼申し上げます。

なお小稿は、1995度科学的研究費補助金一般研究C（課題番号06610388）による研究成果の一部を含んでいる。

（1996年1月18日稿了）

#### 注

- (1) 神庭荒神谷遺跡第1次調査直後の1984年10月29日に行われたシンポジウム『古代出雲王權は存在したか－弥生銅剣大量出土の謎に迫る』では、「これはショーですから」と割り切った松本清張氏が、「それはひとつ、ものを見なきやわからんだとか、これから検討して、しかるのち回答すると、なんか自民党の派閥の会合のことじゃないんだから、そのへんをひとつ…後略」と言っている。しかし、私たちの日常の研究生活はショーではないし、私の発言も官僚的答弁だとは思わない。
- (2) 青銅器の勉強を始めて以来「木を見て森を見ず」と言われ続けた私自身は、自分の研究は非常に大きめでルーズだと考えている。私の仕事に対して「無意味な細分」と評する人がおられるが、「この程度の大別で十分です」とお応えすることにしている。
- (3) 岩永省三「弥生時代青銅器型式分類編年再考」『九州考古学』55 1980年
- (4) 馬淵久夫・江本義理・門倉武夫・半尾良光・青木繁夫・三輪嘉六「島根県荒神谷遺跡出土銅剣・銅鐸・銅矛の化学的調査」『保存科学』30 1991年
- (5) 久野雄一郎氏は、馬淵氏らのA26モデル説に対し、「鋳造された銅剣は凝固収縮や研磨により、モデルより小さくなる。したがって、モデルは木材などで若干、大きくつくるのが普通であることから、A26がモデルであった可能性は小さい。」と述べ、「モデル」を真上に押しつける原型と解している（『荒神谷青銅器はどこでつくられたか』『荒神谷遺跡と青銅器』1995年）。しかし、馬淵氏らは「サンブルがない地域で鋳造する場合、鑄型を作るためのモデルは必要である。」とだけ述べており、原型の意で用いているのか不明である。
- (6) 杉原莊介「銅鏡」『日本青銅器の研究』1972年
- (7) 橋口達也「弥生時代の戦い—武器の破損・研ぎ直し—」『九州歴史資料館論集』17 1992年
- (8) 佐原眞「斧の文化史」1994年
- (9) もっとも私は1986年に、「銅剣の型式分類は何に着目しておこなうべきか。当然ながら研ぎ減りなどの二次的改変を受けにくいものが好ましい。…中略…従米の分類の多くは、鎌の及ぶ範囲・劍身長・鋒部長などを基準にしてきた。これらがいずれも二次的改変を受けやすいため、従来の分類をまったく無効とする人もいる。二次的改変を過大に評価すれば、銅剣の型式学的検討は不可能となる。しかし、（銅剣を構成する要素の中で研磨による…岩永注記）改変を受けやすいB類、そうでないA類の差はおのずからがあるので、後者に着目して一定のパターンを抽出することができる。また、後者に着目した分類で同一の単位に属する者どうしについての前者のあり方を分析すれば、改変の仕方そのものにおけるパターンの有無・改変の程度などが具体的に明らかとなる。」と述べ、その線に沿って分類作業を行っている。
- (10) 私自身、1980年の仕事で失敗し、1986年に改めた部分がある。
- (11) 岩永省三「弥生時代青銅器型式分類編年再考」『九州考古学』55 1980年
- (12) 福岡県筑紫野市峯遺跡、佐賀県鳥栖市袖比古村遺跡SJ1114・1124・1135・1140號棺、佐賀県吉野ヶ里遺跡SJ1057號棺。
- (13) 近藤商一「平形銅剣と銅鐸の関係について」『古代学』17-3 1970年
- (14) 高橋久志・松岡秀夫「兵庫県上郡町別名出土の銅剣」『有名考古館研究報告』3 1969年

- (5) 岩永省三「劍形祭器」「弥生文化の研究」6 1986年
- (6) 財團法人鳥取市教育福社振興会『西人路土居遺跡』1993年 西大路の劍は劍方部を欠損している。出土直後に取り上げ前の劍を見て頂き、現状で劍方の無い広島県福山遺跡出土品に類似した形になる可能性、島根県隱岐郡海士町竹田遺跡出土品も縦形や中縦形ではなく西大路と同類になる可能性をコメントさせて頂いた。その後、保存処理のためクリーニングした時点で、脊上鑄のあり方から見て、劍方が有ることが判明したので前言を訂正する。福山の劍には再加工品の可能性があり、当初から劍方が無かったかは定かでない。吉田広氏は「中縦形B類」の再加工品とする。竹田の劍は脊上の鑄がきわめて不明瞭で劍方の有無がはっきりしない。ただ、西大路・福山・竹田の3者を現状で比較すると、仮に劍方が有るにせよ、元部が長くて幅狭く、元部の両側縁が中縦形b類ほど下窄まりにならず、双孔の位置が高いなど、類似点が多いのも事実である。私は、この3者が中縦b・c類とは異なる同一型式となる可能性を残しておきたい。西大路銅劍の実見に際しお世話になった鳥取市教育委員会の平川誠氏、鳥取市遺跡調査団の谷口恭子氏に感謝申し上げます。
- (7) b類との比較も試みたが、b類の輪郭線をはみ出す箇所があり、b類の再加工品の可能性はまったく無い。
- (8) 竹田銅劍の鉛は朝鮮産（馬淵久夫「鳥取県下出土青銅器の原料产地推定」「月刊文化財」261 1985年）であるから、年代を上げた方が良いかもしれないが、中広形銅矛にも朝鮮産鉛の使用が知られているから、一概には言えない。
- (9) 年代については、北部九州の事例を多く扱うことから、北部九州の土器編年を用いるが、近畿地方との並行関係については、通説と異なり、北部九州中期前半→近畿II期、中期中頃→III期、中期後半→IV期前半、後期前半→IV期後半、後期後半→V期とし、近畿との対応を（ ）内に記す。
- (10) 絵図しか残らず、共伴した星雲文鏡が中期末の三雲雨小路2号甕棺でも出土し、絵図に描かれた甕棺の埋葬傾斜角が急であることから、中期後半（IV期前半）と推定されるが、確定ではない。
- (11) 吉田広「銅劍生産の展開」「史林」76-6 1993年
- (12) 福岡県八田遺跡出土鉢型には脊上に鉢出し鑄があるが、福岡県岡垣・鹿島県源田出土品の脊上鑄は鉢出し鑄ではないと思う。
- (13) 吉田広「銅劍生産の展開」「史林」76-6 1993年
- (14) 近藤商一「平形銅劍と鋼鐸の関係について」「古代学」17-3 1970年
- (15) 難波洋三「銅鐸」「弥生文化の研究」6 1986年
- (16) もっとも吉田広氏は、瓈耶山1号の連続溝文が溝巻の中心でつながっていない「連続溝文第I種」であり、石製鉢型による銅鐸には「連続溝文第I種」、真土製鉢型による銅鐸には「連続溝文第II種」が見られるとする難波洋三氏説（「銅鐸」「弥生文化の研究」6 1986年）に従りつつ、瓈耶山1号劍を扁平鉢式古段階並行としている。しかし、「扁平鉢式新段階にも連続溝文第I種がある」と、「扁平鉢式古段階にも真土型がある」のどちらを採るかと言われれば、当然前者であり、瓈耶山1号が扁平鉢式新段階並行であることは動かない。
- (17) 岩永省三「銅鐸年代決定論」「古文化談叢」13 1984年
- (18) 難波洋三「同范銅鐸2例」「辰馬考古資料館考古学研究紀要」2 1991年
- (19) 佐原真「銅鐸」1979年
- (20) 私は1980年に、近藤商一氏の1970年説を参考に「平形銅劍II式は、型式的・時間的に広形銅矛・広形銅戈に並行するとされてきたが、むしろ中広銅矛・中広銅戈とほぼ並行し、下限は不明とはいえ、銅矛・銅戈に先駆けて消滅した可能性がある。」と述べた（「弥生時代青銅器型式分類編年再考」「九州考古学」

- 55 1980年)。佐原良氏も「出雲型銅劍あるいは平形銅劍っていう方が早く姿を消して、銅鐸あるいは九州の矛形祭器の方が後まで残っただろうと。そうすると最後にはやはり出雲なり、出雲の、そういう劍形祭器を使う祭儀ってものが消えてしまっていることは、恐らく現状では認めざるを得ないだろうと思います。根拠は今は申しません。いろいろの文様の比較とか、そういうことで。」と述べ(松本清張編『古代出雲王権は存在したか』1985年)、春成秀爾氏も「平形銅劍の製作は長くは続かず、IV-2式(=突線鉢2式・岩永註)銅鐸の時期までにその祭りも終わっていたことは確実である」と言っている(「青銅器の祭り」「新版古代の日本』4 1992年)。もっとも、どうしても平形銅劍の年代を下降させたい人は、平形銅劍II式の瑜伽山1号に見られる連続渦文と酷似した鉢上がりの連続渦文が、扁平鉢式新段階のみならず突線鉢2式の出土地不明品(笛野家蔵)にもあり、静岡県引佐郡分す出土の突線鉢4式銅鐸(東博36664)に、瑜伽山1号と同じく、連結渦文が渾巻の中心でつながっていない「連続渦文第I種」が見られることを根拠に、平形銅劍II式を突線鉢式業行まで下げるであろう。
- ⑩ 馬淵久夫・江木義理・門倉武夫・平尾良光・青木繁夫・三輪嘉六「島根県荒神谷遺跡出土銅劍・銅鐸・銅矛の化学的調査」『保存科学』30 1991年
- ⑪ 近藤喬一「銅劍・銅鐸と弥生文化」『古代出雲王権は存在したか』1985年。同「弥生時代青銅器の性格」『歴史手帳』14 4 1986年
- ⑫ 近藤喬一「平形銅劍と銅鐸の関係について」『古代学』17-3 1970年
- ⑬ 新規導入あるいは新規製作していれば中細形銅劍c類や平形銅劍より後出の型式が見られるはずである。
- ⑭ 松本清張編『古代出雲王権は存在したか』のP113「あんまり製作、使用的間に時間幅がなかったんだろう」、P115「これを用いて行われていたであろう祭事が、非常に短い期間に終わったんではないか。ただし同書P117の注\*では「銅劍の伝世も考慮すべきであろう」とあり、近藤氏の考えにも搖がうかがえる。
- ⑮ すでに述べたように鳥取県西大路出土品にその可能性もあるが確かではない。吉田広氏は兵庫県三本市正法寺出土品を「中細形銅劍D類」とし後続型式とする。「銅劍生産の展開」『史林』76-6 1993年
- ⑯ もっとも、確たる証拠は無いものの、細形銅劍・中細形銅劍a類・同b類が瀬戸内海沿岸地域でも製作された可能性は捨てきれない。
- ⑰ 菱環鉢式~外縁付鉢1式:朝鮮半島・外縁付鉢2式~突線鉢1式:非同一の華北系、突線鉢2~5式:画一的華北系。馬淵久夫・平尾良光「鉛同位体比からみた銅鐸の原料」『考古学雑誌』68-1 1982年。なお外縁付鉢式の細分については難波洋三氏の1986年説による。難波洋三「銅鐸」「弥生文化の研究」6 1986年
- ⑲ 馬淵久夫・平尾良光「鉛同位体比法による漢式鏡の研究(二)」『MUSEUM』382 1983年。馬淵久夫「島根県下出土青銅器の原料产地推定」『月刊文化財』261 1985年。馬淵久夫・平尾良光「福岡県出土青銅器の鉛同位体比」『考古学雑誌』75-4 1990年。馬淵久夫・江木義理・門倉武夫・平尾良光・青木繁夫・三輪嘉六「島根県荒神谷遺跡出土銅劍・銅鐸・銅矛の化学的調査」『保存科学』30 1991年。以下の記述は馬淵久夫・平尾良光氏の測定結果を私なりに要約したものであって、馬淵・平尾氏がこういう発言をしているのではない。
- ⑳ 馬淵久夫・江木義理・門倉武夫・平尾良光・青木繁夫・三輪嘉六「島根県荒神谷遺跡出土銅劍・銅鐸・銅矛の化学的調査」『保存科学』30 1991年
- ㉑ 馬淵久夫・平尾良光「鉛同位体比からみた銅鐸の原料」『考古学雑誌』68-1 1982年
- ㉒ 平尾良光・久保田裕子・二宮修治「荒神谷から出土した青銅製品の化学組成」『荒神谷遺跡と青銅器』1995年

- (3) 神庭荒神谷の中綱形銅劍 c 類を製作した工房自身が各種材料を寄せ集めたのか、すでに寄せ集まつた材料を入手したのか問題があるにせよ。
- (4) 馬淵久夫・平尾良光「東アジア鉛鉛石の鉛同位体比」『考古学雑誌』73-2 1987年
- (5) データは次の2文献による。馬淵久夫・平尾良光「福岡県出土青銅器の鉛同位体比」『考古学雑誌』75-4 1990年。馬淵久夫・江本義理・門倉武夫・平尾良光・青木繁夫・三輪嘉六「島根県荒神谷遺跡出土銅劍・銅鑄・銅矛の化学的調査」『保存科学』30 1991年。A式岡において、銅矛と銅戈で若干の重複があるものの、0.8755を境に左右に分かれるのは興味深い。銅矛の製作地が背振山塊の南北両側に集中するのに対し、銅戈の生産地がそれと重複しつつ北部九州各地に広がると対応し、銅矛の製作地と銅戈のみの製作地とで、原料に差があったのであろうか。
- (6) 久野雄一郎「荒神谷青銅器はどこでつくられたか」「荒神谷遺跡と青銅器」1995年
- (7) 別子型鉛については、山崎一雄「日本および中国出土の青銅器の鉛同位体比」『古文化財の科学』1987年を参照。
- (8) 馬淵久夫・平尾良光「東アジア鉛鉛石の鉛同位体比」『考古学雑誌』73-2 1987年
- (9) 久野氏の表現を私なりに言い替えると、茂住鉛区の鉛 ( $^{207}\text{Pb}/^{206}\text{Pb} = 0.8656$ ,  $^{208}\text{Pb}/^{206}\text{Pb} = 2.1430$ ) は、馬淵・平尾氏が神庭荒神谷のc類の鉛のうち東北産と朝鮮産の混合と考えたもの（たとえばA14は、 $^{207}\text{Pb}/^{206}\text{Pb} = 0.8655$ ,  $^{208}\text{Pb}/^{206}\text{Pb} = 2.1479$ ）に近い。
- (10) 久野雄一郎「荒神谷青銅器はどこでつくられたか」「荒神谷遺跡と青銅器」1995年
- (11) 島根県下の鉛にも各種あるのであろうが、馬淵・平尾氏のデータによると、都茂鉛山の鉛は  $^{207}\text{Pb}/^{206}\text{Pb} = 0.8444 \sim 8448$ ,  $^{208}\text{Pb}/^{206}\text{Pb} = 2.0870 \sim 0881$  であって、茂住鉛区とはかなり離れる。
- (12)  $^{207}\text{Pb}/^{206}\text{Pb} = 0.8497 \sim 8499$ ,  $^{208}\text{Pb}/^{206}\text{Pb} = 2.1077 \sim 1088$ 。平尾良光・榎本淳子「佐賀県唐津市久里大牟田遺跡から出土した鉛製品の自然科學的研究」『MUSEUM』509 1993年。同論文P32表2に示されたCP423の  $^{207}\text{Pb}/^{206}\text{Pb} = 0.8$ , 798は、0.8498の誤植であろう。
- (13) 井上洋一「白銀の行方」『月刊文化財発掘出土情報』139 1994年
- (14) 山崎一雄「日本および中国出土の青銅器の鉛同位体比」『古文化財の科学』1987年
- (15) 馬淵久夫・平尾良光「東アジア鉛鉛石の鉛同位体比」『考古学雑誌』73-2 1987年
- (16) 廣尚北道將軍鉛山の鉛は、 $^{207}\text{Pb}/^{206}\text{Pb} = 0.8475$ ,  $^{208}\text{Pb}/^{206}\text{Pb} = 2.1020$ 、および、 $^{207}\text{Pb}/^{206}\text{Pb} = 0.8513$ ,  $^{208}\text{Pb}/^{206}\text{Pb} = 2.1108$  であって、同一直線上で両者の間に久里大牟田の鉛がくる。
- (17) 井上洋一・松浦宥一郎「東京国立博物館保管の佐賀県唐津市久里大牟田遺跡出土の矛について」『MUSEUM』509 1993年
- (18) 久野雄一郎「鉛同位体比法の新しい見方 荒神谷銅劍への応用」『樹原考古学研究所月例研究会報告レジュメ』1992年。同「荒神谷青銅器はどこでつくられたか」「荒神谷遺跡と青銅器」1995年
- (19) 佐々木昭「鉛床鉛同位体比よりみたコリア半島と日本列島」『鉛山地質』37-4 1987年
- (20) あくまで分析の対象となつた現在の鉛山の產品に限られる。
- (21) 馬淵久夫・江本義理・門倉武夫・平尾良光・青木繁夫・三輪嘉六「島根県荒神谷遺跡出土銅劍・銅鑄・銅矛の化学的調査」『保存科学』30 1991年
- (22) 平尾良光・久保田裕子・二宮修治「荒神谷から出土した青銅製品の化学組成」『荒神谷遺跡と青銅器』1995年
- (23) 久野雄一郎「荒神谷青銅器はどこでつくられたか」「荒神谷遺跡と青銅器」1995年
- (24) 馬淵久夫・江本義理・門倉武夫・平尾良光・青木繁夫・三輪嘉六「島根県荒神谷遺跡出土銅劍・銅鑄・銅矛の化学的調査」『保存科学』30 1991年

- 脚) 久野雄一郎氏は「誤差範囲内で一致する二本の銅劍のクラスターがかなりの数存在することがわかった。このことから、一回に二本の銅劍が鋳造された」とし、真っ向から対立する(『荒神谷青銅器はどこでつくられたか』『荒神谷遺跡と青銅器』1995年)。ただし、久野氏が示したクラスターは14組28本であって、他の330本がクラスターにならないのなら、馬淵氏らの立場からすれば、14組以外は一本ずつの鋳造と反論できよう。
- 脚) 1995年12月7日に島根県埋蔵文化財調査センターで行われた「荒神谷遺跡報告書作成検討会」に出席した際、達所和夫氏製作の模鉄銅劍數本が荒縄でくくって置いてあるのを目撃して思いついた。
- 脚) 先に示したように、同位体比が乱れる個体が散在せずに偏る一方で、隣り合う個体で必ずしも同位体比が連続しないのは、近い時間に作られた個体がひとくくりにされ鋳造順が乱れた、とすれば理解し易い。
- 脚) たしかにA 1~22には $^{207}\text{Pb}/^{206}\text{Pb} < 0.878$ の個体が集中するが、「330本を過ぎる頃から残りの原料が少なくなり、スクラップを混ぜる率が多くなった。」というように鋳造順と並び順が一致することの傍証とするのは妥当ではない。この22本がたまたまA列の端に来ているが、B列の中央でもまったくおかしくない。
- 脚) 久野雄一郎「荒神谷青銅器はどこでつくられたか」『荒神谷遺跡と青銅器』1995年
- 脚) 春成秀爾「青銅器の祭り」『新版古代の日本』4 1992年
- 脚) 春成秀爾「神庭(荒神谷) 青銅器と出雲勢力」『荒神谷遺跡と青銅器』1995年
- 脚) 氏が示した編年表では中細形銅劍c類と「中広形銅矛b式」は後1世紀前半で同時期とされているが、銅鐸・銅矛の祭りをやめてから新たに銅劍を鋳造したと述べているから、実際には中細形銅劍c類は「中広形銅矛b式」より後出すと考えられていることになる。
- 脚) 春成秀爾「神庭(荒神谷) 青銅器と出雲勢力」『荒神谷遺跡と青銅器』1995年
- 脚) 岩永省三「劍形祭器」『弥生文化の研究』6 1986年
- 脚) 間壁忠彦「高地性集落の謎」『古代の日本』4 1970年
- 脚) 春成秀爾氏も同様な見解を述べている。「古墳出現前後の出雲と吉備」『松江考古』2 1979年
- 脚) 春成秀爾「神庭(荒神谷) 青銅器と出雲勢力」『荒神谷遺跡と青銅器』1995年
- 脚) 梅原末治「銅鉢銅劍に就いて(二)」『史林』8-2 1923年
- 脚) 高橋健自「日本青銅文化の起源」『考古学雑誌』13-12 1923年
- 脚) 中山平次郎「銅劍に就いて(二)」『考古学雑誌』19-6 1929年
- 脚) 田中琢氏は、「中山の見解は、「銅劍銅矛文化圏」における三種の神器の原形の存在、「銅劍銅矛文化圏」による「銅鐸文化圏」の征服、その結果としての国家統一を考えた最初のものである。」としたが、そうではない。田中琢「『銅鐸文化圏』と『銅劍銅矛文化圏』」『弥生文化の研究』8 1987年
- 脚) 小林行雄「弥生式文化」『日本文化史大系』1 1938年
- 脚) 小林行雄「弥生式文化」『日本文化史大系』1 1938年
- 脚) 森木六爾「日本に於ける青銅器文化の伝播」『考古学』2-5・6 1931年
- 脚) 後藤守一「日本の文化 翟明篇」1941年
- 脚) 山内清男「日本遠古の文化 橋紋式以後」『ドルメン』1-8 1932年
- 脚) 藤間生大「日本民族の形成」1951年
- 脚) 泷井龍一「銅鐸・その内なる世界」『攝河東文化資料』10 1978年
- 脚) 春成秀爾「銅鐸の埋納と分布の意味」『歴史公論』4-3 1978年
- 脚) 春成秀爾「銅鐸の時代」『国立歴史民俗博物館研究報告』1 1982年
- 脚) 下條信行「銅矛形祭器の生産と波及」『森貞次郎先生古希記念古文化論集』上 1982年

- 82) 原田大六『日本古墳文化』1954年  
 83) 小林行雄『民族の起源』1958年  
 84) 田中琢「『銅錚文化圏』と『銅劍銅矛文化圏』」『弥生文化の研究』8 1987年  
 85) 田中琢『倭人争乱』1991年  
 86) 近藤喬一・平形銅劍と銅錚の関係について』『古代学』17-3 1970年  
 87) 佐原眞・近藤喬一「青銅器の分布」『古代史発掘』5 1974年  
 88) 近藤喬一「銅劍・銅錚と弥生文化」『古代出雲王権は存在したか』1985年  
 89) 田中琢「『銅錚文化圏』と『銅劍銅矛文化圏』」『弥生文化の研究』8 1987年

## 補註

脱稿後、原稿を通読下さった松本岩雄氏から次のような御指摘を頂戴した。松本氏に感謝いたします。

①、註80に関連して。鳥根県下の鉛床鉛の同位体比としては、平田市後野のデータがある（馬淵久夫「鉛同位体比による原料産地推定」『出雲岡田山古墳』1987年）。

②、「埋納壙内での配置」の項に記した「一つの湯の中の場所によって同位体比が異なる場合がないのか」に関しては、C96の6箇所の分析を平尾良光氏に依頼済みで、化学組成についてはデータがすでに出ておりが、鉛同位体比は1996年2月1日現在出されていないとのこと。

③、「分布」の項に記した青銅器祭祀の終焉と墳丘墓の出現の時期的関係について。出雲における墳丘墓は、IV期には加茂町神原正面遺跡、松江市友田遺跡（松江市教委『松江岡都市計画事業乃木土地区画整理事業区域内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』1983年）で見られる。四隅突出型墳丘墓は松本氏のV-1期には出現している。その墳集落のあり方等も変化があるので、IV-V期に大きな変化があったことは確かだが、墳丘墓の変化上は西谷3号墓のような大規模なものが出現するV-3期が高峰期と認められる。

松本氏のご教示に若干補足させて頂く。①について。後野の鉛同位体比は、 $^{207}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}=0.8535$ ,  $^{208}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}=2.1067$ であり、やはりり茂住盆地とはかなり離れている。③について。墳丘墓の出現がただちに青銅器祭祀の終焉をもたらしたり、青銅器祭祀が終了しないと墳丘墓が出現しないと言ふことではない。ただ全体的傾向として、墳丘墓の出現と発展が青銅祭器を用いる祭祀の終息への動きと並行する現象であることは言えよう。それは、北部九州や近畿地方の集団が、中期には相当な規模の墳丘墓を持ちながら、広形銅矛や近畿式銅錚の祭祀を熟成させた後期において、大規模墳丘墓の発展圏外に去ったことと整合している。

## 追記

脱稿後、かなり時間が経過したため、追記の補足をさせて頂く。

1火調査出土の銅劍が出土器であるとの推定は、調査直後から数人の研究者が述べてきた。思いつきにせよ碑伝にせよ、研究者の発言であるからには、実証して頂く必要がある。へたに「実証」とは言ふと、「実証主義者」として糾り去られそうだが、「実証主義者」でないならば、実証しなくとも済むとは言ふえない。論理的整合性で片付けておく訳にもいくまい。まったく相反する考え方があるが、それぞれに論理的整合性を保ちつつ併存し得るのであるから。もっとも、今まででは報告書が刊行されておらず、当事者以外の方には遺物の細かい検討が不可能だったわけで、ようやく刊行なった既には、多くの方にご検討頂いて議論されることを切望します。

銅錚ならともかく、銅劍ごときで同範関係が判るはずがない、という銅錚専門家の御発言を聞いたことがある。銅劍の考察に関わった我々自身も、同じ想いを少しは抱きつつ仕事を進め、本書に示した結論を得た。今、我々が期待するのは、本書で公表した生データを用いて、我々の試案への対案、たとえば、同範関係が判らないなら判らないという事を、きちんと具体的に示して頂くことである。銅錚と異なり、文様の一一致、範傷の一致といった決定的かつ明瞭な根拠に乏しいことは、我々自身も重々承知しており、研究の進展のためには、ぜひとも対案をお出し頂いて議論したいものである。

# 第3章 中海・宍道湖岸西部域における農耕社会の展開

田中 義昭

はじめに

島根県簸川郡斐川町神庭で銅剣・銅鐸・銅矛の一括大量埋納遺跡の発見という破天荒の発見は、考古学界はもとより古代史研究者、市民に大きな関心を呼んだ。とりわけ発見が出雲の地であったことから古代出雲の歴史的断面を伝える巨大な証人の登場として華々しい歓迎を受け、さまざまな角度とレベルの「青銅器と古代出雲」論が飛び交ったことは記憶に新しい。

喧騒の時が過ぎ、出土青銅器の補修と記載的調査が進行するにともなって所与の課題に対するアプローチの成果が世に問われるようになってきた。その大部分は青銅器そのものの様相と特質に関わるものである。それらが斯界の期待に応える重要な事項に属することは論を俟たないが、他方、この希有の発見を地域史の潮流に正当に位置づけて評価することも看過されではならないことと思われる。否、むしろこの課題の追究にこそもっとも関心が払われるべきであり、多彩かつ総合的な学的蓄積が求められているといえよう。わけても日本古代史に特異な地歩を占める出雲の歴史的展開のどのような側面として理解するかということは研究者の興味以上の問題ということができる。

このような課題は、なによりも当該期の地域農耕社会の動向を集落・墳墓遺跡の解明という角度から接近するかによって首尾よい達成がえられよう。筆者は、1986年に神庭荒神谷遺跡の歴史的背景について粗削りな私見を明らかにした。<sup>(1)</sup> そこでは出雲平野の弥生集落遺跡と西谷丘陵の四隅突出型墳丘墓の調査研究に基づき、西部出雲に形成された広域集団像を東南アジアの「駆市国家」にモデルを求める試みを提示した。もとよりその妥当性に確たる信念を抱くものではないが、いまもって、おおよその骨子を大きく変える必要はないと考えている。

以下においては、神庭荒神谷遺跡成立の背景をなしたと考えられる中海・宍道湖沿岸、就中出雲平野を中心とした弥生社会の動静を神庭荒神谷遺跡発見後の該時代の集落・墳墓の調査研究の成果によりながら再論してみることとする。

## 1. 歴史的舞台の形成

### (1) 出雲平野の形成史と遺跡群研究

古代出雲の壮大なドラマの一つに「国引き」物語があることは広く知られている。日本海に突き出た島根半島、背後の中国山地の北縁をなす丘陵地帯、両者の間に介在する中海・宍道湖低地帯は東西に展開する山陰地方において特徴的な地勢をなしている。この歴史的舞台が、い

つ、どのようにして用意されたかを解き明かすことは一連の「くにづくり」ドラマを理解するうえで欠かせないことであろう。神庭荒神谷に大量の青銅器を埋納した歴史主体が出雲平野に蟠踞した広域集団であったことは大筋で認められようが、その存立の条件をなした平野のありようが、まず問われなければならないのはそうした意味合いにおいてである。

出雲平野に原始・古代遺跡がいくつか存在し、その中に弥生時代の集落址の含まれることが知られるようになったのは1950年前後のことであった。<sup>(12)</sup>その後出雲考古学研究会等による分布調査の結果平野全域に約30個所の遺跡の存在することが判明し、それらは概して標高5 m以上の微高地に立地することが注意されたのである。また、矢野遺跡第1地点や知井宮多門院遺跡がヤマトシジミを主体とする貝塚とともにになっている事実も弥生時代の地域的な自然環境を理解するうえで見過ごすことのできないこととされていた。<sup>(13)</sup>

出雲平野形成の直接的な因子が完新世における海進・海退と斐伊川・神戸川の沖積作用であることは他言を要しない。二つの河川が、いつ、どのように関連し合いながら、平野のどの部分をどのように形づくったのかが、この際の関心事となる。1980年代の前半期に中海・宍道湖自然史研究会は完新世の海進・海退と両湖の変遷に関して、これをA～Eの5段階に区分して各段階の様相を図示した。これは次のように読み取ることができる。<sup>(14)</sup>

(A) 段階：いわゆる縄文海進が最高位に達した段階である。海面の上昇によって中海・宍道湖域は大社町、米子市付近から海水が侵入し、現在の島根大学付近を頂部とする東西に長い湾をなしたとし、これを「古宍道湾」、「古中海湾」と命名した。考古学の時期区分では縄文時代早期（約7000年前）とする。

(B) 段階：「古宍道湾」の西部で堆積が進行して南岸（本州側）と北岸（島根半島）が陸続きになり、東に宍道湖、西に神門水海が出現。「古中海湾」と宍道湖は大橋川によって繋がったとみる。縄文時代前期末（約5000年前）に比定。

(C) 段階：斐伊川・神戸川による堆積作用がいっそう活発になり、その結果として神門水海が縮小し、出雲平野の沖積化がほぼ完了する段階と思われる。弓ヶ浜半島が形成されて「古中海湾」は「古中海」に移行するともされる。弥生時代（約2000年前）に比定。

(D) 段階：やや海面の上昇期に当たる。神門水海の範囲が少し広がり、浜山砂丘の北に菱根池が現われる。東部では弓ヶ浜半島が「夜見島」になり、大橋川の川幅が拡大して中海・宍道湖が連なって「祇宇の入海」となる。奈良時代（約1000年前）のこととされる。

(E) 段階：近世から現在までの段階である。斐伊川が宍道湖に、神戸川は日本海にそれぞれ注ぐ。神門水海は大きく縮小して神西湖になる。中海も境水道によって日本海と繋がる。

## (2) 完新世の海水準と陸化の進行

上記の段階設定については、海進が頂点に達した時期、神門水海が出現した時期等の比定について必ずしも賛同できないところがあるが、ここではさしあたり沖積化の具体的な進み具合との関連で〔B〕、〔C〕段階に关心がもたれる。この二つの段階においては、いわゆる「弥生小海退」の進行があり、堆積作用が促進されたと考えられる。考古学的事実としては、矢野遺跡第1地点において縄文後期後半に属する元住吉山式土器の破片が採集されており、少なくとも当該時期までには矢野付近は縄文人が生活しうる程度に陸化していたと判断されるのである。<sup>[5]</sup>

林正久によれば、出雲平野の最上部堆積層（「斐伊川上部層」）には大量のデイサイト礫が包含されており、これが三瓶太平山の噴火に由来するとされている。また、「斐伊川最上部層」の直下に堆積する泥炭層の<sup>14</sup>C年代が<sup>[6]</sup>2,740±90年B.P.と測定されている。さらに、林は「この時期の平野の拡大範囲を厳密に特定することは困難であるが、神戸川出口付近の標高5mの等高線よりもやや北、矢野付近までは確實に広がっていたようで、海岸線の位置は、後述の『風土記時代』の「神門水海」に近かったと考えられる。もちろん、宍道湖側とは浅い水路で結ばれており、島根半島とは完全な陸続きにはなっていなかった。これが、今から約3千年前頃の平野の概観である。」<sup>[7]</sup>と述べている。先の考古学的事実に符合する見解として留意すべきと思われる。林は1996年にも「荒神谷遺跡の周辺の地形環境」について言及し、件の小海退の時期を「3,200年B.P.以前に始まり、2,600年B.P.までに終わった」と限定した。そして海退期の海面レベルが「現在より少なくとも2mは低かった」ことを想定している。このように縄文後期ころから進んだ小海退が斐伊川・神戸川の堆積力を若返られせ、とりわけ神戸川による三瓶火山噴出物の大規模搬出によって出雲平野の骨格ができあがったことを推測しうるのである。かくして宍道湖と神門水海が分離・成立するわけであるが、両湖が、なお、「浅い水路」によって通じていたことを、いま一度確認しておきたいと思う。

主題との関連で問題となるのは出雲平野が、下限に達した海水準と沖積化のさらなる前進、つまり安定的な陸地へと成長する過程を弥生時代を通じてどのように辿れるかである。松江市西川津遺跡・原の前遺跡の形成過程を詳細に検討した徳岡隆夫・中村唯史等によれば、弥生時代末～古墳時代初期の海水準は「-1.3~-0.2mの間」に求められるという。<sup>[8]</sup>こうした指摘をうけて筆者は弥生時代の集落遺跡の立地の点から中海・宍道湖沿岸地域の海水準と陸地形成の相関を検討してみた。<sup>[9]</sup>

前期の海水準については米子市日久美遺跡の水田址、松江市西川津遺跡・海崎地区の遺構群が参考になる。前者では、丘陵裾から沖積地にかかる緩傾斜面から約900m<sup>2</sup>の範囲で重複する3面の水田址が検出されている。前期に属するのは最下部の第3水田面で、区画そのものは明確ではないが、捉えられた面の標高は+1.0mと測定されている。後者では、前期のブロック貝塚「貝層I」の堆積する長方形土壙の底面レベルが-0.3~0.4mと計測しうることが参考となる。

同時期とされる「ウッドサクール」等の遺構も相似たレベルにある。これは山陰地方の弥生前期の遺構のレベルとしてはもっとも低い数値になる。前期の海水準が少なくとも $-1\text{ m}$ 程度であったことを推測しうる事実といえよう。

中期については日久美遺跡の第1水田面に残された方形～長方形区画の水出のレベルが+1.9～2.05mとされていることをまず抑えよう。西川津遺跡・海崎地区の中期遺構群は+1.0m前後のレベルに分布している。また、松江市南部の意宇平野では布田遺跡の中期遺構群が+2.0m前後の微高地で検出され、仁摩町川向遺跡の「ウッドサークル」の底面は+0.2mを指している。さらに、矢野遺跡は標高がやや高い微高地上に立地するが、第1地点A区の中期住居址の床面は+3.1mと計測できた。

後期の例では次のような遺跡での測定値が参考になる。まず、西川津遺跡・海崎地区で検出された「列石」遺構が+0.2mであること。ついで神門水海縁に位置する白枝荒神岸敷遺跡で中期後半から古墳時代前期の遺構群の分布する黄褐色土層上面のレベルが+2.8mとされることなどである。あるいは、西川津遺跡より下流の原の前遺跡では古墳時代前期の船着場とみられる遺構が発見されているが、遺構の石組に印された水面痕は±0mを指していて興味深い。徳岡・中村等はこの数値を当該期海水準測定の有力な手掛かりとしている。<sup>03</sup>

弥生前期から後期に到る遺跡立地点の標高を如上のように測定しうるとするならば、中海・宍道湖沿岸域における「弥生小海退」の最下位レベルは西川津遺跡・海崎地区の「貝層I」下部より検出された「土壇状」遺構の測定値からして-1.0m以下に求めるのが妥当かと思われる。そして弥生終末期の海水準が徳岡・中村等が推定した-1.3～-0.2m辺にあったとすれば、弥生時代全期間を通じて大きな変動は認められず、-1.5m前後で推移したとみてよいであろう。林が推定した-2.0mはやや低く見積り過ぎる感じ無しとしないが、弥生前期の遺構群の立地を考えすれば最下限値とすることも可能である。

ここで注意されるのは、弥生中期段階において各地の沖積平野に位置する遺跡で+1.0m前後の標高を示す微高地上から遺構が検出される事実である。この現象が微小の海水準アップを裏書きすることも考えられないではないが、なお、積極的な証左を欠くことではあり、弥生時代全期間の海面レベルが標高-1.5m辺で推移したことを想定しうることからしても、これを海水準の変化と結びつける必要はないと考える。むしろ、この期に沖積平野のいっそうの拡大と安定化があったことを推定する方が集落分布等の状況の説明には好都合であるように思われる。次では、集落遺跡の展開状況と併せてこのことも検討する。

## 2. 出雲平野における弥生集落群の展開

### (1) 出雲平野の形成

今日、出雲平野の広がりは東部で斐川町島村付近あるいは宍道町境に達し、西部では大社町

の神戸川河口より「國の長浜」の東縁まで及んでいる。また、北限、南限は北山の山麓から斐川町や出雲市の南部丘陵地帯の北縁にまで広がっている。しかし、この広がりは有史以降、とくに近世における奥出雲城の「たら」製鉄とともに「かんな流し」による大量の砂の供給と斐伊川の流路変更によって形成されたものであって、本論が対象とする弥生時代の平野の広がりとは大いに趣を異にする。いったい、弥生時代の出雲平野の広がりをどのように想定しうるかは、それ自体、地質学あるいは考古地理学上の大問題であり、また強い関心のもたれることではある。

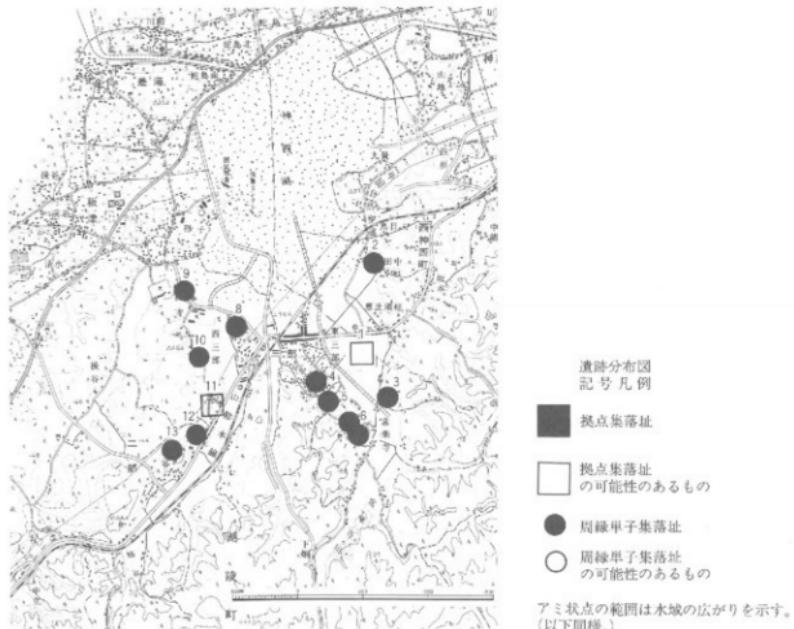
先に示したように、近年、沖積地の遺跡分布、神西湖の成立と変遷等をテーマとして当該の問題に対するアプローチが試みられており、その成果に期待が寄せられているところだが、なお、細部にわたって弥生集落の消長と相関的に対比しうるところには達していないとするのが実状であろう。そうしたなかで、林正久が地相区分による西部出雲の地形図を提示して神庭荒神谷遺跡成立の背景を探ろうとした試みは十分参考に値すると考える。とりわけ、林が「三角州Ⅰ面」、「三角州Ⅱ面」として分類した沖積面に原始・古代集落遺跡が分布することは頗著な事実であり、のことから三角州の形成と集落の展開が密接な関連を有していることは確かなことといえる。本項では、林の地形図等を下敷きにして、出雲平野の弥生集落の立地ならびに分布について言及しよう。

## (2) 集落群の分布

斐伊川・神戸川の沖積作用による平野の形成が宍道湖南縁から始まっていることを反映して各時代の集落分布が平野の南部で総じて高い密度を示すのは当然であろう。しかし、平野北西部の大社町一帯も早期に沖積化が進み、ここにも一群の集落分布が認められることは杵築社・出雲大社の成立との関連で注意を要する。そこで集落群の分布を弥生時代に限って概観すると神西湖南岸から神戸川筋に4グループ、斐伊川筋に4グループがそれぞれ存在するように見受けられるので、以下これらの集落群の分布状況と群の性格を検討しよう。

### 神西湖南岸群・第1群（簸川郡湖陵町三部～出雲市西神西町）第97図

神門水海の名残とされる神西湖の南岸には14箇所で弥生土器が出土しており、その立地・出土状況からいずれも集落址と判断される。これらは北流して神西湖に注ぐ常楽寺川、姉谷川の二河川によって開拓された狭長な谷に面する丘陵の緩斜面や河口の「三角州Ⅰ面」上に分布する。それらの中で遺跡面積が広く、縄文晩期も含めて継続・断続の時期幅のやや長い集落址は三部竹崎遺跡（東三部）である。三部竹崎遺跡は常楽寺川右岸にあり、遺物散布が確認された範囲は約4.2haに及び、さらに南方に広がると推定される。採集土器中弥生時代のそれは前期に属するもので、中・後期の土器は未発見であるが、縄文晩期、古墳前期、後期、中・近世等の遺物が多数存在することも併せ考えると本遺跡が神西湖南岸地区を代表する大規模な集落址であった可能性は高いと思われる。<sup>(12)</sup>



図番号	時代・時期 遺跡名	弥生・前期	弥生・中期	弥生・後期	古墳 前期
1	三部竹崎遺跡	■			■
2	田中谷貝塚遺跡			■	■
3	三部竹崎II地点遺跡			■	■
4	竹崎遺跡			■	■
5	中島遺跡		■ ■	■	
6	庭反I遺跡			■	
7	庭反II遺跡			■	
8	雲部I・II遺跡			■	
9	西安原遺跡			■	
10	三部八幡下遺跡	■		■	
11	鈴谷恵比須遺跡	■			
12	只谷I遺跡			■	
13	只谷II遺跡			■	

第97図 第1群遺跡分布図と遺跡の消長表

姉谷川左岸の姉谷恵比須遺跡（西三部）でも比較的広い範囲から遺物が出土する。採集土器には弥生前期、古墳前期のものがある。この遺跡の北約250mの地にある三部八幡下遺跡では縄文晚期、弥生前期と後期、さらに古墳後期から奈良時代にわたって土器が出土している。これら二遺跡は相隣接していることから一連の集落址とも考えられる。出土土器も時期的に合い補いあって集落としての連續性が示されていると思われる。この推定が当をえているならば、姉谷恵比須・三部八幡下の両遺跡は三部竹崎遺跡同様の大集落址とすることができる。

これらの遺跡以外は、現状では、その多くが小規模な集落址とみられるが、三部竹崎遺跡の対岸に位置する庭反遺跡群等は一個の大集落址となる可能性もありうる。<sup>(16)</sup> 詳細なことは今後の調査をまつことになるが、概括的にいえば、第1群とした弥生集落群は常楽寺川、姉谷川の小河川単位に形成された2小グループ群によって構成されていたということになろうか。その際いずれのグループに主導的役割を認めるべきかといえば、沖積地の広がりや集落数からして三部竹崎遺跡のグループがその地位を占めていたと認識するのが適切であろう。

神西湖南部は縄文後・晩期の遺跡がやまとまって存在するという点で一つの地域的特色を有している。これらが弥生集落の成立と有機的に繋がることを想定しうる余地は大いにあると考えられる。加えて、二部後谷の東沢田遺跡から弥生中期の土器が検出された事実を考慮するならば縄文終末期ないし弥生前期以降に連続として展開する地域集團の定在を想定してよいよう<sup>(17)</sup> に思われるが、詳細は今後の調査研究に委ねることになる。

#### 神戸川左岸群・第2群（出雲市古志町・下古志町・芦渡町・知井宮町）第98図

本群は、山地地帯を抜け出て神門水海に流入する神戸川の平野出口左岸付近に広がっている。<sup>(18)</sup> 帯の地形は古志町辺りの微高地を起点として東西に延びる「三角州I面」から成り、その周囲には小微高地が点在している。西限は知井宮多聞院辺りから西出雲駅辺りにあり、以西は神門水海の水域ないし湿地帯であったとみられ、福知守横穴墓群等多数の横穴墓群が存在する真幸ヶ丘公園周辺の丘陵塊は水海に浮かぶ孤島をなしていたと考えられる。

第2群中最大規模の集落址は東端の古志本郷遺跡（古志町本郷）である。本遺跡は神戸川の本流と枝流に挟まれた中州上（標高8～10m）に立地し、その面積はおよそ30haと計測される。弥生時代～古墳時代前期の遺構・遺物は旧国道以南の南北約700m、東西約300mの範囲から発見されている。これまでに環濠様の溝状遺構や竪穴住居址群、墓塚群が検出され、その時期は弥生中期後半から古墳時代前期に及んでいる。やや詳しく述べると、溝状遺構は中州西縁を自然流路に沿ってほぼ南北に延びている。弥生中期後半に掘鑿され、数度の掘り直しを経て弥生終末期から古墳時代前期に放棄・埋没したものとされる。後者は弥生終末期、古墳時代前期に人為的に埋められたとされ、埋土の上面には当該期の土器が一定の間隔を置いて並べられていた。これらの溝が環濠として集落の全体を囲っていたことを確証することはできないが、溝の形状や延びる方向等からみてその可能性は高く、古志本郷遺跡が一個の大規模な環濠集落であ

ったことを想定してよいといえる。

竪穴住居址は弥生中期後半から後期初頭に属する一群が中州の中央やや西よりの地区で発見されている。円形プランで中央ピットと4~6本の柱穴をもつ構造である。加えて、中期後半の土器はほぼ中州の全城で採集されているから10棟前後を一グループとする住居群が環濠の内側に数単位存在していたことがうかがえる。なお、弥生終末期の住居址内埋土にはヤマトシジ



図番号	時代・時期 遺跡名	弥生・前期	弥生・中期	弥生・後期	古 前 墳 期
1	古志本郷遺跡		■		
2	弘法寺参道前遺跡			■	
3	正蓮寺周辺遺跡		■	■	
4	田畠遺跡		■	■	
5	多聞院北遺跡		■	■	
6	東原遺跡		■	■	
7	知井宮多聞院遺跡		■	■	
8	嘉儀遺跡		■	■	
9	芦渡遺跡		■	■	
10	観知寺付近遺跡		■	■	

第98図 第2群遺跡分布図と遺跡の消長表

ミを主体とする貝塚が堆積していた。さらに、墓壙と覚しき土坑群は北東地区で検出されている。弥生終末期に属する。この種の遺構については後世の遺構との重複が激しいため明確な形で捉えることは困難であるが、中州の各所に群在することが予測される。

以上のように古志本郷遺跡は、その規模、集落としての継続性等から判断して第2群の中核となる集落址であることは、ほぼ疑いない。玉作関係の遺物が出土していることもこの認識を助けるものである。

第2群中で古志本郷遺跡に次ぐ内容を備えている遺跡としては知井官多聞院遺跡をあげるべきであろう。<sup>(15)</sup> この遺跡は神戸川左岸<sup>(16)</sup>微高地の西端にあり、往時は神門水海の岸辺に臨む集落であったと考えられている。推定される遺跡の範囲は約6ha程度でせいぜい一個の「単子集落」が占有する面積に留まる。しかし、すぐ北隣には多聞院北遺跡(約180×150m)、東へは数10m離れた場所に東原遺跡(約300×200m)があり、それぞれ弥生土器が広範囲に散布する。これらは、その近接状態からして多聞院遺跡を取り巻く親縁関係にある集落址群と考えることができよう。<sup>(17)</sup> 多聞院遺跡には10m四方に広がるヤマトシジミ主体の貝塚が存在し、そこからは弥生中期後半代から古墳時代前期に及ぶ土器が多量に出土している。集落の継続性という点では古志本郷遺跡と変わらない。ここでは多聞院、多聞院北、東原の三遺跡を一体の集落群と捉え、第2群西端に占地する一集落ブロックの存在を想定しておきたい。

多聞院遺跡群の南方には入江状に湿地が広がり、これを挟んだ対岸の東西方向の微高地上—JR山陰線と山陰道が走る—には儀儀遺跡、芦渡遺跡、観知寺付近遺跡等の弥生集落址が列状に並んでいる。個々の詳細は明らかでないが、これらも多聞院遺跡群とともに第2群の西小群を形成していたものと思われる。

古志本郷遺跡の西側にも同様の中小遺跡が存在する。古志本郷の中州とは神戸川の枝流を介して正蓮寺周辺遺跡、その北東に弘法寺参道付近遺跡、南東に田畠遺跡等がある。正蓮寺周辺遺跡では多条の溝状遺構が検出され、うち2条(1条は断面「W」型の大規模な溝)は集落を取り巻く径約300m以上の大規模な環濠となる可能性がある。これらの溝状遺構は弥生中期後半代に掘鑿され、弥生終末期もしくは古墳時代初期に人為により一齊に埋没・廃棄されている。また、おそらく環濠内部に相当すると思われる区域には同時期の竪穴住居址、掘立柱建物跡、土壙墓、井戸址等が発見されているが、それぞれは互いに分布域を異にする。つまり、住居址群に隣接して掘立柱建物群があり、その外縁に土壙墓群が位置するように観察された。さらには複数の居住域が存在する可能性もある。田畠遺跡では中期後半代から居住が始まる。環濠らしい溝状遺構が発見されて、本遺跡も正蓮寺周辺遺跡同様の構造をもつことが考えられる。

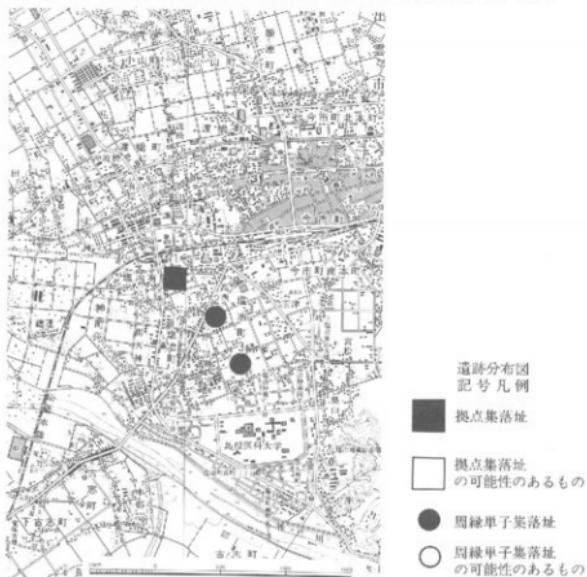
以上のように、神戸川左岸群では東西に延びる微高地東端の古志本郷遺跡を拠点として三つの集落ブロックが形成されていたことが知られる。今後西端の2ブロックは一個の集落群と見直される可能性のあることも否定できないが、いずれにしても、古志本郷遺跡が弥生中期中葉

にあたかも突如として出現し、続いて、中葉から後葉にかけて各集落が横並びで一斉に営村を開始し、それぞれに集落ブロックを構成したことを想定しておきたい。

#### 神戸川右岸群・第3群（天神町・塩治有原町・塩治町・上塩治町） 第99図

本群は神戸川右岸の南北に連なる三角州面と微高地に展開する。群の中心となる集落址は天神遺跡である。<sup>30)</sup>神戸川の河口近くに位置していたと推定されるこの遺跡の広がりは東西約450m、南北600mと測定しうる。うち、弥生時代の集落範囲は必ずしも明確ではないが、北側と南側で検出された弥生中期後半代の溝状遺構（環濠の可能性あり）の位置を参考にすると南北約550m、東西350～400m程度かとみられ、古志本郷遺跡と相似た規模を有していたことが考えられる。

溝状遺構の多くはJR山陰線の軌道下で発見されている。弥生中期後半代の溝には上幅6mに達する大規模のものがあり、同時に、並行する数条の溝状遺構の存在が判明している。この事実から天神遺跡を多条環濠集落として捉える可能性が生まれている。その他の顕著な遺構としては弥生中期後半代の土墳墓群をあげることができ、これらは溝状遺構に接して一定の墓域を形成していたと思われる。いくつかの墳には緑色凝灰岩製の管玉をともなう例があった。また、遺跡内の低地部分ではウッドサークル状の遺構



図番号	時代・時期 遺跡名	弥生・前期	弥生・中期	弥生・後期	古墳 前期
1	天神遺跡			■	■
2	高西遺跡			■	■
3	神門寺境内廐寺遺跡			■	■

第99図 第3群遺跡分布図と遺跡の消長表

が検出されており、そこから木製鋸の未製品等がえられている。

こうした事実と観察からえられる天神遺跡の特徴としては、第一に多条な環濠を伴う大規模な集落址であることがあげられ、第二として弥生中期中葉から古墳時代前期ころまで集落の継続性がほぼ確認できることを指摘しておきたい。また、木製農具等の生産が行われていたことも注意されよう。これらの特徴は、天神遺跡が撲点的な弥生集落であったことを示すと思われるが、同時に検出された奈良時代に属する遺構・遺物の存在によって、本遺跡に神門郡の郡衙が置かれたと推定されていることも間接的ながらこの想定を補強するのではないだろうか。

天神遺跡の周辺で弥生時代の集落址が存在すると考えられるのは東に隣接する高西遺跡と東南に位置する神門守境内庵寺遺跡である。集落内容は不詳であるが、天神集落の成立にあまり遅れることなく居住が開始されたと推定される。<sup>(35)</sup>

神戸川右岸の微高地には古墳時代から奈良・平安時代の集落址が疎を接するように立地している。また、この地区には古墳時代後期に大念寺古墳、上塙治築山古墳、地蔵山古墳等の大首長墓が世代連続的に築造されていて6世紀中葉から7世紀前葉にかけて西部出雲の撲点地城となっている。天神の地に神門郡郡衙が設置されたのは弥生時代以来のそうした歴史が背景をなしている。

#### 斐伊川左岸群・第4群（大津町・北新町・中野町）

第4群とした遺跡群は、斐伊川の平野流入口付近から北ないし北西方向に延びる左岸の微高地上に立地する。この群に属する遺跡は斐伊川鉄橋遺跡、石土手遺跡、太歳遺跡の三遺跡で、<sup>(36)</sup>採集された弥生土器には中期後半代から後期、そして古墳時代前期のものなどが含まれる。注目される遺跡は斐伊川鉄橋遺跡で、1962年にJR山陰線の鉄橋脚付替工事に際して現在の川床よりマイナス約7m（標高約+6m前後）に横たわる砂と粘土の互層中より弥生土器や土師器・須恵器が多数採取されたことである。この事実は川床下にかなり安定的な集落址が存在することを物語っている。そして当該時期には斐伊川主流が現在よりも東側を流れ下っていたことを示している。周辺には、さらにいくつかの同時代集落が存在したことも予想されよう。詳細は今後の調査をまつことになるが、本群は大型四隅突出型埴丘墓群の築造されている西谷丘陵遺跡足下の集落群として関心がもたられよう。

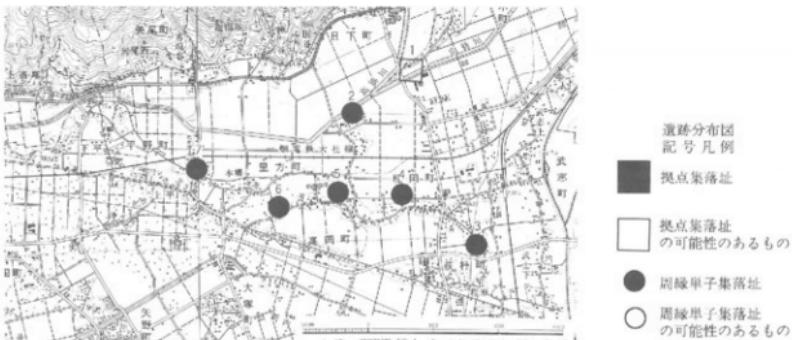
第5群としてまとめることができる遺跡群は平野中央部に広がる四絆遺跡群である。この群については群構成とその性格を明らかにするための素材が比較的多くえられていることから別項で紹介し、それによって遺跡群の構造と特性を検討することとし、以下第6群から第8群の様相を順次説明する。

#### 斐伊川北岸＝里方別所高浜群・第6群（武志町・荻籽町・稻岡町・高岡町・里方町）第100図

斐伊川の一主流が流れを北ないし北西方向から西向きに変えた個所の右岸の自然堤防状微高地に一組の遺跡群が捉えられている。これを第6群とする。所属する遺跡は、山持川川岸遺跡、

里方別所遺跡、荻杼遺跡、稻岡Ⅰ遺跡、稻岡Ⅱ遺跡、多福寺西遺跡、高浜駅周辺遺跡となってい。これらは、山持川川岸遺跡を除いては、いずれも分布調査によって確認されたもので、<sup>(27)</sup>弥生時代後半の集落址と考えられるが、その構造等は不明である。

山持川川岸遺跡は微高地の北側にあり、北山と微高地間の広大な湿地縁に耕地を開発して當村が行われていたものと思われる。その起源は弥生中期後葉に遡り、最盛期は弥生後期後半代から古墳時代前期にある。その後に突然集落は廃絶しており、斐伊川の洪水が直接の原因と推定されてもいる。これまでに多数の供獻土器を伴う土壙墓群と竪穴住居址、掘立柱建物跡が検出され、集落の一角が明らかになっているが、全体構造は、なお不明とせざるをえない。しかし、弥生中期後半代を起点にしつつも、後期後半以降に繁栄期を迎える本遺跡のありかたは出



図番号	時代・時期 遺跡名	弥生・前期			弥生・中期		弥生・後期		古前 墳期	
		弥生・前期	弥生・中期	弥生・後期	古前	墳期	弥生・前期	弥生・中期	古前	墳期
1	山持川川岸遺跡				■					
2	里方別所遺跡					■				
3	荻杼II遺跡					■				
4	稻岡I遺跡					■				
5	稻岡II遺跡					■				
6	多福寺西遺跡					■				
7	高浜駅周辺遺跡					■				

第100図 第6群遺跡分布図と遺跡の消長表

雲平野の弥生集落のいま一つの典型として注目しておきたい。<sup>(20)</sup>

#### 大社町域群・第7群（簸川郡大社町）第101図

第7群は原山遺跡を中心とするグループとする。神門水海に突き出た浜山砂丘と北山の山麓、その反対の西側の砂丘縁、そして日本海岸の三方に弥生集落址がみられる。北山山麓と浜山砂



図番号	時代・時期 遺跡名	弥生・前期	弥生・中期	弥生・後期	古墳 墳期
1	原山遺跡		■ ■ ■	■ ■ ■	
2	修理免本郷遺跡			■ ■	■ ■
3	命主神社遺跡 (銅戈等出土)		■ ■ ■		
4	大社境内遺跡	■ ■ ■	■ ■ ■	■ ■ ■	
5	南原遺跡	■ ■ ■	■ ■ ■	■ ■ ■	
6	鹿藏山遺跡			■ ■ ■	
7	稻佐遺跡			■ ■ ■	
8	ひろげ遺跡		■ ■ ■	■ ■ ■	

第101図 第7群遺跡分布図と遺跡の消長表

丘の間には「菱根池」と呼ばれた深い入り江があり、そのもっとも奥部に出雲大社境内遺跡がある。ここでは縄文後・晚期から弥生前～後期、さらに古墳時代以降中・近世に至る遺物が発見され、ことに弥生土器や古墳時代の土器の包含層から大量の炭化物が検出されたことは本遺跡の性格を考えるうえで看過すべからざる事実であって、北山山麓の扇状地に特異な長期継続的な大集落が存在したことがうかがわれる。<sup>(27)</sup> 加えて、この地が広大な大社神殿域に属することを考慮するならば本遺跡が集落址として有する意義には格別なものがあることを予測せざるをえない。

原山遺跡は大社境内遺跡の東に隣接している。遺跡の範囲は東西約200m、南北約300mとされ、縄文後・晚期から弥生前期・後期、そして古墳時代以降も連続として集落の継続が認められる。弥生前期の土器には「出雲原山式」と命名された出雲地方では最古の土器群が含まれ、南東の矢野遺跡とともに「稻作農耕発祥の地」として知られている。これまでに弥生前期と後期の配石墓が検出され、磨製石剣と朝鮮系無文土器等が採集されている。<sup>(28)</sup>

原山遺跡の対岸で菱根池を挟んだ北の山麓には修理面本郷遺跡がある。南北約150m、東西約300mのかなりの規模を有している。古墳時代後期に盛期があるが<sup>(29)</sup>、弥生後期、古墳時代前期の土器も採集されている。また、大社境内遺跡と修理面本郷遺跡の間には命主神社遺跡（真名井遺跡）がある。江戸時代に神社の背後の大石の下から銅戈（中細形b類）と硬玉製勾玉、それに銅剣（中細形c類か）と「銅矛」2本が出土したと伝えられ、前二者は現存する。<sup>(30)</sup>

大社境内遺跡、原山遺跡、修理面本郷遺跡、命主神社遺跡の4遺跡は、相互に密接な関連をもつ一体的な遺跡群とすることができ、後述の四絆遺跡群とともに出雲平野全地域の核地域を構成する有力な集落群であったことが想定される。古墳時代以降は大社境内から命主神社の一帯が一種の「聖地」であったとみなす見解が提示されていることに注目したい。<sup>(31)</sup>

砂丘西線に並ぶ南原遺跡と鹿藏山遺跡は、現状では前者が弥生前期から、後者が後期からの居住が認められている。いずれも奈良・平安時代に及ぶ長期継続の集落で、古墳時代の貝塚が残されている。弥生時代以降神門水海や日本海での漁業活動の拠点となった集落とも考えられる。前に日本海を控えた稻作遺跡も同様の集落址であろう。また、岩海岸に面するひろげ遺跡は弥生後期以降に現われた祭祀的集落とされる。総じて大社町域は出雲の地の西の玄関口に当たり、町内遺跡の出土遺物等にもその片鱗が表わされている。第7群とした当城の遺跡群には、そうした意味で格別の評価が必要と思われるが、具体的な把握はやはり将来的課題である。<sup>(32)</sup>

#### 仏経山山麓群・第8群（簸川郡斐川町）第102図

斐伊川右岸の仏経山山麓地帯では荒神谷遺跡の発見以来関連遺跡の存在が問われてきた。この地域は、近世に鉄穴流しによる大量の土砂が斐伊川の東流にともなって厚く堆積し、古代・中世の地形と遺跡の詳細はほとんど明らかにしえない状況にあった。だが、近年斐川町後谷V遺跡等の調査を契機に一帯の弥生遺跡についていくつかの知見がえられ、ここに1～2群の弥

生集落群の存在が判明してきたのである。以下後谷V遺跡を中心にその状況を述べる。

後谷V遺跡は仏経山北麓に位置している。ここでは、奈良・平安時代の大規模な倉庫址群が発見され、これらは出雲郡の郡衙に設けられた都倉とみなされている。出土遺物には多量の当該期の土器や炭化米があり、それに混じって縄文後・晩期、弥生前～後期、古墳時代前期等の土器も少からず出土していて、ここに長期継続型の弥生集落が営まれていたことが知られるのである。このことは、実態はなお不明ながら、出雲郡衙が先の神門郡衙同様に弥生時代以来の拠点的な集落を継承する形で設置されたことを推定させる。<sup>(37)</sup>

後谷V遺跡の東南の氷室IV遺跡や北東方向の低丘陵にある平野I遺跡<sup>(38)</sup>でも弥生土器が採集され、同じく丘陵上の杉沢遺跡<sup>(39)</sup>では中期後半の堅穴住居址が検出されていて、仏経山を背後に背負う一群の集落群の存在が浮上している。

さらに、後谷V遺跡の東方には仏経山麓の低丘陵（結・平野丘陵と仮称）が北に大きく張り出している。その東の南北に細長く延びる谷奥に神庭荒神谷遺跡がある。隣接地の西谷遺跡<sup>(40)</sup>からは弥生後期の土器が出土した。また、谷口付近には弥生中期後半代の土器が多量に採取された宮谷遺跡がある。その出土層のレベルが標高+1.8mとされていることも大いに注意を要する。<sup>(41)</sup>

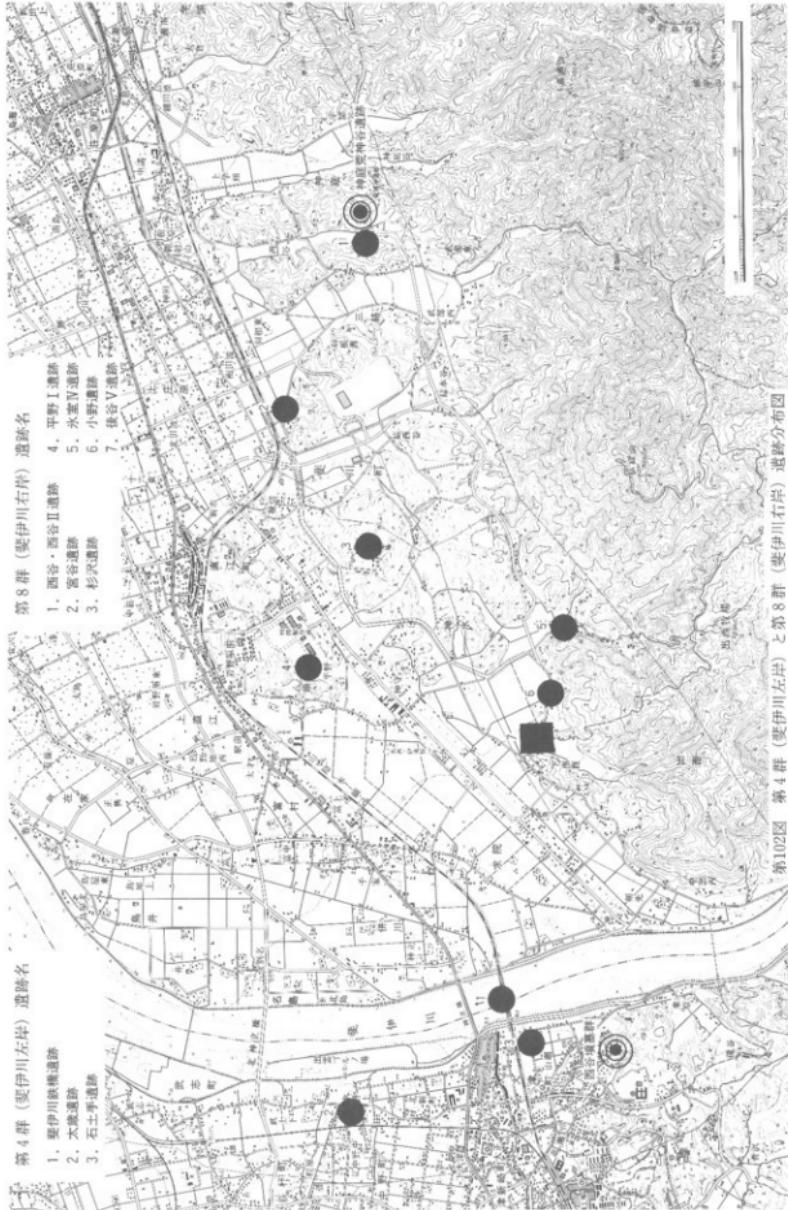
以上の諸遺跡をひとまとまりの集落群として括ることが可能か否かは今後の調査によって決することになる。その結果、結・平野丘陵を境に2小グループに分割されることも十分予想されるところではある。奈良時代前後の宍道湖西岸の汀線がこの丘陵付近にあったと推定されていることも考慮する必要がある。いずれにしても、仏経山北麓において、神庭荒神谷遺跡と直接関わる農業集団の姿がおぼろながらみえはじめたことは重視されるべきであろう。

出雲平野は斐伊川・神戸川の生み出した新生の大地である。その沖積作用に合わせて8群の弥生農業集団が平野の各所に展開した。各群の占地域は、自然流路によって分け隔てられた一定範囲の微高地を単位としており、およそ2～3kmの帶状または塊状に広がるのが特徴的である。これらには縄文晩期・弥生前期を起点とする集団と弥生中期中葉以降に一斉に居住を開始する集団の2類例のあることが知られた。そして、弥生中期後葉前後には8集団が出揃い、各々特性を發揮しつつ西部出雲の農耕社会の盛期を創出したと考えられる。

### 3. 農業集団の構造と性格

#### （1）四絡遺跡群（第103図）

出雲平野の弥生農業集団の構造を第5群とした四絡遺跡群（出雲市矢野町、小山町、大塚町、白枝町）を例に検討しよう。本群は斐伊川と神戸川の合成三角州の最前面（「三角州Ⅰ面」と「三角州Ⅱ」の一部を含む）に位置している。その範囲はおよそ2km四方に及ぶと推定される。これまでに知られた集落址は矢野遺跡、小山遺跡群、大塚遺跡、白枝荒神屋敷遺跡で、これらは



第46表 第4群(斐伊川左岸)と第8群(斐伊川右岸)の遺跡の消長表(上段が第4群、下段が第8群)

図番号	時代・時期 遺跡名	弥生・前期	弥生・中期	弥生・後期	古墳 前期
1	斐伊川鉄橋遺跡			■■■■■	
2	太歳遺跡			■■■■■	
3	石土手遺跡			■■■■■	

図番号	時代・時期 遺跡名	弥生・前期	弥生・中期	弥生・後期	古墳 前期
1	西谷I・西谷II遺跡			■■■■■	
2	宮谷遺跡		■■■■■		
3	杉沢遺跡		■■■■■		■■■■■
4	平野I遺跡			■■■■■	
5	氷室IV遺跡			■■■■■	
6	小野遺跡			■■■■■	
7	後谷V遺跡	■■■■■	■■■■■	■■■■■	

三角州面を乱流する神戸川の本・枝流によって相互に区分けされていて、境界はかなりはっきりしている。諸遺跡の標高はほぼ+3~4mを示す。以下、各遺跡の概要と特徴点を記してみよう。

<sup>(40)</sup> 矢野遺跡 第5群の西北部の微高地上に広がる群内最大の集落址で、その範囲は東西約350m、南北約600mと計測される。縄文後・晚期から居住が行われ始めて現在に至るまで絶えることなく集落が営まれており、そういう意味では出雲平野の典型的な集落遺跡といえる。弥生土器は遺跡の全城で採集されているが、地点によって散布量や出土量に濃淡・多寡があり、これを参考に第1~6地点に区分けしている。

第1・第3地点では弥生前期から後期さらに古墳時代前期までの土器が大量に出土する。出土量の多いこともさることながら全時期にわたる土器の存在が確認されているのは出雲平野の多数の集落遺跡中でもこの地点だけである。また、前期の土器は「出雲原山式」とみられ、同一箇所で縄文後期・晚期の土器が採集されていることをも考え合わせると第1・3地点一帯で最初の弥生農村が誕生した可能性はきわめて高いといえる。なお、同様の想定は矢野の西北に位置する原山遺跡でも試みたところである。

前期後半代の土器は第1・第3地点や第2地点の矢野神社付近から出土しており、微高地の西側で集落が拡大したものと判断される。その範囲は径約200m前後とみられ、弥生前期段階で集落の面的な広がりを確認することができる。あるいは矢野集落の核部分が形成されたとして

もよい。緑色凝灰岩等を素材とする玉作はこの時期に行われたようである。中期前葉の土器の出土は、いまのところ少量で集落規模の縮小が考えられなくもない。このことは平野の大半の集落が中期中葉ないし後葉から一斉にスタートしていることとともに検討が必要である。

中期中葉から後期の土器は、新たに第4～6地点での出土が加わって微高地全城に存在している。とくに第1・3地点での土器の出土量は、経験的な判断ではあるが、平野全遺跡でも傑出するとしてよい。また、土器型式の面での漸進的な変遷過程がうかがえ、安定的な長期継続型集落として確立されたのではないかと思われる。

その他、第1地点では重複する中期後葉の竪穴住居址群と土壙墓群が検出され、管玉とともに

なった後期の土壙墓群も発見されている。なお、朝鮮系無文土器片が出土していることを付記しよう。矢野遺跡は別名「矢野貝塚」と呼ばれ、ヤマトシジミを主体とする貝塚が第1地点にある。その形成期は弥生後期で一部は古墳時代前期の堆積とみられる。さらに、後期の顯著な遺物として第3地点から「特殊

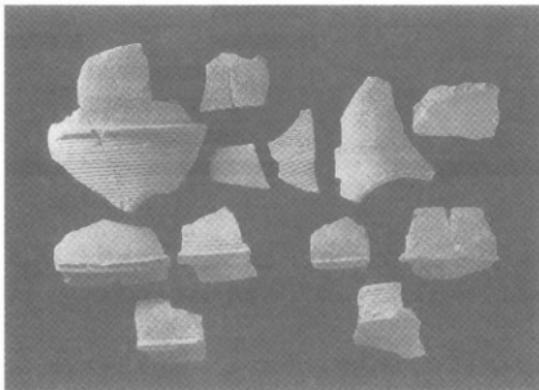
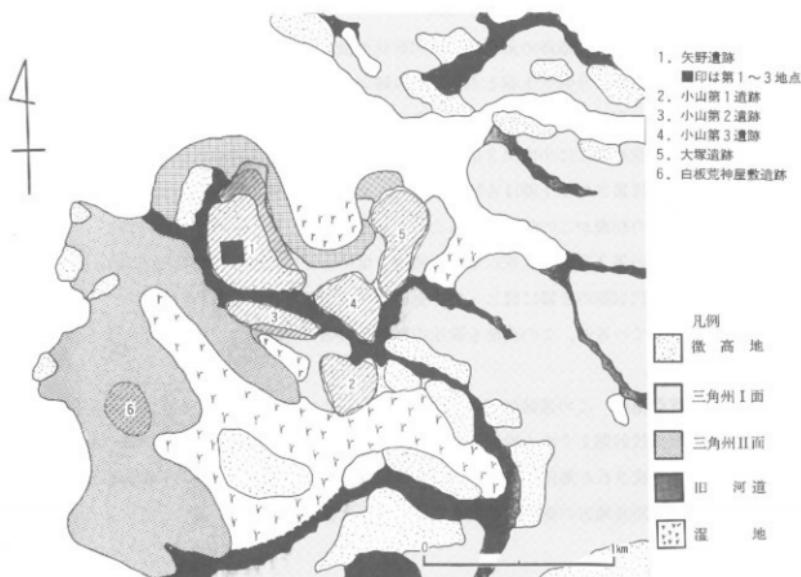


写真9 矢野遺跡第3地点出土の特殊土器

壺」、「特殊器台」、「普通装飾器台」が複数回体えられている。これらは「立坂型」あるいは「宇垣第一型式」<sup>(40)</sup>に属する。これまで山陰地方で吉備の「特殊壺」・「特殊器台」がセットで出土した例は西谷3号墓、同4号墓のみであった。けだし矢野遺跡の拠点性を端的に示す遺物ということができる。

このような知見に導かれて弥生集落としての矢野遺跡の性格を判定すれば、これを長期継続型拠点集落の一典型とみなすことができよう。次には周囲の集落との比較においてこのことを検証してみよう。

**小山遺跡群** 矢野遺跡の南側と南東側には三角州面に載る微高地が3個所存在している。いずれも弥生土器や古墳時代の土器が採集されており集落址とみて誤りない。矢野遺跡と幅約30m程の河道を隔てて東西に帶状に延びる微高地（長さ約500m、幅約150m）に存在するのが小山第2遺跡である。弥生中期後半から集落が営まれ、古墳時代に継続している。弥生土器の散布



第103図 第5群・四絡遺跡群分布図(林正久1996原図を改変)

第47表 第5群・四絡遺跡群の遺跡の消長表

時代・時期 遺跡名	弥生・前期		弥生・中期		弥生・後期		古墳 前期
	前半	後半	前半	後半	前半	後半	
矢野第1地点							
矢野第2地点		■					
矢野第3地点			■				
矢野第4地点							
矢野第5地点					■	■	
矢野第6地点					■	■	
大塚遺跡					■	■	
小山第1遺跡			■		■		
小山第2遺跡					■		
小山第3遺跡					■	■	
白枝荒神星敷遺跡					■	■	

[■] 遺物散布量疎 [□] 遺物散布量並 [■■] 遺物散布量多

密度はやや薄い。この遺跡の南東には梢円形状の微高地（東西約150m、南北約250m）小山第1遺跡があり、やはり弥生土器と古墳時代以降の土器が出土している。弥生土器は後期のもので、この時期の環濠様の溝状遺構が検出されている。小山第1遺跡、同第2遺跡の対岸、矢野遺跡の南東の微高地には小山第3遺跡が確認されている。微高地の広がりは第1遺跡と同程度と思われる。採集された土器は古墳時代のものが多いが、弥生中期後半代の土器等も見出されていて、集落の起源がこの時期にあることが知られる。

**大塚遺跡** 小山第3遺跡の北東にも狭い河道を境にしてやや広い微高地（約500m×200m）がある。古墳時代以降の土器に混じって少量の弥生中期後半代の上器が採集されている。大塚遺跡と命名されているが、この遺跡も弥生中期後半の頃に集落経営が始まっているとみてよいだろう。

**白枝荒神屋敷遺跡** この遺跡は矢野遺跡の南西約600mの地に位置する集落址で弥生中期後半代から古墳時代前期までの土器が大量に出土している。神戸川三角州の最前面の神門水海の水辺に沿って形成された集落とみられ、その範囲は約300m×250mに及ぶと推定されている。山陰西部地方や防長地方の弥生土器あるいは分銅形土製品等の外來の遺物が見出されるのもこの遺跡の特徴である。

以上のように、矢野遺跡とその近辺に存在する小山遺跡群、大塚遺跡、白枝荒神屋敷遺跡は斐伊川・神戸川の合流三角州前面に展開した弥生集落群である。各集落は、河道、あるいは湿地沿いに孤島状に点在する微高地にあり、そのことによって互いに他集落と明確に区分された。しかし、同時に河道や湿地を介して相互に結びあう側面があったことも十分予測できる。そうした集落の立地環境によってもたらされる地縁的な親近性は、おそらく基幹産業である水稻農業の経営面での協力・共同の関係を必然的に生み出し、維持することへの確たる条件を提供したに違いない。われわれが上記4遺跡を四絡遺跡群として捉えた主たる根拠はそのことにある。そして、その相互関係は、通説に従って矢野遺跡と小山1～3、大塚、白枝荒神屋敷の5遺跡の関係を親村一子村の関係で把握しうると考えるのであるが、それには、なお別の角度からの補強が必要かと思われる所以を改めて検討する。

## （2）換点集落と農業集団

矢野遺跡と周囲の5遺跡の協力・共同関係は、具体的には農業生産活動において実現したことであろう。日常の生産の場となる水田は各集落の位置する微高地縁に沿かれ、それぞれの集落が個別に経営したことは遺跡群周辺の地形から容易に推測できる。また、水田への用水は神戸川の枝流等から供給されたと見做さざるをえない。しかりとすれば、そこには水利や耕地の用益をめぐって一定の共同体的慣習が働いていたことも想定しなければならない。

如上のように考えた時、矢野遺跡が、生産活動の場に現われる共同体的諸関係維持の核の役割一多分に矢野集落に居を構える集団首長を介してのことと思われるが一をどのように果たし

えたかが問題となろう。そのことについては集落の規模や継続性から指定期だけでは説明し切れない恨みがある。しかし、現時点では矢野遺跡にはそのような説明材料が乏しい。そこで、この問題を中海・宍道湖低地帯東部の代表的弥生集落である西川津遺跡の遺構と遺物によって解き明かしてみよう。

西川津遺跡は松江市東部の持田平野にある大規模な弥生集落址である。<sup>148</sup> 東西約1.2km、南北は約0.3kmとされるが、南北の広がりは正確には把握されていない。遺跡の西南には「たてちょう」遺跡があり、両者は一個の農業集団を形成していたとみることができる。西川津遺跡の指定期は、第一に集落の広がりにあり、集落内に複数の単位集団が含まれていることを想定している。第二点は集落の継続性であって、これも土器型式の連続性から捉えることが可能である。弥生時代全期間の詳細な継続が確認できる。第三点は木製品や石器類の生産址であったことが判明して、安定的な生産拠点として理解できることである。木製農具類の完成品、半成品、材料、製品と材料を保管する施設としてのウッドサクール状造構の存在。大陸系磨製石器の製作を示す石材や未成品の出土。とくに根幹的な生産要員としての大型蛤刀石斧の量産が認められたのは重要である。第四点は朝鮮系無文土器、鋳造鉄斧等の搬入品もしくはその模造品の数々が語る交易拠点としての性格、といった諸点に指定期をうかがうことができた。加えてゴホウラ製貝輪（「諸岡型」系）と多数の白玉が出土し、それを着装したと口される首長身分の遺体が検出されていることも指定期の重要な証しとみられよう。

既に述べたように、矢野遺跡では生産拠点としての性格を示すような遺構・遺物はほとんど見られていない。しかし、西川津遺跡が備えている6項の指定期を表わす指標中5項は、十分とはいえないが、備えている。また、西川津遺跡では明らかにしない中核的集落（指定期集落）と近接集落（単子集落）との関係を四絆遺跡群では具体的に指定期することができた。このような事情を考慮し、かつ、両遺跡の指定期の性格を相互に補い合わせて考察することが許されるならば、中海・宍道湖沿岸の弥生指定期集落の様相はかなり明瞭になる。やや、結論を急ぐことになるが四絆遺跡群は矢野集落を指定期として互いに共同体的な諸関係を取り結ぶ一個の農業集団として把握されうることになる。山陰平野の各所に展開した8群の集落群もまた同様の農業集団として捉えることができよう。ただし、それらが全て同等均質の集団であったということではない。今後指定期集落と周縁の単子集落の内部構造や盛衰状況等を検討することによって集団間に存在する差違を解明する必要がある。

#### 4. 広域集団、その成立と変遷

##### (1) 広域集団の形成（第104図）

出雲平野に蟠居した八つの農業集団には弥生前期から中期前半代の集落を母体にしてそこから子村ないし娘村が分岐して一個の農業集団を誕生させるケースがあり、これには四絆遺跡群

が相当した。あるいは、大社町域の原山遺跡群・第7群もこの例に当てはまる可能性があるし、三部遺跡群・第1群もこの類として検討の余地を残している。これらとは相違して神戸川左岸群・第2群や神戸川右岸群・第3群は弥生中期中葉に忽然と現われる古志本郷遺跡や天神遺跡を拠点として急速に農業集団としてまとまったケースとみられた。後者が前者から分離し、相対的に自立した集落として出発したのか否かはにわかに結論づけ難い。しかし、天神遺跡で一部明らかにされた集落構造、とりわけ中期中葉～後葉の土墳墓群で占められる墓域の存在、多条環濠の掘削といった様相は、すでに形の整った出来合いの集落が移入されたかの観を抱かせる。古志本郷遺跡にも似た様相が垣間みられた。このことは、同時に、中期後半代に各群内において拠点的集落の周間に、ほぼ一齊に関連集落が成立し、農業集団としてのまとまりができるあがってくることと連動する現象とも見受けられる。そうした動向は、東部の西川津遺跡や布田遺跡等の拠点集落で中期後半代にやや凋落の相が認められるのと好対照をなして興味深い。中海・宍道湖低地帯全域の弥生集落を縦点検したことになろうが、出雲平野の状況に限っていえば、平野外からの集団的移住もしくは流入を念頭に置く必要があるのかもしれない。

いずれにしても、複数の農業集団の誕生によって弥生時代前半期とは打って変わった状況が出雲平野一円に現われたといってよい。また、出現した農業集団が相互に新たな結合関係を成立させる契機が生まれたであろうことも想像に難くない。わけても、「八岐大蛇」に擬える暴雨川の斐伊川や三角州面を迷路状に流れる神戸川との対決には一農業集団の力量を越えた人力と物量の投入を要したに相違ない。あるいは、治水事業以外にも各農業集団が連携を維持し、深めて行く、または、強めざるをえない状態に置かれたことは概念的に想定しうるところである。だが、ここでは当該時代の考古学的事実、もしくは資料によってそうした情況を具体的に証すことが求められるであろう。そうした課題解明の鍵を神庭荒神谷遺跡の青銅器群が握っていることは大方の指摘するところであって、青銅器祭祀のありかたの追究は農業集団の合一体である広域集団の成立を解くことと深く関わっているといえる。

以下、広域集団の形成について青銅祭器の三つの埋納例によって検討する。

その一は中野仮屋銅鐸（島根県邑智郡石見町）の場合である。向歛無山という神奈備形の山の南麓から1914（大正3）年に2個の銅鐸が掘り出された。中野仮屋銅鐸として知られる2個の銅鐸（1号鐸＝突線鋤1式・流水文、2号鐸＝扁平鋤式6区袈裟櫛文）である。1989年にわれわれは、彼の銅鐸の出土地点を再発掘して埋納坑の存在を確認した。<sup>(4)</sup>

この銅鐸の保有主体と考えられるのは於保地盆地の広域集団である。盆地は東西約6km、南北約1.5km、中央を矢上川が東流している。弥生時代の遺跡は、銅鐸出土地を含めて12個所存在する。それらは上流の一群と下流の一群とに分けることができる。銅鐸の直接管理主体は下流群、その中心的位置を占める余勢の原遺跡の集団であったと思われる。この遺跡は盆地中最大

規模の集落址で、弥生時代の全時期と古墳時代以降の土器が多量に検出されている。拠点的集落としてよい。二つの集落群を出雲平野の例に照らして想定するならば、それぞれは一個の農業集団とみなすことができ、両群相まって広域集団を形成していたのであろう。2個の銅鐸はその広域集団の祭器として余勢の原の拠点集落の管理下に置かれたと推定しておきたい。<sup>147</sup>

その二是志谷奥遺跡出土の2個の銅鐸と6本の銅剣の保有主体についてである。この青銅器群は直接的には恵曇海岸の砂丘から発見された古浦遺跡の墓地を営んだ集落で保有・管理されていたと推定される。古浦遺跡は弥生前期の著名な埋葬式であるが、前期以後にも引き続いで埋葬が行われている。このことは取りも直さず墓地經營の集落が長期継続型に属していることの証左であり、墓地の規模からみてもこの遺跡が拠点的集落であったことは察しがつく。<sup>148</sup>

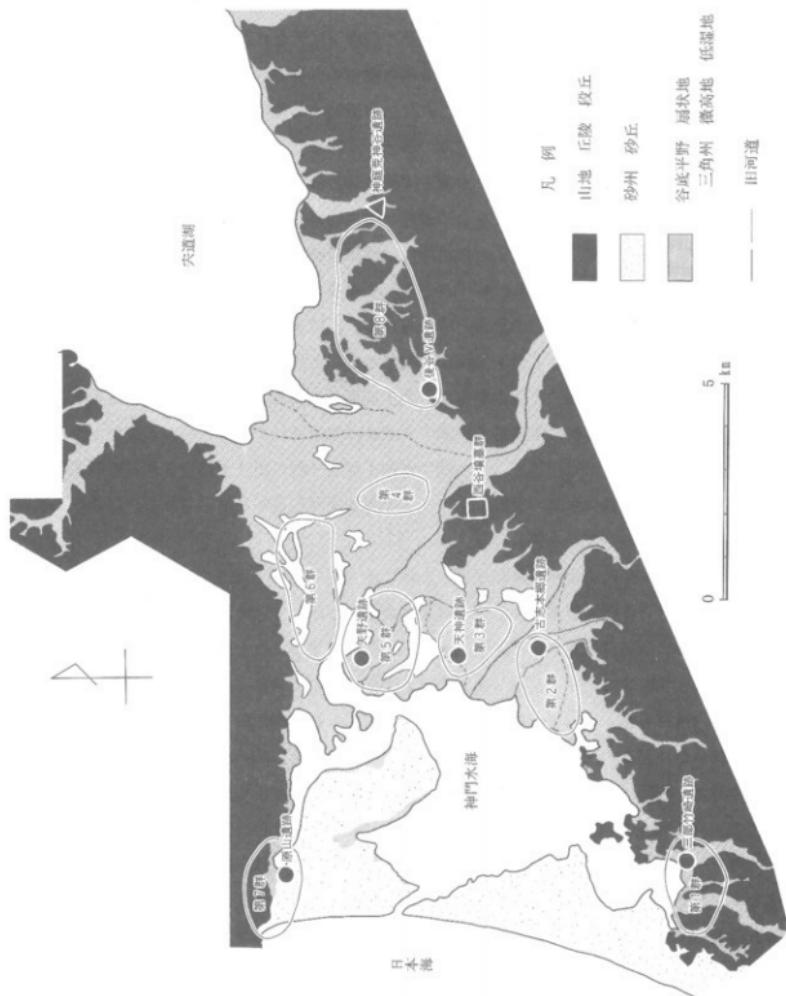
砂丘の背後は広大な湖沼地帯で、その沿岸には稗田遺跡、本谷遺跡、丘陵地に本郷後谷遺跡等の弥生集落址が発見されている。いずれも中・小規模の集落で存続時期が限られる。おそらく古浦遺跡から分岐した単子型の集落と考えられる。このように佐陀川河口付近には古浦集落を拠点に数個の小集落からなる農業集団が存在したものと思われる。<sup>149</sup>

佐陀川上流の左岸に位置する佐太前遺跡も弥生前期から始まる長期継続型の集落址とみられる。近辺にはこの遺跡を核に集落群を構成する遺跡は確認されていないが、一帯がやまとまた沖積地であることから、将来、その開拓主体となる一群の集落が認定される可能性は大である。<sup>150</sup>これらの他、講武平野の東部にも1~2の農業集団の存在が推定される。講武氏元遺跡や草田遺跡等はその一部かと思われる。<sup>151</sup>

以上のように、佐陀川筋から講武平野にかけては弥生中期後半に3~4の農業集団が成立しており、それらは古浦農業集団を中心に関連して広域集団を形成していたことが想定される。そして、志谷奥遺跡の青銅器群は鹿島広域集団（仮称）の祭器とすることを提起しておこう。

その三是大社町域の命主神社遺跡出土の青銅器群についてである。出土位置からすれば、これらが原山遺跡もしくは、大社境内遺跡を核とする第7群の直接的な保有・管理に属することはほぼ疑いのないところであろう。あるいは、青銅器の器種と型式の点からは当然神庭荒神谷遺跡との関連が問題になるところであるが、少なくとも第7群が単独所有し、一農業集団の祭器として独自に扱っていたとするにはいささか躊躇せざるをえない。先述した農業集団形成の一と二のケースから考えても状況証拠的には広域集団—この場合は出雲平野の諸農業集団の合一体ということになるが—の所持を想定するのが多少無理がないようにも思える。むしろ、族生する農業集団の一体化志向—おそらく治水と对外交渉を動機に発生すると思われる—によって広域集団が成立し、それへの結集の証しに青銅器の所持—保有関係が創り出されたと考えるべきではなかろうか。

如上のような想定を裏づける材料として猪目洞窟遺跡で検出された第14号人骨を取り上げよう。右手に6個のゴホウラ製貝輪（「立岩型」系）を嵌めた成人男性骨で、腹部に一個の壺形土



第104図 勝生時代の出雲平野と弥生集落群（農業集団）分布図（林正久1996原図を改変）

器が載せてあった。この種貝輪の右手着装が意味するところについては既に明らかにされているところである。ただし、件の土器(第105図)は、従来は弥生後期の所産として扱われてきたが、その特徴からは中期後葉の型式にきわめて近接したタイプであることが知られた。<sup>(55)</sup> このような埋葬を弥生墓制の地域的な流れにどのように位置づけるべきかという問題を一応棚上げして考えることが許されるならば、当の人物が—その出自集団としては四絡遺跡群中の矢野遺跡か大社町域の原山遺跡あたりと睨むが—地域の諸集団を代表して北部九州との交易を掌っていたことには大方の賛同はえられるであろう。

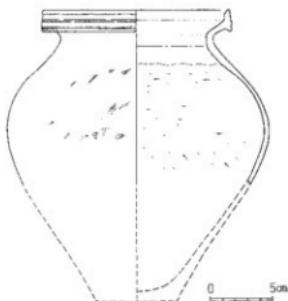
やや、想像をたくましくすれば、神庭荒神谷遺跡の銅矛群、命主神社の銅戈の導入に関わり、中細形

c類銅劍の製作にも関係したかも知れないということになろうか。たとえ、これを想像の産物として一蹴しても、猪日洞窟遺跡第14号人骨もしくはその前後の地域首長世代が神庭荒神谷遺跡の青銅製武器形祭器群の導入と製作に関与したことは、きわめてありうることといえるであろう。命主神社遺跡の青銅器群が直接的には第7群に属し、神庭荒神谷遺跡の大量の青銅器群についてもまた第8群との関連が肯定されるならば、猪日洞窟遺跡埋葬の首長等をその関係に重複介在させることによって、出雲平野の北西隅と南東端を外縁の一角とする広域集団の成立は承認されることになる。

## (2) 首長墓の変遷

広域集団の形成について、中野仮屋銅鐸、志谷奥遺跡の青銅器群、命主神社遺跡の青銅器群、猪日洞窟遺跡出土の弥生人骨等を手掛かりに考察を加えた。結論として件の地域では弥生中期後葉の頃には広域集団が出現していることを知りえた。ついでに、弥生時代の首長墓の変遷を跡づけることによってそのことを確認し、併せて広域集団のその後の展開状況をうかがっておきたい。

古浦遺跡では弥生前期の墓地中に勾玉と管玉を伴った列石墓や円形銅板の飾りつき鉢巻を締めた成人埋葬のあったことが判明している。列石墓が原山遺跡で検出されていることは先に触れた。また、西川津遺跡でゴホウラ製貝輪(「諸岡型」系)をともなった人骨が貝層中から検出されていることも紹介済みである。これら人物は存命中に各々所属する集落において特異な地位に納まっていたと説かれる。原始的平等が社会規範として固く維持されている集団の首長像がそこにあると思われる。



第105図 猪日洞窟遺跡出土壺形土器

中海・宍道湖低地帯に共同墓地から別離した首長墓が現われるのは、いまのところ中期後半期のこととされる。好例として友田遺跡（松江市）の墳丘墓群があげられている。<sup>(36)</sup> 丘陵上の墳墓群として知られる神原正面北遺跡でも中期後半代から造営が開始されているようだ。<sup>(37)</sup> 砂丘上に営まれた波来浜遺跡の墳丘墓には中期後半代に遡る例がある。これらの墳墓が集落から、そして共同墓地から離れて、やや小高い個所に位置取りすることに何よりの注目点があろう。それらの出現期が総じて中期後半代にあることも見逃せない。各地の平野、盆地において農業集団が族生することに相応した動向というべきである。

一方、個々の集落内には天神遺跡でみられたように、多数の土壙墓が存在し、いくつかの上墳墓では管玉が伴っていた。一般的にいえば、農業集団内に身分ないしは階層分化の進行が読み取れるということか。いずれにせよ、稻作農耕の進展に伴う人口増加と分業生産の発展が背景をなしていることは疑いない。

もっとも、これらの隔離された首長墓が新生成った広域集団に属するのか、あるいは比較的優勢な農業集団単独の首長層の墳墓であるのか判断はできない。先に示したように、猪目洞窟遺跡発見の彼の広域首長の埋葬は、上記の諸例とは大いに趣を異にしている。広域集団の形成と広がりが、地域の農業生産、交易、祭祀のありかたの違いを反映して複雑な過程を辿ったことを示すものであろう。

弥生後期後半期入ると中海・宍道湖低地帯とその周辺で巨大な首長墓が登場する。それらが「四隅突出型」と称される特徴的な墳墓形態をとることは周知のことにつき属する。西谷丘陵遺跡の第3号墓、第4号墓、第9号墓がその典型を示している。第3号墓の調査によって明らかになったように、墳丘規模の大きさ、貼石・列石等の設え、木椁木棺構造の採用、膨大な祭儀用土器の出土が「王」と呼称するに相応しい広域首長—「山陰連合体」の盟主の地位にあったとも想定されているが<sup>(38)</sup> 一の登場を物語るとされる。

以下のところ、山陰地方における四隅突出型墳丘墓の出現は後期前葉になるようである。尾高浅山遺跡（米子市）での確認である。隣接する高地性環濠集落は当墳墓の被葬者との繋がりが考えられる。中海・宍道湖低地帯の東西、すなわち安来市域と出雲市域では後期後半期に入つて四隅突出型墳丘墓が急増するらしい。これらのいくつかが、また、西谷丘陵遺跡の3墳丘墓が示すように規模を著しく肥大させているのが特徴といえる。小型から大型へといった漸進的变化でないことに注意を払う必要があろう。墳丘規模の大型化に伴つて突出部が拡大されることも当然の成り行きといえるが、その形状も短小なものからの自然成長の結果と捉えるべきではなかろう。

ただ、ここで多くを語る必要はないであろう。というのは、近時、四隅突出型墳丘墓の調査研究は飛躍的に前進しており、関心も高く、文献も豊富になりつつある。贅言を弄ぶことを差し控えるに如くはなしである。ただ、一つの見通しを述べることが許されるならば次のように

提言したい。広域集団が政治組織としての色彩を強めることと墳丘墓の巨大化と無関係ではないからうと。かつて経験したことの棒を大きく越えた多大な労力と財力の結集を現実のものとするには地域首長の公権力の強化と質的止揚が不可欠である。そこに青銅器祭祀との決別の一契機があると考える。この動きを促進したのが、いわれるところの「倭國乱」ではないだろうか。そうした意味合いから、出雲平野の八つの農業集団を一望の下に収めることができる西谷丘陵に最大級の四隅突出型墳丘墓群が築造されたことが偶然でないことを再確認するのである。安来平野についても同様にいえると思うが、こちらでは弥生集落の動向が見てこない。今後の調査に待ちたい。

#### おわりに

広域集団が政治的地位集団に転化する契機と過程を青銅器祭祀の終焉、墳丘墓の急速な巨大化に見出そうとした。かなり概念的な考察を交えてのことでの説得力に乏しいことを自覚せざるをえない。今後資料の増加をまって実証性をより高める必要がある。同時に、広域集団ないし政治的地域集団とした作業概念を歴史的範疇に置き換える試みを重ねなければならないと思う。この課題に関連して注目されるのは、都出比呂志が古代国家の形成過程を、弥生時代＝首長制—古墳時代＝初期国家—「律令国家」時代＝成熟国家の三段階として捉える明快な見解を提示<sup>(63)</sup>したことである。これに従えば、広域集団・政治的地域集団は首長制段階の一過程に位置づけられることになる。

他方、地域集団・政治的地域集団がよって立つ地理的、経済的な諸条件によってその性格に地域的個性が付与されることは容易に肯綮できる。それは単なる色合いの違いではなく集団の質の相違として現われると考える。では出雲平野を典型とする中海・宍道湖低地帯とその周辺に展開した広域集団、もしくはその朋友体は、西日本の日本海沿岸という地理的位置と稲作経済の地域的発展状況に条件づけられてどのような個性を獲得したのであろうか。

この問題に関わって、筆者は東南アジアの「駁商国家」形成とその性格に求めるべきところのモデル的素材があるとした。熱帶雨林帯に点在する集落群が河川の水運を媒介にして結合する。その中で河口に位置する集落が水運の経済効果を独占的に手中にすることを通じて成立する政治的組織は「ヌカラ」と呼称される。新田栄治は、東南アジアに分布する特徴的な青銅器の銅鼓とメコン水運の関連を説き、件の銅鼓が水運支配者の威信材として機能したことを明らかにしている。<sup>(64)</sup>また、宮崎市定は、神庭荒神谷遺跡出土の青銅器群に直接論及し、これを「商品」として認識すべきことを示し、「出雲政權」が日本海の交易を梃子に台頭し、またその故に没落したことを東アジアの動静と絡ませて大胆に論じている。弥生青銅器が「商品」であったことには同調しかねるにしても、その全体構想には、筆者が描いていた中海・宍道湖低地の広域集団像に近いものがあり、意を強くする。

ここで、列島に展開した首長制段階にある政治的地域集団の個性を実証的に解明することは、都出が提示する「初期国家」への道程を具体的に描き出すうえで必要かつ有効であることを確認したい。その意味で、神庭荒神谷遺跡の調査研究が「首長制」と「初期国家」をリンクする課題の達成に貢献するところはすこぶる大であるといえよう。

## 註

- (1) 田中義昭「神門水海をめぐる弥生時代のムラとハカとクニ」『荒神谷の謎に挑む』1987年、角川書店。
- (2)a 山本 清「出雲市大原町土器散在地」『鳥根考古学』第2号 1948年。  
b 池田満雄「四絆小学校付近出土土器」『出雲市の文化財』第1集 1956年。
- (3) 出雲考古学研究会「古代の出雲を考える5 出雲平野の集落遺跡II—矢野遺跡とその周辺—」1986年。
- (4) 徳岡隆夫・大西郁夫他「中海・宍道湖の地史と環境変化」『地質学論集』36 1990年。
- (5)a 池田満雄・足立克己「出雲市矢野遺跡出土の繩文土器」『鳥根考古学会誌』第4集 1987年。  
b 田中義昭「鳥根県矢野遺跡の調査結果」「縄文時代の低湿地遺跡を対象とした古環境変遷の総合的研究」1988年、静岡大学。
- (6) 林 正久「鉄穴流し」『現代地理学』1983年、朝倉書店。
- (7) 林 正久「斐伊川流域における鉄穴流しと出雲平野の形成」「古代山陰文化の展開に関する総合的研究—斐伊川下流域を中心として—」1989年、鳥根大学。
- (8) 林 正久「荒神谷遺跡周辺の地形環境」『古代文化研究』4 1996年。
- (9) 徳岡隆夫・中村唯史他「原の前遺跡と周辺の古環境」『朝鶴川中小河川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 原の前遺跡』1995年、鳥根県教育委員会。
- (10) 田中義昭「山陰地方における弥生時代の海水準について—遺跡立地からの検討—」、この論文は『島根大學地球資源環境学研究報告』第15号に掲載予定。
- (11) 前掲(9)に同じ。
- (12) 林 正久「荒神谷遺跡周辺の地形環境」『古代文化研究』4 1996年。
- (13)a 角田徳幸・野坂後之助「神南地区県営圃場整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告書（御領田遺跡・三部竹崎遺跡）」1994年、湖陵町教育委員会。  
b 西尾克己・野坂後之助「神西湖周辺の集落遺跡」『湖陵町誌研究』4 1995年、湖陵町教育委員会。  
以下、遺跡・遺跡群の時期については、松本岩雄「出雲・隠岐地域」・「石見地域」「弥生土器の様式と編年—山陽・山陰編—」1992年、木耳社によることとする。中期後半代とした場合は松本III～IVの範囲を指し、中期中葉＝松本III、中期末＝松本IV-2、後期初頭＝松本V-1、後期終末＝松本V-4等々に相当させうるとして扱う。
- (14)a 「神南地区担い手育成基盤整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告書（第5区）」1995年、湖陵町教育委員会。  
b 前掲(13)bに同じ。
- (15) 前掲(14)a、(14)bに同じ。
- (16) a 杉原清一「庭反II遺跡—昭和60年度緊急調査報告書」1986年、湖陵町教育委員会。

- b 杉原清一「庭反丘遺跡・他 昭和61年度調査報告書」1987年、湖陵町教育委員会。
- c 前掲⑩bと同じ。
- ⑩ 野坂俊之の教示による。なお、第1群の記述に当っては野坂俊之、西尾克己から種々教示をえた。記して謝意を表する。(敬称は略す。以下同様)。
- ⑪ a 川上 稔「古志地区遺跡分布調査報告書」1988年、出雲市教育委員会。
- b 川上 稔「古志本郷遺跡—古志公民館移転に伴う発掘調査-」『出雲市埋蔵文化財調査報告書』第4集 1994年、出雲市教育委員会。
- c 田中義昭・西尾克己「出雲平野における原始・古代集落の分布について」『山陰地域研究』4 1988年。本論文においては出雲平野の大半の弥生時代遺跡の探し結果(当時約20箇所を確認)により、これらを微高地単位に6群も分かつことを提示した。以下ではその内容をある程度把握しうる遺跡例の紹介において、本論文を引用する。
- なお、古志本郷遺跡は現在島根県教育委員会、出雲市教育委員会が発掘調査を継続しており、1995年末頃までの調査状況については筆者が実見した他、調査担当者の平石 充(県教委)、松山智弘(市教委)等からも教示をえた。記して謝意を表す。
- ⑫ 大塚初重「島根県出雲市知井宮遺跡の調査」『考古学集刊』2-1 1963年。
- ⑬ 出雲市教育委員会「出雲市遺跡地図」1993年による。また、川上 稔等から教示をえた。記して謝意を表する。
- ⑭ 前掲⑩に同じ。これらの諸遺跡について川上 稔から教示をえた。
- ⑮ 川上 稔他「神門地区遺跡詳細分布調査報告書」、出雲市教育委員会。
- 正蓮寺周辺遺跡については筆者実見の他、出雲市教育委員会の調査担当者の米川美江子、三原一将から教示をえた。記して謝意を表する。
- ⑯ a 東森山真「破壊に瀕している低湿地遺跡」『季刊文化財』20 1973年。
- b 川上 稔「神門地区遺跡詳細分布調査報告書」1989年、出雲市教育委員会。本報告書中に川畠遺跡の一部の発掘調査報告が収録されている。
- c 田中義昭・宮本正保「出雲市田畑遺跡出土の弥生土器について」『山陰地域研究』5 1989年。
- ⑰ a 勝部 昭他「出雲市天神遺跡」1972年、出雲市教育委員会。
- b 横山純夫・ト部吉博・松本岩雄「天神遺跡 国立島根医科大学教職員宿舎建設にかかる緊急発掘調査概報」1977年、出雲市教育委員会。
- c 池田満雄「古代の出雲を考える1 天神遺跡の諸問題—78年発掘調査報告—」1979年、出雲考古学研究会。
- d 川上 稔「建設省職員宿舎新築に伴う天神遺跡発掘調査報告書」1982年、出雲市教育委員会。
- e 角田徳幸「建設省新庁舎建設に伴う天神遺跡発掘調査報告書」IV 1986年、出雲市教育委員会。
- f 川上 稔「塩冶地区遺跡分布調査(天神遺跡)」II 1987年、出雲市教育委員会。
- g 前掲⑩cと同じ。
- ⑱ a 川上 稔・西尾克己「神門寺境内廐守」1885年、出雲市教育委員会。
- b 前掲⑩fと同じ。同書の高西遺跡の項による。なお、弥生土器の採集については、⑩cによる。
- ⑲ 赤沢秀則他「古代の出雲を考える3 出雲平野の集落遺跡I」1983年、出雲考古学研究会。本書の「要

### 第3章 中海・宍道湖岸西部域における農耕社会の展開

伊川鉄橋遺跡、「石土手遺跡」、「太歳遺跡」の項による。

⑦ 前掲⑧cに同じ。

⑧a 川上 稔・赤沢秀則「出雲・山持川岸遺跡」『島根県埋蔵文化財調査報告書』VIII 1981年、島根県教育委員会。

b 川上 稔他「山持川岸遺跡」 1996年、山陰市教育委員会。

c 前掲⑧cと同じ。

d 前掲⑧dに同じ。

⑨a 杉原莊介「出雲原山遺跡調査概報」『考古学集刊』1 1948年。

b 村上 勇・川原和人「出雲・原山遺跡の再検討—前期弥生土器を中心にして—」『島根県立博物館調査報告』2 1979年。

c 村上 勇他「出雲・原山遺跡発掘調査概報」1986年、大社町教育委員会。

⑩a 松本岩雄「原始から古代へ」『大社町史』上 1992年、大社町。なお、筆者等は1987年に行った分布調査において弥生土器（後期）片を採集している。⑧cを参照。

⑪a 近藤 正「島根県下の青銅器について」『島根県文化財調査報告』2 1966年。（近藤 正『山陰古代文化の研究』1978年、近藤正遺稿集刊行会に収録）

b 前掲⑩aに同じ。

⑫ 前掲⑩aに同じ。

⑬ 前掲⑧c、⑩aに同じ。

⑭ 片寄義春・黒谷達典他「鹿藏山遺跡」1984年、大社町教育委員会。

⑮ 前掲⑧c、⑩aに同じ。

⑯ 前掲⑩aに同じ。

⑰ 金榮 基・宍道年弘・池田敏雄他 後谷V遺跡『斐川町文化財調査報告15』1996年、斐川町教育委員会。本報告書中には、後谷V遺跡の東側に隣接する小野遺跡で弥生土器が出土したと記されている。この他、第8群の遺跡については宍道年弘の教示と資料提供に負うところが大きい。記して深い謝意を表す。

⑱ 前掲⑩に同じ。宍道年弘の教示もえた。

⑲ 宍道年弘他『島根県斐川町遺跡分布調査報告書』斐川町文化財調査報告10 1992年、斐川町教育委員会。本報告書別冊の『島根県斐川町史跡・埋蔵文化財所在地名一覧表』の遺跡番号1として平野I遺跡（弥生土器、土師器出土とする）が登録されている。

⑳ 常松幹夫「町道杉沢線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査概報（杉沢遺跡）」斐川町文化財調査報告13 1995年、斐川町教育委員会。

㉑ 宍道年弘「西谷遺跡緊急発掘調査報告書」斐川町文化財調査報告8 1988年、斐川町教育委員会。

㉒ 宍道年弘の教示、並びに資料提供により、筆者実見。

㉓a 池田敏雄「矢野貝塚」『山陰市の文化財』1 1956年、山陰市教育委員会。

b 山本 清『島根県山陰市矢野町貝塚調査概報』1957年。43eに再録。

c 東森市良・西尾克己「矢野遺跡」『出雲・上塙治地区を中心とする埋蔵文化財調査報告』1980年、島根県教育委員会等。

d 前掲(3)に同じ。

- e 田中義昭・西尾克己・広江耕史・磯田由紀子他「出雲市矢野遺跡の研究（1）」『山陰地域研究』3 1987年。
- f 前掲⑩c と同じ。
- g 田中義昭「弥生時代撿点集落の再検討」『甘粕健先生退官記念論集 考古学と遺跡の保護』1996年、甘粕健先生退官記念論集刊行会。
- h 田中義昭他「出雲市矢野遺跡の発掘調査」「古代山雲文化の展開に関する総合的研究—斐伊川下流域を中心として—」1989年、島根大学。
- i 田中義昭「出雲市矢野遺跡第1地点の調査」「古代金属生産の地域的特性に関する研究—山陰地方の銅・鉄を中心として—」1992年、島根大学。
- ⑩a 前掲⑩h と同じ。
- ⑩a 前掲(3)と同じ。
- b 田中義昭「出雲市小山遺跡第1地点の調査」「古代金属生産の地域的特性に関する研究—山陰地方の銅・鉄を中心として—」1992年、島根大学。
- 本論では、小山遺跡群について、これらが個々に独立した微高地に位置していることを重視し、第1地点を小山第1遺跡、第2地点を小山第2遺跡、第3地点を小山第3遺跡とした。
- ⑩a 山本 清「出雲市大塚町土器散布地」『島根考古学』2 1948年。
- b 前掲(3)と同じ。
- 本遺跡については、筆者も度数足を選び、土器の散布状態を踏査した。密度は濃くはないが、古墳時代の土器片がかなりみられる。
- ⑩a 前掲⑩c と同じ。
- b 前掲⑩d と同じ。
- ⑩a 前掲⑩d と同じ。
- b 田中義昭「弥生時代撿点集落としての西川津遺跡」『山陰地域研究』12 1996年。
- ⑩a 田中義昭・三宅博上「島根県邑智郡石見町中野仮屋銅鐸出土地の調査」『山陰地域研究』7 1991年。
- b 中田健一他「島根県邑智郡石見町 町内遺跡詳細分布調査報告書 I—石見町の遺跡第二集—」1991年、石見教育委員会。
- ⑩ 古浦遺跡の概要についてはいくつかの小文がある。ここでは代表的なものを例示する。
- a 金関丈夫「島根県八束郡古浦遺跡」『日本考古学年報』16 1963年
- b 山本 清「かしまの歴史」「鹿島を掘る—よみがえる伝説の資料—」1992年、鹿島町立歴史民俗資料館。
- c 山本 清「遺跡と歩んだ70年 古代出雲の考古学」1995年、ハーベスト出版。本書所収の「古浦砂丘遺跡」の項による。山本はこの遺跡の調査に参加し、見聞事項を正確に、理解しやすく伝えている。
- ⑩ これら遺跡は鹿島町教育委員会が調査。記載事項については、担当者の赤沢秀則の教示を受けた。記して謝意を表する。筆者も実見。
- ⑩ 赤沢秀則「佐前遺跡」1987年、鹿島町教育委員会。
- ⑩a 赤沢秀則「北隣武氏元遺跡」隣武地区県営圃場整備事業発掘調査報告書2 1989年、鹿島町教育委員会。

- b 赤沢秀則『南講武草田遺跡』講武地区県営圃場整備事業発掘調査報告書5 1992年、鹿島町教育委員会。

なお、佐陀川筋から講武盆地にかけて弥生広域集団の存在が認められるか、どうかの問題の検討については赤沢秀則から種々教示をえた。同時に會下和宏からも貴重な指摘を受けた。記して謝意を表し、負うところを明らかにする。

- 50a 山本 清「猪日洞窟遺物包含層について」『鳥根県文化財調査報告』8 1973年、鳥根県教育委員会。  
b 前掲脚a同じ。

- 50 筆者調査による。件の上器は口縁部に松本V-1に近い特徴を有するが、凹線はきわめて薄く(ナデケシか)、口縁直立部の幅も狭い。内・外面とも全面ナデ調整が認められる。よって、これは松本IV-2段階の土器とも見なしうるが、現状ではV-1段階に属せしめるのがベターという。このことについては松本岩雄からも教示を受けた。記して謝意を表する。なお、ゴホウラ製貝輪については木下尚子「弥生時代における南海産貝輪の系譜」『国分直一博士古稀記念論文集 日本民族文化とその周辺 考古篇』1980年、新日本教育図書によった。ここで「系」を付したのは、当該貝輪が製品として搬入されたものではなく、当地で一定の加工を終たうえで使用されたという木下の指摘から、その来歴のあり方を考慮して使用した。

- 50 関崎雄二郎他「友田遺跡松江園都市計画事業乃木上地区向整理事業区内域埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書」1983年、松江市教育委員会。

- 50 萩岡法暉「加茂町の古代」『加茂町誌』1984年、加茂町。

当遺跡出土土器を実見。その中に中期後半代のものの存在を確認した。

- 50 門脇俊彦「波来浜遺跡発掘調査報告」1973年、江津市教育委員会。

- 50a 渡辺貞幸「出雲連合」の成立と再編』『古代王権と交流7 出雲世界と古代山陰』1995年、名著出版。  
b 渡辺貞幸「弥生・古墳時代の出雲—『風土記』と考古学の接点—」『風土記の考古学③ 山雲風土記の卷』1995年、同成社。

- 50 筆者実見。

- 50 都出比呂志「国家形成の諸段階 首長制・初期国家・成熟国家」『歴史評論』551 1996年。

- 50 新田栄治「ラオス・チャンパサック、サン島出土ヘーガーI式銅鼓とメコン水運」『鹿児島大学史学科報告』42 1995年。

- 50 宮崎市定「出雲政權の興亡」『日本の古代』第7巻月報 1986年、中央公論社。(『ちくま学芸文庫 古代大和朝廷』1995年、筑摩書房に収録)

# **IZUMO KANBA-KOJINDANI SITE**

## **EXCAVATION REPORT**

**English Table of Contents and Summary**

**Shimane Prefectural Board of Education**  
**1996**



## Table of contents

### Section 1. Environs

#### Chapter 1. Location and environs

1. Natural environs and their change through time (TOKUOKA, Takao, NAKAMURA, Tadashi, YOSHIKAWA, Naonobu) (1)
2. Geographical environs of the Izumo plain (HAYASHI, Masahisa) (7)
3. Historical environs of the site (NISHIO, Katsumi) (17)

#### Chapter 2. History of research into bronze artefacts from the San'in region

(HIGASHIMORI, Ichiro) (23)

1. Discoveries
2. History of discoveries in the San'in region
3. A history of bronze artefact research in Japan
4. A study of the bronze artefacts from the site

### Section 2. Investigations

#### Chapter 1. Events prior to and in the process of the excavation

1. Process towards the excavation (ISHII, Haruka) (37)
2. Excavation
  1. Test-pitting (ADACHI, Katsumi) (40)
  2. 1984 season (ISHII, Haruka) (40)
  3. 1985 season (MIYAZAWA, Akihisa) (43)
  4. 1986 season (MIYAZAWA, Akihisa) (46)
  5. 1987 season and thereafter (SHINJI, Toshihiro) (46)

#### Chapter 2. Detail of the excavation

1. 1984 season (ADACHI, Katsumi) (48)
2. 1985 season (MIYAZAWA, Akihisa) (51)
3. 1986 season (MIYAZAWA, Akihisa) (53)
4. 1987 season and thereafter (SHINJI, Toshihiro) (55)

#### Chapter 3. Surface survey

(MIYAZAWA, Akihisa) (59)

#### Chapter 4. Features

1. Pits containing bronze artefacts and related features
  1. Pit containing bronze daggers (MIYAKE, Hiroshi, ADACHI, Katsumi) (65)
  2. Pit containing bronze halberds and bronze bells (YAGIURA, Shun'ichi) (70)
2. Features in adjacent areas (ADACHI, Katsumi, SHINJI, Toshihiro) (74)

#### Chapter 5. Artefacts

1. Bronze daggers
  1. Description (ADACHI, Katsumi, YOSHIIDA, Hiroshi) (76)
  2. Classification
    - A. Archaeological classification (YOSHIDA, Hiroshi, IWANAGA, Shozo) (85)
    - B. Multivariate analysis (TSUTSUMI, Kenji) (97)
    - C. Comparing the two (IWANAGA, Shozo) (106)
  3. Spatial arrangement (ADACHI, Katsumi) (110)

4. X sign inscribed on daggers	(MIYAKE, Hiroshi) (120)
2. Bronze bells	(YAGIURA, Shun'ichi) (129)
3. Bronze halberds	(YAGIURA, Shun'ichi) (141)
4. Other artifacts	(ADACHI, Katsumi, SHINJI, Toshiro) (148)
<b>Chapter 6. Photogrammetric survey</b>	(ITO, Daisaku) (150)
<b>Chapter 7. Retrieval</b>	
(SAWADA, Masaaki, KOEZUKA, Takayasu, MURAKAMI, Ryu) (151)	
<b>Section 3. Natural scientific investigations</b>	
<b>Chapter 1. Metals</b>	
1. Chemical compositions	(HIRAO, Yoshimitsu, UCHIDA, Tetsuo, KUBOTA, Yuko, NINOMIYA, Shuji) (153)
2. Non-destructive analysis and lead isotope analysis	(MABUCHI, Hisao, EMOTO, Yoshimichi, KADOKURA, Takeo, HIRAO, Yoshimitsu, AOKI, Shigeo, MIWA, Karoku) (171)
<b>Chapter 2. Rust on the bronze daggers</b>	
(HIRAO, Yoshimitsu, WATANABE, Sakiko, YONEYAMA, Megumi, NINOMIYA, Shuji, KIM, Gyu Ho) (187)	
<b>Chapter 3. Soil from the dagger pit</b>	(KUCHITSU, Nobuaki) (207)
<b>Chapter 4. Date and nature of burnt clay from the site</b>	(ITO, Haruaki, TOKIEDA, Katsuyasu) (213)
<b>Chapter 5. Radio-carbon dating</b>	(TAKAYASU, Katsumi, ADACHI, Katsumi) (226)
<b>Section 4. Analyses</b>	
<b>Chapter 1. Date and characteristics of the bronze daggers</b>	(ADACHI, Katsumi) (229)
<b>Chapter 2. Classification and tradition of the bronze bells</b>	(YAGIURA, Shun'ichi) (236)
<b>Chapter 3. Classification and date of the bronze halberds</b>	(YAGIURA, Shun'ichi) (241)
<b>Chapter 4. Characteristics of the depositional practice</b>	(URABE, Yoshihiro) (247)
<b>Chapter 5. Character of the site</b>	(ADACHI, Katsumi, MATSUMOTO, Iwao) (258)
<b>Special studies</b>	
<b>Chapter 1. A bronze bell allegedly from Wakimachi, Tokushima Prefecture</b>	(INOUE, Yoichi) (267)
<b>Chapter 2. Detailed studies of the bronze dagger-shaped ritual paraphernalia from the site of Kanba Kojindani</b>	(IWANAGA, Shozo) (275)
<b>Chapter 3. Establishment and growth of agrarian communities in the coastline of Nakaumi and Shinjiko lakes</b>	(TANAKA, Yoshiaki) (307)
<b>English summary</b>	(MIZOGUCHI, Koji) (339)
<b>Appendices</b>	
<b>Chapter 1. Reconstructing the Kojindani bronze daggers</b>	
1. Casting	(MATSUMOTO, Iwao) (349)
2. Polishing	(YOSHIDA, Hiroshi) (360)
<b>Chapter 2. List of excavated hoards</b>	(379)
<b>Chapter 3. List of discovered bronze bells and bronze weapon-shaped ritual paraphernalia</b>	(430)
<b>Chapter 4. List of related literature</b>	(498)

# Izumo Kanba Kojindani Site

## Summary

This report summarises the results of excavations conducted at the site of Izumo Kanba Kojindani hoards (hereafter abbreviated as Kojindani) and the outcomes of additional researches into the site and the artefacts excavated.

The site is located at a small valley called Saidani, Kanba, Hikawa Town, Shimane Prefecture.

### 1. Discovery of the bronze daggers

A number of bronze daggers, later turned out to be 358 in number, were discovered in one of the test pits dug prior to the construction of a farm road in July, 1984. The location was halfway up a hill 28 meters in height, facing north. Two artificially created terraces were recognised on the hillside, and the daggers were deposited on the lower terrace. The upper terrace was 6.9 meters in length and 1.2 meters in width, and three post-holes in 1.5 meters interval were discovered.

A rectangular pit, 2.6 meters by 1.5 meters in size and containing the daggers, was situated on the bottom of a cone-shaped pit 4.6 meters in length and 2.8 meters in width on the lower terrace. On the bottom of the rectangular pit was a layer of pale greyish clay on which the daggers were horizontally placed with their cutting edges up. The daggers were arranged in four rows and were coated by a layer of fine clay before buried. Each row from East to West is called the row A, B, C and D.

Row A consisted of 34 daggers placed with their points to the opposite directions alternately.

Row B consisted of 111 daggers. Except the four southern most daggers in the row with their points to the west, the daggers were placed with their points to the opposite directions alternately.

Row C consisted of 120 daggers placed with their points to the east.

Row D consisted of 93 daggers placed with their points to the east.

Given that four post-holes were discovered around the pit, it is safely inferred that a simple roof-like structure covering the pit existed.

### 2. Discovery of the bronze halberds and bronze bells

In 1985, 16 bronze halberds and 6 bronze bells deposited in a pit 2.1 meters East-West and 1.5 meters North-South in size were discovered. The location was only 7 meters towards the bottom of the valley from the pit containing the daggers.

On top of the pit was a slight bump 2.4 meters by 2.0 meters in size recognisable prior

to the excavation. The pit was created by cutting into the hillside and creating a terrace by using spoil from the cutting. Five post-holes discovered around the pit suggested the existence of a roof-like structure covering the pit.

The bronze bells were placed at the centre of the pit. They were placed with their fins vertically put and arranged into two clusters consisting of three bells each with their crowns coming together and to the opposite directions alternately. The halberds were placed in the eastern side of the pit with their cutting edges probably up when deposited and their points to the opposite directions alternately. Careful examinations of the depositional process of the pit suggested that the bronze bells and the halberds had been deposited in one episode. This was the first ever example in which bronze bells and bronze halberds were discovered from a same context.

### 3. The daggers

The daggers are specimens of the Nakaboso (smaller medium-sized) c type bronze dagger in Iwanaga's classificatory scheme. The type is also called the Izumo type due to the fact that the core of the distribution of its specimens is the Izumo region in the San'in district. Average specimens are about 50 centimetres in length and 500 grams in weight.

The shortest among 358 daggers from the site is No. C93 dagger with 48.1 centimetres in total length and 46.0 centimetres in blade length. The longest is No. C 109 with 53.9 centimetres in total length and 51.7 centimetres in blade length. Other measurements such as the blade width and the diameter of the mid rib also show a large variance. However, the nature of the variance in 358 daggers is gradual internally and, therefore, it is impossible to classify them into morphologically distinct types.

Among 358 daggers from the site only one dagger was not applied any treatment of polishing the blade. This itself is interesting but it also suggests that given that the size of this dagger is not so different from others other daggers were not applied any heavy treatment of polishing which drastically changed the shape of them. Provided this inference the identification of daggers cast in same moulds was attempted.

By carefully examining such traits as the diameter of the mid rib and the width of the blade, 43 groups of daggers have been identified to be cast in same moulds. 26 pairs of two daggers, 10 groups of three daggers, 4 groups of four daggers, and 3 groups of five daggers have been identified to be cast in same moulds. This means that the total number of the moulds used for casting 358 daggers was 226, and the efficiency of the production inferred from it was rather low.

X-shaped sign was recognised on 344 among 358 daggers. The sign was carved with a chisel-like equipment after the casting. Given that only three specimens have been confirmed to have no sign (Nos. B8, C26 and C79) and only three specimens have been confirmed to have the sign on both sides of the blade it appears to have been the rule that the sign was inscribed on one side of the blade.

A number of daggers bear traces of partial additional casting. Red pigments (mercury) have been recognised on eight daggers. The amount recognised is very small except dagger No.B25 on which the pigments are recognised widely on the surface. It is inferred that most of the daggers glittered gold but a small number of them were painted red.

#### 4. The halberds

16 halberds excavated range from 69.4 centimetres (No.1) to 84.1 centimetres (No.11) in length and from 980 grams (No.1) to 2,160 grams (No.4) in weight. They can be classified into the Nakaboso (smaller medium-sized) a type (Nos.1 and 2), the Nakabiro (larger medium-sized) a type (Nos.3 and 14), and the Nakabiro (larger medium-sized) b type (Nos. 4-13, 15 and 16) of Iwanaga's classificatory scheme.

16 halberds include some examples which have traces of partial additional casting. Halberds No.10 shows particularly interesting traces of it from a technological point of view in that a breakage in the socket had been carefully mended with recasting.

Recognised on the socket of halberds No.5 is the trace of the round-shaped head of a pin which would have been placed in order to hold the inner mould in the process of casting.

Seven among sixteen halberds (Nos.4,7,8,9,10,13 and 15) were applied a unique technique of polish in which the direction of polishing was changed alternately in order to enhance the reflection of light.

Red pigments are recognised on halberds Nos.4 and 6. That recognised on halberds No. 6 have been identified mercury. It has been recognised that halberds Nos.9 and 10 may well have been cast in the same mould.

#### 5. The bronze bells

6 bronze bells excavated range from 21.7 centimetres (No.5) to 23.8 centimetres (No.4) in height and from 605.3 grams (No.3) to 1116.5 grams (No.5) in weight. Bronze bells of the Yayoi period of Japan are classified into Types I, II, III and IV according to Sahara's classificatory scheme, and the Kojindani bells include specimens of type I (No.5) and that of type II (Nos.2, 3 and 6). Bronze bells Nos.9 and 10 cannot be classified into any type of Sahara's scheme.

Bronze bell No.5 is a specimen of Type I, i.e., the oldest type of Yayoi bronze bells in that it has no fin which bronze bells of later stages normally have. Heavy wear recognised on the strike inside of the lower body of the bell indicates that it had been in constant use as a genuine bell over a certain period of time.

Bronze bell No.1 is unique in that the shape of the crown and the pattern of decorations applied on the body are different from any other Yayoi bronze bells. The bell cannot be classified into any categories of Sahara's classificatory scheme which is based upon morphological traits of the crown.

Bronze bell No.3 is recognised to have been cast in the same mould as a bell allegedly

from Wakimachi, Tokushima Prefecture from their identical size, pattern of decoration and trace of crack in the mould.

## 6. Locations of production

**Bronze daggers:** There is no concrete clue with which to consider the location(s) of the production of 358 bronze daggers from Kojindani in that no mould for the casting of Nakaboso (smaller medium-sized) c type bronze daggers has yet been discovered. Moulds for the casting of Smaller medium-sized a type daggers, which is thought to have preceded the Smaller medium-sized dagger c type on morpho-chronological grounds, have been excavated from Ane site, Saga Prefecture, and Tano site, Hyogo Prefecture. Although no mould for the casting of Smaller medium-sized dagger b type daggers has yet been discovered neither, the locations of their production are inferred to have been in both the Kyushu and Kinki districts from their distribution. Provided the above, the locations of the production of Smaller medium-sized dagger c type (=Izumo type) daggers can be inferred to have been cast in 1) either the northern Kyushu or Kinai region, 2) the Inland sea coast region, or in 3) the Izumo region. Taking the number of specimens discovered so far and other types of information such as their chemical composition Kojindani daggers are fairly likely to have been produced somewhere in the Izumo region.

**Bronze halberds:** Moulds of the smaller medium-sized halberd a type have been excavated from Otani site, Fukuoka Prefecture, and moulds for the larger medium-sized halberds a type have been excavated from Yasunagata Site, Saga Prefecture. The technique of polishing the halberd in different directions alternately in order to enhance the reflection of light is unique in the northern Kyushu district and 18 examples applied this technique have so far been discovered in the district. Given that the core of the distribution of Yayoi bronze halberds itself is in the northern Kyushu region, it can safely be assumed that Kojindani halberds were produced somewhere in the northern Kyushu district and were brought into Izumo.

**Bronze bells:** Kojindani bells Nos.2, 3 and 6 are typical specimens of the Type II bronze bell of Sahara's classificatory scheme. Kojindani bell No.4 is also in the tradition of Type II bronze bell in the pattern of its decoration of the body. From the fact that most of the specimens of this type and moulds of them have been from the Kinki district it can safely be assumed that these bells were produced somewhere in the Kinki district and were brought into Izumo. Kojindani bell No.1 is deviated from any other specimens of the Types I and II bronze bell in the pattern of its decoration and morphological traits. That its chemical composition is close to that of Kojindani daggers suggests that it was also made somewhere in either the Izumo or adjacent regions.

## 7. Dates of the production

There is no direct evidence with which to infer the date of the production of the Kojindani

daggers and the smaller medium-sized dagger c type. Specimens of the smaller medium-sized dagger b type, preceding the c type, have been from jar burials in Yoshinogari and Yubihonmura sites of Saga Prefecture dating to the Yayoi II period. Both the Hiragata (flat-bladed) dagger I type and the Nakabiro (larger medium-sized) dagger type, following the type c and the Kojindani daggers, are inferred to have been in use in the early stage of the Yayoi IV period. Taking these clues into account the date of the production of the Kojindani daggers can be inferred to have been between the Yayoi III and the early stage of the Yayoi IV period.

By referring to associations of similar specimens with datable pots and burials the Kojindani halberds can be dated to the Yayoi II period for Smaller medium-sized halberd type specimens, the Yayoi III-IV period for Larger medium-sized halberd a type specimens, and the late stage of the Yayoi IV period for Larger medium-sized halberd b type specimens.

Bronze bell No.5 can be dated to the Yayoi I period and Nos.2,3 and 6 to the Yayoi II period as far as Sahara's morpho-chronological scheme goes.

#### **8. Date of the deposition**

No evidence with which to directly infer the date(s) of the deposition(s) of the Kojindani hoards exist. Of the daggers, it can be inferred that they were deposited in a fairly short period of time after their production since there is neither wear nor the trace of lengthy usage recognisable on the daggers. That the daggers include a number of specimens cast in the same moulds also suggests that the deposition of them in the single context did not result from re-assembling after their distribution. Those together suggest that the deposition of the Kojindani daggers took place during the Yayoi IV period as a single episode.

The deposition of the Kojindani halberds and bells took place in the date of the production of the Larger medium-sized halberd b type, i.e., the Yayoi IV period or thereafter.

#### **9. Nature of the hoarding practice**

No definite interpretation can be put forward for the cause(s) and intentions behind depositing such a vast number of bronze ritual paraphernalia at Kojindani. Interpretations such as hiding or temporary storing ritual paraphernalia, ritually depositing them on boundaries between polities/communities, and offering them to gods have been put forward for the hoarding of Yayoi bronze ritual paraphernalia and no conclusion has yet been reached.

The places of hoarding can be classified into 1) a hillside in a distance from the settlement area with no distant view, 2) a hill or mountain top in a distance from the settlement area with spectacular view, and 3) a flat terrain adjacent to the settlement.

The method of deposition appears to have been fairly patternised: bronze bells were

placed with their fins vertically positioned and daggers and halberds were placed with their cutting edges up.

It can be inferred from various types of evidence that the nature of rites in which bronze ritual paraphernalia played certain roles varied and changed through time

In case of the Kojindani hoards, the location is an example of pattern 1) above and not unusual. However, the number and the association of bronze ritual paraphernalia deposited in the hoards are unique indeed and cannot be given any definite interpretation from a common-sensical point of view. In what sort and scale of ritual those paraphernalia were used and what sort of group(s) or individual(s) possessed those paraphernalia are just a few examples of a number of issues which remain to be addressed, and the future study of the site shall be conducted hand in hand with the study of such fields as the settlement systems and the mortuary rite of the region in the Yayoi period from a holistic perspective.

# 付 編



# 第1章 神庭荒神谷青銅器の復元

## 第1節 銅剣の鋳造

### 1. はじめに

神庭荒神谷遺跡から出土した大量の青銅器は、長らく土中にあったことから鏽に覆われ、非常にモロい状態であった。そこで、まず保存修理を行う前に青銅器自体の状態をきちんと把握しておく必要があった。そのためX線撮影、鉛同位体比測定、鏽の分析、化学組成の測定などを行うことになった。通常、国宝・重要文化財などの場合、原則的には現状に手を加えることは許されない。したがって、分析は非破壊で行われるか、本体には直接影響しない鏽などで行うのが常識である。しかし、青銅器は化学組成の配合比の違いによって金属の硬さや割れやすさ、鏽の進行、割れ目の頻度や長さに変化が生ずる。神庭荒神谷青銅器を今後修理し永く保存していくためには、現状で可能な限りのデータを測定しておくことが重要と判断され、特別に銅剣50本、銅矛16本、銅鐸6個の本体から試料を直接採取することになった。

銅剣の試料採取位置は、茎の端部から約10cmの脊部で、直径約3mmのドリルで深さ約3mmの穴をあけ、約50mgの試料が採取された。試料の化学組成はICP発光分光分析法で測定され、その結果は第1表のとおりである（本書第3部第1章第1節）。

第1表 銅剣・銅鐸・銅矛の主成分元素の平均値

	分析数	銅(%)	スズ(%)	鉛(%)
銅剣	50	82.2±5.2	6.1±3.8	8.6±3.5
銅鐸	6	79.9±2.8	12.6±3.5	4.3±2.1
銅矛	16	73.0±4.1	14.2±3.8	6.6±2.5

士値は1標準偏差値（1σ値）

ところで、島根県では神庭荒神谷青銅器の保存修理事業終了後の平成9年に「古代出雲文化展」と銘打った展覧会を企画していた。その展示のメインとなる神庭荒神谷青銅器の弥生時代の様子を復元してみようということになった。そこで、銅とスズの成分比が異なる銅剣と神庭荒神谷青銅器の化学組成に近い銅剣・銅矛・銅鐸の製作を試みることにした。

ここでは、銅剣の復元製作の状況を報告することにする。なお、この度の復元製作にあたっては実験的にいくつかの課題を設定して行ったものではなく、展覧会開催にあたって弥生時代の青銅器の輝きを再現してみようとの目的を主眼において実施した。したがって、実験考古学的には不備な点が多いが復元品製作過程の概要を報告しておくことにする。

## 2. 化学組成の配合比が異なる銅剣

青銅は銅・スズ・鉛などを主成分とする合金である。その配合比が異なれば色調・硬度・強度などに違いが生ずる。神庭荒神谷青銅器は分析の結果、第1表の成分であることが判明した。そこで、主成分の配合比が異なる銅剣8種類（第2表）を製作し、当時の輝きの再現を試みることにした。

第2表 合金の配合

(単位%)

製品番号	1	2	3	4	5	6	7	8
銅 (Cu)	95	90	85	80	75	70	65	60
錫 (Sn)	0	5	10	15	20	25	30	35
鉛 (Pb)	5	5	5	5	5	5	5	5
リン (P)	○	○	○	○	○	○	○	●

○、○、●印はリン青銅添加の少→多を示す

製作は、東京芸術大学戸津圭之介教授に依頼した。製作技法は蠟型石膏鋳造法で、この技法は弥生時代には未確認の技法であるが、配合比率の正確さを期すため東京国立文化財研究所の協力も得て、東京芸術大学で通常実施されている方法を用いた。作業工程は、木型原型及び石膏離型の製作→蠟型原型及び鋳型製作→鋳造→仕上げ加工・研磨である。

製品は第1冊口絵21のとおり左端がスズ0%で右に行くにしたがって順次スズを5%ずつ増加したものである。銅95%、スズ0%、鉛5%の1号標本は赤銅色で、金属の性質は粘りがあり力を加えると折れ曲がる。スズ分が多くなるにしたがい黄赤色・金色へと変化し、スズ30~35%を含む7・8号標本になると銀灰色で極めて硬くなる（ステンレスより硬く、ヤスリでも刃がたたないくらい）。しかし、非常にもりい性質をもつもので割れやすく、戸津圭之介によれば特に8号標本鋳造時には鋳型の中で何度も割れてしまったという。また、7・8号標本はスズの含有量が多いため鋳造性が極度に悪化し、溶湯のなかに酸化物の巻き込みが多く巣が発生しやすいという。なお、1号標本は銅の含有量が多いため気泡巣が発生しやすく、溶湯の流动性も悪かったということである。8種類の銅剣を製作した結果、スズを5~20%含む2~5号標本が作業をするのに適していたという。

神庭荒神谷青銅器は分析の結果、剣は2~4号標本に近い色、矛は3~5号標本に近い色、錫は3・4号標本に近い色ということになる。また、いずれも鋳造作業をしやすい成分比の範囲に含まれていることになる。

## 3. 石型による鋳造（付編写真1）

弥生時代の青銅器は石や砂（土）の鋳型を使用して鋳造されたと考えられている。九州や近畿地方では実際に石型が多数出土しているほか、砂（土）型の外枠らしい土製品もみつかって

いる。しかしながら、大量の青銅器が出土した出雲では鋳型は未発見である。そこで、弥生時代に行われていたと推定される石型と砂（土）型による铸造に挑戦してみることにした。製作は島根県松江市在住の铸物職人、遠所和夫に依頼した。

### （1）石材の入手

唐木田芳文の研究によれば、北部九州の佐賀県・福岡県に分布する弥生時代の遺跡から出土した青銅器鋳型170点のうち140点（約80%）を直接観察したところ、11点の例外をのぞき、すべて岩石学的には同類とみられる細粒の石英—長石斑岩であったという<sup>(1)</sup>。この種の石は、佐賀県西部から長崎県にわたる地域、熊本県の天草下島および長崎県の対馬に分布し、陶石などとして利用されているらしい。

そこで、佐賀・長崎・熊本方面へ鋳型の石材を求めて歩いた。石材の探索にあたっては、佐賀県鳥栖市で安永田遺跡・本行遺跡などの鋳型出土遺跡の調査を多数てかけた藤瀬楨博・向川雅彦、古代の铸造技術に近いかたちで実験的に青銅器を製作されている大隈悟の協力を得た。出土鋳型に酷似した石材は容易に探し出すことはできず、最終的には、耐火度が高く、比較的加工し易いと判断された石材を求めるにした。そして、熊本県天草町の海岸脈から採取された石材（現在、建築用の壁石などに使用されている石英斑岩—通称下川石）と熊本県大矢野町の天草砾石（流紋岩質凝灰岩）入手した。

地元出雲の石材は、来待石（凝灰質砂岩）を用いることにした。来待石は、島根県八束郡宍道町来待を中心東西10km、幅1～2kmの範囲で露出している石である。安山岩が起源と考えられる比較的均質な粗粒凝灰質砂岩で、岩片・斜長石・輝石・沸石・粘土鉱物から構成されており、柔らかく、耐火性に富んでいる。

### （2）鋳型の製作

鋳型にしようとする石材は、大矢野町産、天草町産、宍道町来待産ともに産出地の石材店で65×17×6.5cmに加工してもらい入手した。一つの石材は約10kgで、铸造する際に二つの石を合わせると20kgになる。

入手した石材は、まず加工をしようとする面を内側にしてロの字形に囲み、その内部で薫を燃して熱した。石に加熱すると歪みが生ずる場合があること、加工しやすくなることなどから、あらかじめ熱したわけである。正確な温度は不明であるが、石材の片面（鋳型として彫り窪めようとする面）がやや赤くなる程度である。その結果、来待石は大きな損傷は生じなかったが、天草町の石と大矢野町の石は数箇所の亀裂ができてしまった。そこで、3種類の石すべて鉄製の外枠をつけて保護した後に彫り込むことにした。

彫り込みにあたっては、砥石で表面を研磨して平滑にし、神庭荒神谷C109号をモデルにして切先・突起部・関部等に割付線を入れたのち、銅剣の輪郭を描いた。その後、鉄製のノミで彫り窪め、彫り込み面を砥石で滑らかに仕上げた。来待石は均質で比較的柔らかいため彫りやす

かったが、天草町の石と大矢野町の石は撫理があるうえやや硬かったため彫りにくかったという。

出土品にみる矛（福岡県須玖など）や戈（福岡県多田羅など）の鋲型には、湯口と反対側にガス抜き用の道と思えるものが彫り込まれているが、今回の石製鋲型（大矢野町産・天草町産）では関部に斜め方向の道（長さ8～9cm、幅0.5cm、深さ0.2cm）を彫り込んだ。なお、来待石製鋲型と砂（土）型は特にガス抜きの道といったものは彫り込まなかった。

### （3）鋳造

今回の銅剣鋳造にあたって用いた試料名はセイドーインゴットBC1で、成分は銅(Cu)82.54%、ズズ(Sn)3.83%、鉛(Pb)6.44%、亜鉛(Zn)6.75%である。

鋳造に先だって、炉にかけたルツボでインゴットを熔解し、火を遠巻きに見ながらじっと待つ。燃料はコークスを用い、送風はモーターで行った。鋳造にあたってはまず鋲型をU形に並べて薦火で熱する。湯（熔融した合金）の冷えを防ぎ、湯流れをよくするためという。

次に2つの鋲型をずれないように慎重に合わせ、4本の棒と繩によって緊縛し、湯口(茎側)を上にして据える。火と湯の色を見て最適と判断した時、湯をトリベに採り、素早く薦を投げ入れ、湯の上面をおおう。湯の酸化を防ぐためだという。まさに長年培われた職人の感によるところが大きい。その後、手際よく湯を鋲型に流し込む。わずか10秒ほどである。湯を注ぎ終わると数分も経たないうちに鋲型をはずす。するとまだ高温のため、真っ赤な銅剣が出てくる。

遠所和夫によれば、九州の石（天草町産・大矢野町産）は流し込む湯の受けが悪く、なかなか鋲型に注入できなかつたという。一方、出雲の石（来待石）は湯とよく馴染み、砂（土）型に注入する時と同じような感覚で流し込むことができたという。これは、今回使用した3種類の石のうち、出雲の石（来待石）が最も日が粗くガスが抜け易かったからだと思われる。

### （4）仕上げ・研磨

取り出された銅剣は数時間の自然冷却の後、甲張り落としを行う。その後、荒研ぎを行い、仕上げ磨きへと進む。研磨は鋸放し面のわずかな凹凸を消すだけでもかなりの時間を要し、1本仕上げるのに約26時間であった。最後に茎部分にタガネでX印を打ち込んで完成である（仕上げ・研磨の詳細については、付録第1章第2節参照）。

## 4. 砂（土）型=真上による鋳造

### （1）砂（土）型の製作

砂（土）型は66×18×6cmの外枠（鉄製のハメ型）をつくり、砂と粘土を混合した真土を入れて枠で叩きしめる。その上にあらかじめ製作しておいた銅剣原型（モデルは神庭荒神谷C20号）を押し当てる。型はほぼ一夜自然乾燥したのち、薦火により型焼を行う。この砂（土）型を「焼懸型」という。表面に塗方作業（鋲型と鋳造品の離脱をよくするため、木炭の粉末を

水で溶解したものを塗る)を行い砂(土)型の完成である。鉄製のハメ型を含めた鋳型の重量は、鋳造時のように二つあわせた状態で約32kgある。

真土はもともと宍道湖の砂と松江市古志原町の粘土を混合して使用していたというが、現在では島根県江津市の鈎物砂と市販の鋳物用粘土を混ぜているということである。

#### (2) 鋳造

石型の場合と同様に、まず薪火で熱した後二つの鋳型を合わせる。4本の棒と繩によって緊轉し、湯口(茎部分)を上にして据える。熔湯を注入する際、ガスがうまく抜け、今回製作した中では最も作業がやりやすかったという。

#### (3) 仕上げ・研磨

石型の場合と同様な作業工程である。石型と砂(土)型とどちらが仕上げ・研磨作業をしやすいといった区別は困難であった。

### 5. まとめ

今回の銅剣復元製作にあたって、いくつかの気付いた点と今後の課題等を述べ、まとめにかえたい。

#### (1) 鋳型石材について

この度入手して鋳造を試みた3種類の石材について、加熱・鋳込み・ガス抜きの状況を比較すると下表のとおりであった。

第3表 岩種による特色的違い

岩種	加熱	鋳込み	ガス抜け
石英斑岩(天草町産)	ひび割れ	湯を注入しにくい	抜けが悪い
流紋岩質凝灰岩(大矢野町産)	ひび割れ	湯を注入しにくい	抜けが悪い
凝灰質砂岩(宍道町来待産)	割れなし	湯を注入しやすい	抜けが良い

この結果は、たまたま入手した石材が上記の状況であったということにすぎない。岩石学的にみて同種のものでも採石した位置の違いや風化の度合いにより石材の性質が異なる場合もある。これまで各地の遺跡から出土している鋳型石材と同質の石がどこで産出するものか現状では不明である。今後、鋳型石材の産出地をより厳密に追求していく必要がある。

なお、天草町産と大矢野町産の石材は鋳造するたびにひび割れが進行し、補修しながら鋳造を行った結果、それぞれ40本あまりの銅剣が製作された。これに対して宍道町来待産の石は、ひび割れ等のトラブルはなく一つの鋳型で200本以上も鋳造することができたという。ちなみに、神庭荒神谷銅剣は同範と考えられるものが43組確認されたが、このうち同一の鋳型で鋳造したと考えられるものは最大5本であった。

## (2) 石製鋳型製作について

彫り込む前に石材を加熱したところ、天草町産と大矢野町産の石はひび割れが生じてしまった。そこで鉄製の外枠で保護した後、彫り込み加工を行ったが、弥生時代にはどのように対処したのであろうか。

広形銅矛には鋳型の難ぎ目痕跡の存在するものがあるという。また、明らかに広形銅矛鋳型の片面が複数の石で構成されているものも確認されており、「連結式鋳型」と仮称されている。<sup>(4)</sup>何らかの方法で連結していたものと思われるが、現状ではどのような手立てを講じていたのか不明である。繩で緊縛するとか木枠で保護するとかさまざまな方法が考えられるが、今後鋳型痕跡の観察や実験を行ってみる必要があろう。

## (3) 錫込み時の収縮

青銅製品は鋳造時に収縮する性質がある。鋳金を行う際に原型となる木型を製作するために現在では鋳金用の物差し（鋳物尺）があり、1000分の13になっているという。

今回の銅剣復元にあたって実際にどの程度の変化が生じたのか、銅剣の特徴的な部位を計測

第4表 鋳型と製品の差

(単位cm)

熊本県人矢野町（流紋岩質凝灰岩一大草邱石）						
	鋳型 A	銅剣 A面	差	鋳型 B	銅剣 B面	差
剣身長	51.70	50.90	0.80	51.80	50.80	1.00
突起位置	17.40	17.15	0.25	17.20	17.00	0.20
突起幅	5.85	5.81	0.04	5.88	5.63	0.25
開幅	5.47	5.36	0.11	5.47	5.41	0.06
熊本県天草町（石英斑岩 通称下田石）						
	鋳型 A	銅剣 A面	差	鋳型 B	銅剣 B面	差
剣身長	51.80	50.90	0.90	51.70	50.90	0.80
突起位置	17.20	17.10	0.10	17.30	17.10	0.20
突起幅	6.10	5.89	0.21	5.85	5.82	0.03
開幅	5.72	5.59	0.13	5.62	5.53	0.09
島根県宍道町（凝灰質砂岩 通称米待石）						
	鋳型 A	銅剣 A面	差	鋳型 B	銅剣 B面	差
剣身長	51.70	51.00	0.70	51.70	51.00	0.70
突起位置	17.30	17.10	0.20	17.20	17.00	0.20
突起幅	5.85	5.72	0.13	5.91	5.67	0.24
開幅	5.76	5.65	0.11	5.67	5.59	0.08
砂（土）製鋳型						
	鋳型 A	銅剣 A面	差	鋳型 B	銅剣 B面	差
剣身長	52.00	50.90	1.10	52.00	51.10	0.90
突起位置	19.70	19.10	0.60	19.60	19.20	0.40
突起幅	6.09	5.73	0.36	5.70	5.66	0.04
開幅	5.68	5.65	0.03	5.81	5.70	0.11

した結果は、第4表のとおりである。

測定誤差もあると考えられるが、長さ52cmあまりの銅剣を製作した場合の大まかなちぢみの様子は把握できるものと思われる。

鋳型と製品の剣身長の差は、最小0.70cm、最大1.10cmで平均0.86cmであった。突起位置の差は、最小0.10cm、最大0.60cmで平均0.27cmであった。突起幅の差は、最小0.03cm、最大0.36cmで平均0.16cmであった。関幅の差は、最小0.03cm、最大0.13cmで平均0.09cmであった。これら の数値からこの度製作した銅剣の場合、各部位の縮率は平均98.41%になる。

#### (4) 研磨による変形

鋳型からはずした後、甲張り落とし、荒研ぎ、仕上げ研ぎを行うわけであるが、その過程で銅剣の場合どの程度変形するのだろうか。銅剣の主要部位について、鋳放しの状態と研磨後の状態を計測してみることにした。計測した銅剣は図版184・185・186に示したわずか3本である。内訳は、石型で製作したもの1本、砂(土)型で製作したもの2本である。その結果は、第5表のとおりである。

第5表 銅剣鋳放し状態と研磨後の主要部位の差 (単位cm)

部 位	最 小	最 大	平 均
剣身長の差	0.00	0.30	0.12
突起位置の差	0.05	0.20	0.12
突起幅の差	0.00	0.20	0.10
関幅の差	0.00	0.02	0.01

数少ない事例ではあるが、研磨による変形が最も著しい部位は剣身長で、平均0.12cmの差であった。研磨による変形が最も少ない部位は関幅の差で、わずか平均0.01cmであった。研磨が最も顕著になされると考えらるる剣身長でも0.2~0.3cm程度の変化に留まっていることから、剣身長の差が1cm以上もある場合は異なる鋳型で鋳造された可能性が高いということになろう。一方、関部は鋳放しの状態と研磨後の状態にほとんど変化がみられないことから、銅剣元部の形状は鋳型の形状を極めてよく残しているということになり、同范銅劍確認の最大の目安になりそうである。

神庭荒神谷銅剣358本のうち1本だけ研磨が行われていないものがあった。B62銅劍と呼ばれているもので、製作者の意図はわからないが、研磨という刃物には本来不可欠な作業の省略、つまり武器としての意識の形骸化が進行していたことは疑いないだろう。この銅剣は、長さ・幅・厚さとともに研磨が施されている銅剣とほとんど変わらない。つまり、出土品からみても鋳上がった素材を大きく改変するような研磨は基本的に行っていないとの推測が成り立つ。武器として使用されるたびに何度も研ぎ出すものであれば、製作時と使用された最終段階には大きな差が生ずるものと考えられる。しかし、神庭荒神谷銅剣の場合は先にみたようにほとんど差

がないことから、武器として使用された可能性は少ない。

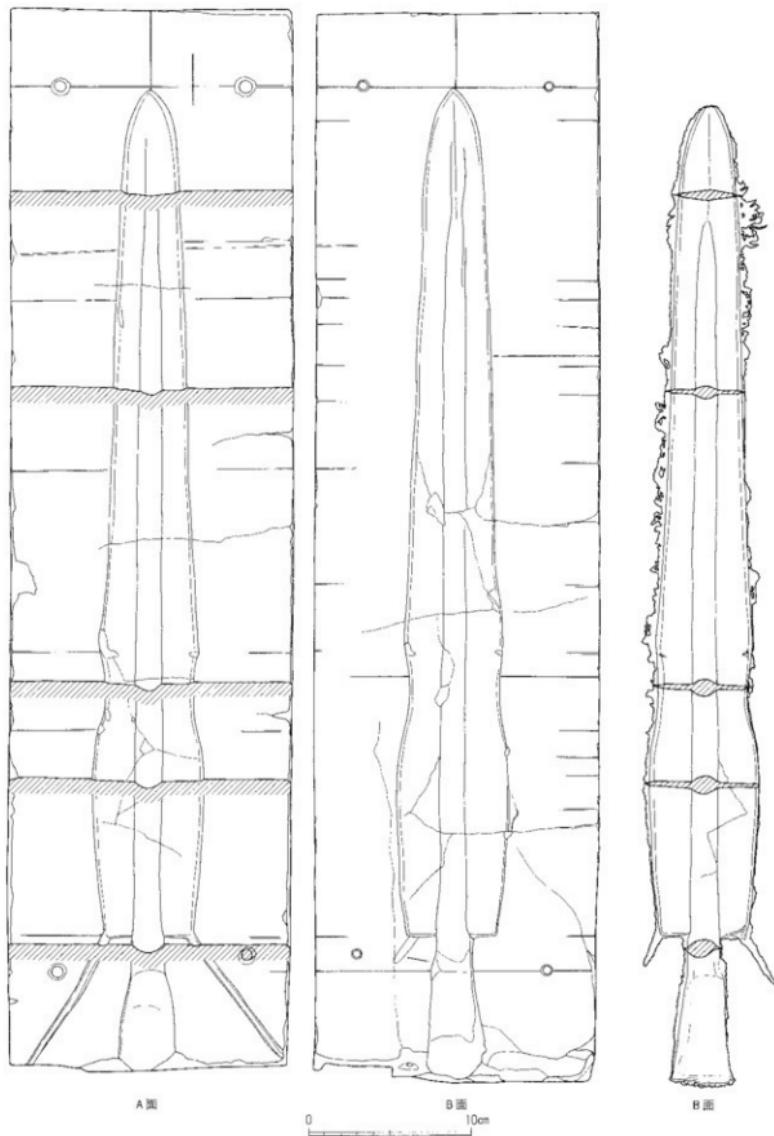
実験的に研磨した銅剣をみても、鋳放し状態のものと研磨後とではほとんど差がないので、武器として使用されなかったと考えられる中細形銅剣 C 類については同范銅剣の存在を確認できる可能性があるということになろう。

そのほか、弥生時代にガス抜きをどのようにしていたのか、石型と砂（土）型では製品の鋒肌がどのように異なるのか、同ヒルツボから鍛込んだ複数の製品で化学組成・鉛同位対比にどれだけの違いがあるなど多くの課題があるが、今後に期したい。今回は展示資料製作を主眼とした事業であったため、現代の道具や技術を用いたところも多かったが、出来るかぎり弥生時代でも行い得るような方法を考えながら製作に取り組む必要がある。

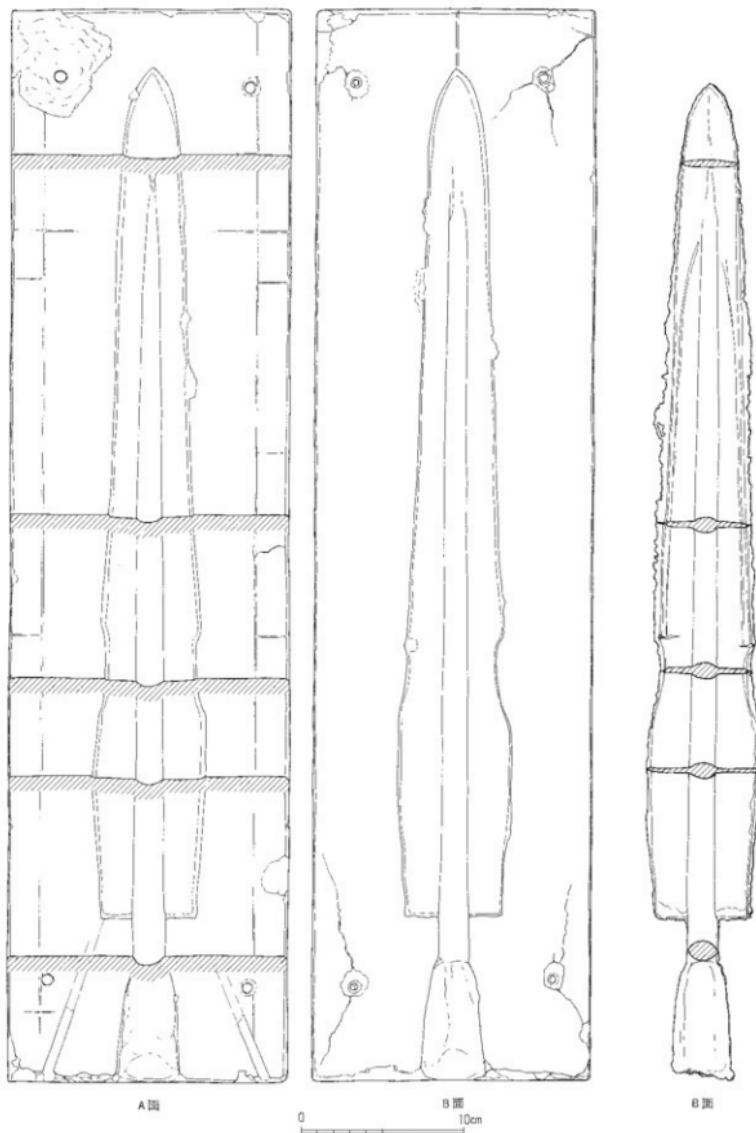
(松本岩雄)

註

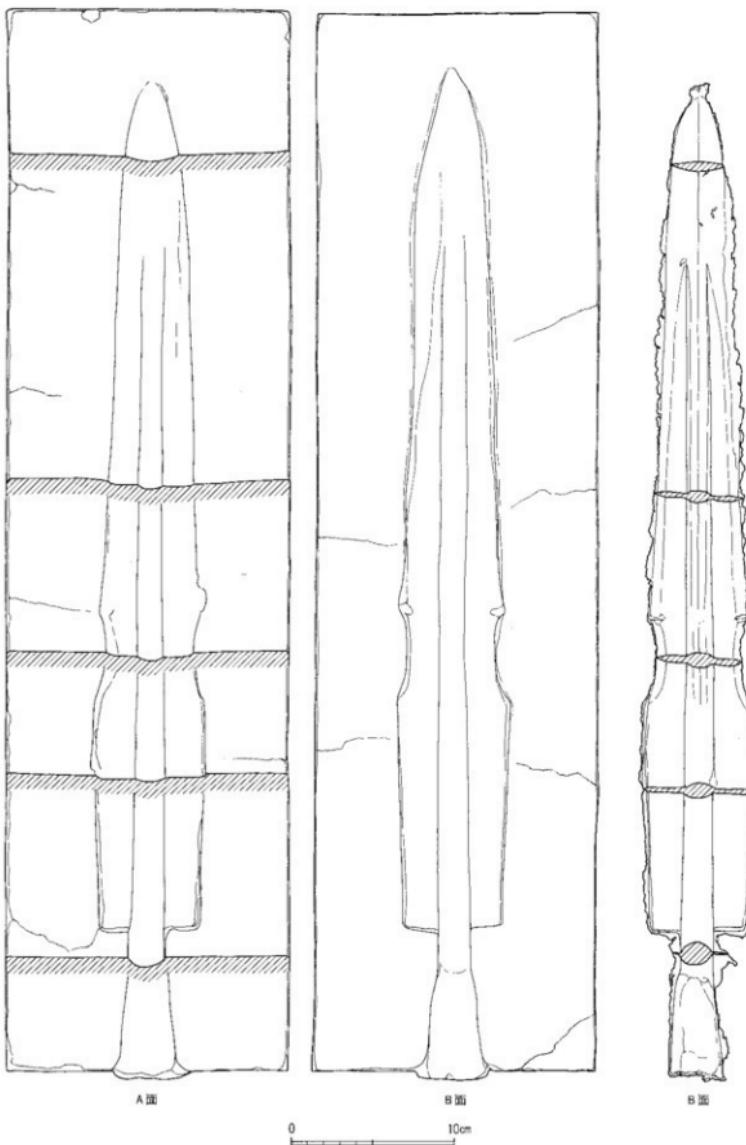
- (1) 唐木田芳文「弥生時代青銅器の鋳型石材考」『巣塔』共立出版 1993年3月
- (2) 岩石名については、高安克巳（島根大学汽水域研究センター教授）のご教示による。  
石材の入手先は下記のとおりである。
  - 石英斑岩（熊本県大草町）……………エルエスアイ株式会社天草工場（天草郡大草町下田南字新田）
  - 流紋岩質凝灰岩（熊本県大矢野町）……小林商事（天草郡大矢野町大字上江樋戸）
- (3) 酒井礼男「来待石」「島根県大百科事典」山陰中央新報社 1982年7月  
来待石（凝灰質砂岩）は遠所石材店（松江市堅町）から入手した。
- (4) 片岡宏二「広形銅矛に残る鋳型の縫ぎ目痕跡に関する研究」『九州考古学』第68号 1993年12月



第1図 流紋岩質凝灰岩（熊本県大矢野町）製の鋳型（左・中央）と鍛上がり状態の銅剣（右）



第2図 凝灰質砂岩（島根県宍道町来特）製の鋳型（左・中央）と鋳上がり状態の銅剣（右）



第3図 砂（土）製鋳型（左・中央）と鋳上がり状態の銅剣（右）

## 第2節 研磨実験

### 1. はじめに

銅剣をいかに作ったか。

この問い合わせが発せられるとき、常に「鋳造」という作業に対して問題が投げかけられてきた。青銅器の鋳造実験は数多く報告されているが、たいていの場合は、鋳型を彫り、鋳型を組み立て、湯を流し込み、型から取り出された甲張りのついた状態の報告までで、その次には既に磨き上げられて金属の光沢を放つ製品になっていることがほとんどである。つまり、「研磨」という工程に対して、復元的実験の試みられたことがほとんどなかったのである。

ところがその一方で、武器形青銅器の型式分類においては研ぎという行為がかなり尊重されている。<sup>(1)</sup>加えて、武器形青銅器の使用法との関連において、研ぎ直しという行為による大幅な改変を積極的に評価しようとする見解もある。<sup>(2)</sup>とりわけ武器形青銅器の使用法は、現在喧伝されている弥生時代観、すなわち「争いの時代」・「倭國乱る」という標語に密接に結びついている。<sup>(3)</sup>武器形青銅器の研ぎというものを正しく評価することは重要な問題なのである。

さて、銅剣の報告では、その分類と同範品の認定を行った。同範品認定においては、鋳造時の特徴と研磨による特徴の歧別が重要な役割を果たした。つまり、同範品認定の過程は、同時に研磨技術・方法の復元でもあったのである。以下では、報告に際して行った鋳造実験で得られた模範品の、実際に出土品の観察に基づいて復元された技術・方法によって行った研磨実験についての報告を行い、派生する問題についても若干の考察を加えてみる。

### 2. 提供された素材（図版184左・付編写真2）

鋳造実験の詳細は前節を参照していただくとして、ここでは研磨実験を行うにあたって提供された素材—以下銅剣素材と呼称—、すなわち鋳型から取り出されたままの鍛放し銅剣の形状・特徴について、まず詳述することから始めたい。なおその際に、特にB62との比較を意識して記述を進める。

銅剣素材は、流紋岩質凝灰岩（熊本県大矢野町）を用いた石製鋳型によって得られたものである。甲張りは比較的少ない方であろうか。鋳上がり時の全長は58.6cmを測る（写真2-1・2）。そのうち茎部と湯口部を除いた剣身長は約51cmで、神庭荒神谷遺跡出土銅剣の変異の幅に収まっている。他の数値も研ぎによる変動を考えると、358本の神庭荒神谷銅剣の数値の変動幅に収まるものである。ただし翼の厚みが、神庭荒神谷銅剣に比してかなり大きくなってしまっている。各数値の詳細は、報告で実測図に添付したのと同じ様式の第6表を参照いただきたい。

さて、翼厚を除いて、数値的に神庭荒神谷銅剣とはほぼ同じであることをまず確認した。次に数値に表れない諸特徴について記述しておく。まず、鋳型製作時に付与されてそれが鋳上がり

に反映されたと思われる特徴について、B62との比較を行う。B62においては、鋳型彫り込み時の割付を意識したと推定される沈線の反映が、身の外周にそって突線状に巡っていた。一方の銅剣素材は、一部にかすかにそれと思われる箇所がなくもないが、明確に外周を巡る突線とは化していない。むしろ、研ぎの際の区画を意識した鎌の割付線が認められ（写真2-4）、突起部は既に明瞭な肥厚部として突出している（写真2-5）。また、B62と最も大きく異なっている部分として、鋒部を指摘することができる（写真2-3）。B62においては、柱状の脊と水平な翼からなる部分から、断面菱形となる鋒部への変換が比較的短い距離で行われている。すなわち、脊の外形線が図示できなくなつて鋒部の稜線が現れるまでに剣身主軸方向に約2cmの距離しか要していないのである。これに対して銅剣素材の方は、脊の外形線がそのまま先ずぼまり状に鋒部にまで及んでしまっており、鋒部は明瞭な断面菱形をとることなく、1条の稜線を明確に通さないままである。

さて、次に鋳上がり時の状況とでも言うべきものについても触れておかねばなるまい。鋳上がり時、素材は青銅の金属色を発している箇所もあったが、大部分は黒く煤けたような状態であった。また、器表面にはしわや微細な凹凸がかなり存在した。そのうち興味深いのは、一見鋳型のひび割れ部分に対応したかと思われるひび様の細線が図示できるのだが、実はこれらはいずれも凹線なのである。脊・翼を問わず両者を縦断して走り、特に刃部下半や元部に顯著に認められる（写真2-6）。同様な凹線はB62にも存在する。その生成のメカニズムについて、現時点では十分説明しきれないが、B62に等しく存在することは重要であろう。また、しばしば実際の出土銅剣によく見られる特徴に、元部の翼の付け根付近の、脊にそうように波状に幾重にもなったしわ状の部分がやはりこの銅剣素材にも見られる（写真2-6）。このような特徴は、基本的に石製鋳型で製作されて鋳放されたままの平形銅剣の同部位や中広形銅矛の極内などによく認められる。鋳造実験において、土製の鋳型を使用したときには認められないことからして、石製鋳型の熱伝導の不均質性によるものと推測される。すなわち、中実で厚さ1cmを越える脊部と、厚さ2mmほどの翼部では湯の冷却にムラがあり、脊部の方が常に高温を残したままとなる。石製鋳型ではその熱の不均質が鋳型に吸収されず、翼部にも余熱が及んで、その熱の伝導に対応して上記のようなしわが脊部を取り巻くように形成されると考えられるのである。<sup>(4)</sup>

鋳上がり時の端部の状況にも触れておこう。実際の製品である銅剣の観察でも、ほとんどに見受けられた型ズレがやはりこの素材においても確認できた。脊のズレは明らかであり、端部の断面形も、報告でまさに模式化したように凹状を呈している。また、甲張りの部分は両面ともが凹状を呈している。

最後に、製品には残らない湯口の状況について記述しておこう。剣身下端から2.5cmほどは脊幅を増さず、茎部を形成したあと、そこからややラッパ状に開き気味に湯口を作り出している。下端で幅約3.2cm、厚さ約2.1cmを測る（写真2-7）。注湯時に上方に位置した下端面には、湯

の中の不純物が一齊に浮き上がってきたかのような状態となっている（写真2-8）。

### 3. 計画の立案

さて、上記のような銅劍素材が提供されたわけである。358本の製品の観察から予想していた素材との間に基本的に相違はない。したがって、やはり製品観察から導き出された研磨が十分適用できる。

まず、製品の観察に基づいて以下のような工程計画を立案した。

#### 工程1（粗整形）

- |            |           |
|------------|-----------|
| (1) 甲張り落とし | 工具：タガネ・叩石 |
| (2) 端面粗調整  | 工具：粗砥     |
| (3) 握部の確保  | 工具：粗砥・中砥  |

湯口部を刃研ぎの際の握部として用いるための調整

#### 工程2（割付）

- |                         |           |
|-------------------------|-----------|
| (1) 横先端位置の決定<br>刻線の打ち込み | 工具：タガネ・叩石 |
| (2) 突起位置の決定<br>刻線の打ち込み  | 工具：タガネ・叩石 |

#### 工程3（研磨）

- |  |             |
|--|-------------|
| (1) 翼部研磨（剣身に平行）<br>鋸放し面の消去<br>※弥生時代の铸造時にはどうか不明ながら、この製作実験に際しては、<br>剣身の厚みを減じる意味が大きい。                                     | 工具：（粗砥）・中砥  |
| (2) 脊部研磨（剣身に平行）<br>曲面調整<br>脊・翼の境界の明瞭化（際取り）   | 工具：（粗砥）・中砥  |
| (3) 横先端部研磨（剣身に平行）<br>第1段階：刻線に従って斜めに研ぎ込む（匙面状の横の形成）<br>第2段階：刃部側立上がりの研ぎ落とし（平板な横の形成）<br>※この工程は前後の脊部研磨・刀部研磨と並行する            | 工具：（粗砥）・中砥  |
| (4) 刀部研磨（剣身に斜交）<br>刀部鎬と脊上鎬の同時研ぎ出し<br>突起以上：横先端部研磨と並行しながら<br>突起部：刻線に従って直線的に<br>剣方部：中央部を深く研ぎ込む、下端Yタイプの研ぎ出し <sup>(5)</sup> | 工具：（粗砥）・中砥  |
| (5) 仕上研磨<br>先の研磨方向に従って、鎬ラインの整美   | 工具：仕上砥・超仕上砥 |

#### 工程4（仕上）

- |                |              |
|----------------|--------------|
| (1) 湯口部切斷      | 工具：タガネ・叩石    |
| (2) 基下端面処理（研磨） | 工具：粗砥・中砥・仕上砥 |
| (3) ×印の刻印      | 工具：タガネ・叩石    |

次に、以上の工程に必要な道具を用意した（写真3-1）。まず、甲張り落としや湯口部切断、更には×印の刻印に使用したタガネであるが、弥生時代において出土例は数少ない<sup>(6)</sup>が、製品の観察からやはり鉄製のタガネが不可欠であり、現在通常使用されている刃幅1.3cm、身部径1.2cmのものを用意した。これを敲打する叩石は手ごろな川原石を採取した。砥石については、自然の石材を採取することはせず、砥石として一般に市販されているものを用いた。粗砥としては鋸造者の遠所氏から提供された、回転式の円盤形グライダーを切断したものを使い、中砥・仕上砥として市販の携帯用両面鎌砥石を用いた。ちなみにその粒度は、JIS規格R6001（研磨剤の粒度）の#120と#600にあたる。これ以外に研磨作業台として、水を張ったコンテナの上にまな板様の板を渡した。

#### 4. 銅剣を研ぐ

では、実際の研磨実験の記述を、上述した工程計画にそって進めていく。

工程1の粗整形は甲張り落としから開始した。甲張り部分にタガネを当て、叩石で敲打していくわけだが（写真3-2）、これが意外と簡単にいかない。鋲型のズレが端部にもあって、片面から甲張りと見える部分の半分は、もう片面の鋲型の内側に当たり、肉も厚いのである。結局タガネでは幅1mm程を落とし得たにすぎなかった（写真3-3）。むしろ、タガネを使用した後の粗砥による端部粗調整（写真3-4）による変形の方が大きかった。この工程は形を整えることはもちろん、以後の研磨作業の安全性を確保する意味が実は大きい。その後の工程で、敢えて湯口部を握部として残そうとして端部調整を行ったことも同じである。ところが、実際まな板の上で作業を進めてみると、銅剣本体の固定はかなり容易で、握部としての湯口部を残しておく必要はなかった。ただし今回は当初の計画通り、端部整形を施した上で、最後の仕上げ段階まで湯口部を確保しておいた。ここまで工程1に要した時間は、甲張り落としに予想以上に手間取ったため、3時間弱を要した。

工程2は割付である。作業自体は簡便なもので、時間は10分とかかっていない。工程1と工程2を合わせて3時間であった。割付は報告でも記述したように、次の研磨工程の目安となるもので、樋先端と突起の位置を明確にすることを意図して行われる。順序はいずれからでもかまわないが、ここでは樋先端、突起の順で行った。樋先端は、銅剣素材の特徴の項で記述したように、鋒部への変換がはっきりせず、打ち込む位置を決めかねるような状況であったが、およそ神庭荒神谷銅剣での平均的な位置に打ち込んだつもりである（写真3-5・6）。突起部については既に鋲型の段階でその位置がおよそ決定されており、位置を決めるに躊躇はなかった。（写真3-7・8）しかし、型ズレのため、タガネの一方すなわち脊よりを何処に持っていくかが難しかった。型ズレの解消に伴って刃部がかなり減してしまう可能性も高い。逆に想定より幅の減が小さい場合もある。実際後者であったようで、研ぎ終わった後の刃部より内側

の翼部に割付刻線が残ってしまった箇所がある（写真6-4・6）。さて、極先端と突起のいずれの割付もあるが、甲張り落としや後の×印の刻印に用いるのと同じタガネを用いた。なるほど製品の×印を見ていると、かなり鋭い細身のもののがあって、実験に用いたようなタガネで適当なようだが、製品に残る割付刻線は、これより太身であることが多い。あるいは、割付用と刻印用の2種類のタガネを使い分けているのかもしれない。

さて、いよいよ研磨の工程である。まずは剣身に平行した研磨である。翼部から行った（写真4-1・2）。と言うのも、鋳造実験で得られた素材は、実際の製品よりも翼部の厚さが極端に大きいことが多い。今回提供された素材も、比較的薄く铸上がった方とは言え、まだ厚い。铸放し面の消去とともに、この厚さを減じることがこの工程の大きな課題である。実際の作業はどうであったか。厚さの減少はおろか、铸放し面の完全な消去さえかなりの困難を要した。铸型の微妙な起伏を反映して、製品の表面も微妙な凹凸が存在する。この凹部に平均して铸放し面を消去することはかなりの労力を必要とし、仕上げた後にまで铸放しの凹部が残ってしまった。したがって、翼部全体の厚みの減少も充分果たせないままであった。仕上がりで翼部の厚みは1.5~2.0mmほどで、1.0mm以下の場合も少なくない実際の銅劍よりかなり厚くなってしまっているのがわかる。さて、同様に脊部についても铸放し面の消去を行った。丸味のある面に対しての研磨は小刻みに行わざるを得ず、以外と時間を要した。同時にこの工程は脊と翼の境界を明瞭にする際取りを行うべき段階であったが、製品に見られたような著しい擦過痕を残すことはできなかった。薄くすり減った砥石の端部をヘラ状に押し当てて研磨してみたりもしたが（写真4-3）、無理であった。もっと堅い角のある砥石を用いるべきなのか、それとも金属が必要なのか、いずれにしろ用意した以上の道具か技術が必要である。ここまで剣身に平行した、铸放し面の消去を第一の目的とした研磨に、およそ4時間を見要した。

次は、極先端部の剣身平行の研ぎである。想定では、断面菱形の鋒部に向かって剣身平行の研ぎを行えば、自然に極先端の鏡が現れてくるものと考えていた。しかし、この素材では断面菱形の鋒部が十分铸出されていない。剣身平行の研ぎばかり繰り返していると、鋒先端まで脊を研ぎ出してしまうことになりかねない。よって、ここでは鋒部の刃部研磨をむしろ先行して、その後に剣身平行研磨をかけることによって極先端部の作出を行うことにした。

鋒部をはじめとして、刃部の研ぎは、鋒方向への矢羽根をなすように両側から行う。上述したような断面形だけに、時間と労力は予想以上に上った。同時に、それだけの研磨によって、鋒部の幅と厚さがかなり素材より小さなものとなることになった。これは下方の刃部にも影響を及ぼさざるを得ない状況を生み出した。およそ鋒部を断面菱形に仕上げた上で、極先端の作出に取りかかった。とは言え剣身平行の研ぎだけではなし得ず、結局、剣身平行の研ぎと刃部の剣身に斜交した研ぎの反復によって極先端部の研ぎ出しを行った（写真4-5）。そのため、研ぎのかなり集中することになったこの部位が、鋒部以上に幅を減じることになるとともに、

厚さも大きく減らすことになった。縦断面の観察によれば、樞先端部付近が厚みを減じていることがよくわかる。このことは、これほどの厚さの減はないものの、大半の製品に見られた特徴であって、B62様の素材でもこのような結果を免れ得ないことを物語っている。肝心の樞先端部の断面形作出はどうであったか。ここでも工程表の計画通りにはいかなかった。斜めに脊の付け根付近をより大きく研ぎ込むといったことは、非常に困難である。できたとしても報告で述べた微細な傾斜のものまで、匙面状の樞や凹状の樞の研ぎ出しは、現時点では方法を見い出せない。これらについては、鋤型の時点で彫り込まれていたと見た方がよいようである。

とにかく、樞先端部の鎬をなんとか研ぎ出すことができた。これを劍身下半に、脊と刃部同時に平行で及ぼしていく（写真4-6）。脊と刃部の2面に砥石が当たっているせいか、研ぎのブレはほとんどない。そのかわり労力を要する。刃部の研ぎのポイントは剣方部である。この上端の突起と脊上の節帯をいかに研ぎ出すか、剣方の湾曲にそった鎬が研ぎ出せるか、そして剣方下端をYタイプの研ぎに仕上げられるかである。まず突起部から。突起部は割付の刻線によって決められておりこれに従って研ぎを行う。ところが、刻線にそって一定に直線的に研ぎを反復することが実は容易ではなかった。砥石のブレが生じやすいのである。あるいは、割付のところで述べたように、より太い線なら砥石のブレを防いだかもしれない。また、より硬質の砥石によればブレが解消されたかもしれない。ここでは、當て具を用いることにした。かまばこ板様の側面に砥石を固定したのである（写真4-7）。弥生時代において直線的な板材の獲得は容易ではなく、當て具とするならむしろ砥石などの石器が用いられたかもしれない。割付刻線をはっきりしたものにする、砥石をより硬質なものにするなどいすれかによって解消されるであろう。なお、突起部の直線的な研ぎに対して、同時に脊上に端部の丸い研ぎ出し面を作ることは、実は力の入れ加減によってさほど難しいことではなかった。同様に、既におよそ外形が鋤出されている剣方も、その湾曲にそって鎬を研ぎ出すことは容易であった（写真4-8）。最も難しかったのは、やはり剣方下端刃部をYタイプに整えることであった。方柱状の砥石によって、研ぎ込んだ上で丸味をもった面を作り出すことは、かなり意図的に行わなければなし得ない。Xタイプの研ぎを行おうとして、途中でやめてしまったようなものでは決してない。

鋸から剣方下端に到る刃部鎬を研ぎ出し、元部の翼端部を整えて（写真4-4）、ようやく銅剣としての形がなった。およそ9時間をしてしまった。またこの間、大きな改変として、鋸部から刃部上半に身幅のかなりの減少と、樞先端付近に脊の瘦せがあったことを明記しておく。

ここまで工程でおよそ銅剣としての形ができあがった。ただし、あまりに粗い擦過痕が残されたままである（写真5-1・2）。砥石を仕上砥に代えて、再び同じ順番で研磨をかけていく（写真5-3～5）。この段階でも型ズレの残っていた箇所は、刃端部が折れるように取れていいき、結果として鋸部よりも限らず、刃部全域において身幅を減じることになった。この仕上げ研磨は、突起部や剣方下端等の刃端部には余程徹底して行わないと、先行する粗い研磨の擦

過痕を完全に消し去ることが難しかった。製品の銅剣でこういった箇所にしばしば見られる擦過痕に対して、これまで研ぎが刃端部にまで行き届いていると評価していたが、実は全く逆だったのである。仕上げ研磨が十分端部にまで行き届いていないとの証左だったのである。また、仕上げ研磨の端部への不徹底は、割付の刻線を残してしまう結果へも結びついている（写真6-4～6）。もっとも極先端に関しては、素材の形状自体に由来する部分が大きいと思われるが。なお、仕上研磨は刃部のみにまず限定して行い、工程4の仕上げまで含んで4時間ほどを要した。それでも、微妙に砥石の当たりに差ができる、平滑な面を完全に成すまでは到っていない。銅剣を光にかざすと、幅1mmほどのミガキの単位の集合となっているのがよくわかる。より時間をかけてやれば平滑な面ができたかもしれない。木炭などを用いるとか、研ぎ汁を布にしみ込ませて研磨する方法もあると言う。なお片面についてのみ、刃部以外の翼部にも仕上げ研磨を行い、これには3時間ほどを要した。

研磨が終わって、残るは仕上げである。まず、湯口部を落とす。先に述べたように本来は粗整形の段階で行われ、端部調整は全体の研磨にそって行われたと推測される。湯口の切断には、タガネを当てて敲打する（写真5-6）こと両面からそれぞれ10数回、タガネが身に2mmほど入ったところで折れるように落ちた。切断した湯口部の重量は142gを測る。切断面はタガネの入った箇所が法面状となり、それ以外の部位は金属疲労を起こしたような荒れた器表になっている（写真5-8）。これを研磨して面を作るが（写真5-7・9）、なるほどこの工程が手抜きさ

第6表 流紋岩質凝灰岩（大矢野町産）製鑄型による模铸品の研磨前と研磨後の計測値比較

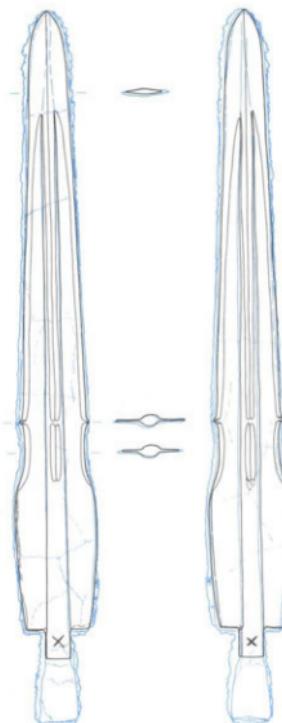
鋳型から取り出した後の模铸品	重 量	957 g	劍 身 長	50.9cm	突 起 の 位 置	17.1cm	
	関 幅	5.41cm	刀 部 長	33.8cm	刃方最小幅の位置	14.8cm	
全 長	—cm	茎 下 端 幅	—cm	劍 方 長	5.6cm	刃方下端の位置	11.5cm
A面脊幅(a)	1.48cm	B面脊幅(a)	1.56cm	茎 長	—cm	最大幅の位置	8.8cm
" (b)	1.48cm	" (b)	1.60cm	突 起 幅	5.75cm	突 起 部 脊 厚	1.04cm
" (c)	1.50cm	" (c)	1.63cm	劍 方 最 小 幅	5.50cm	刃方下端脊厚	1.11cm
" (d)	1.54cm	" (d)	1.65cm	刃方下端幅	6.25cm	最大幅部脊厚	1.12cm
" (e)	1.785cm	" (e)	1.69cm	最 大 幅	6.89cm	関 部 脊 厚	1.12cm
特 徴					最大幅部端部厚	0.21cm	
					関 端 部 厚	—cm	

研磨後の模铸品	重 量	725 g	劍 身 長	50.9cm	突 起 の 位 置	17.1cm	
	関 幅	5.23cm	刀 部 長	33.8cm	刃方最小幅の位置	14.8cm	
全 長	53.35cm	茎 下 端 幅	2.01cm	劍 方 長	5.6cm	刃方下端の位置	11.5cm
A面脊幅(a)	1.46cm	B面脊幅(a)	1.52cm	茎 長	2.45cm	最大幅の位置	8.8cm
" (b)	1.46cm	" (b)	1.56cm	突 起 幅	5.71cm	突 起 部 脊 厚	0.99cm
" (c)	1.49cm	" (c)	1.61cm	刃方最小幅	4.83cm	刃方下端脊厚	1.10cm
" (d)	1.52cm	" (d)	1.61cm	刃方下端幅	6.25cm	最大幅部脊厚	1.11cm
" (e)	1.77cm	" (e)	1.64cm	最 大 幅	6.67cm	関 部 脊 厚	1.11cm
特 徴					最大幅部端部厚	0.19cm	
					関 端 部 厚	0.21cm	

れば、製品に見られた法面状の部分がそのまま残ることになる。ここまでで通常の銅剣は完成するが、神庭荒神谷銅剣では更に×印を刻印している。茎上面にタガネをあてて、敲打する(写真6-7)。意外と1度の敲打では思った刻線が刻めない。3、4回と繰り返すことによって、意図していた刻線ができる。もしその間にタガネがブレてしまうと、刻線が2重になれる。実際両面に試してみたが、最初のA面は成功(写真6-8)、2度目のB面は失敗(写真6-9)となってしまった。

以上のような工程を経て、銅剣が研ぎ上がった(図版184右・写真6-1~6)。要した時間は23時間。もう片面を全面仕上げ研磨をかけるとすると、累計26時間に及ぶ。完成した銅剣は、全長53.35cm、剣身長50.90cm、重量725gを測る。他の数値は第6表を参照していただきたい。最初の素材が957g、切断した湯口部142gであるから、一連の作業で90gを研ぎ落としたことになる。全体のプロポーションとして、型ズレを丁寧に研ぎ落としたために元部と刃部の幅の比率にやや違和感を覚える程度で、他は神庭荒神谷銅剣358本に混じても、何ら遜色のない出来であると自負している。なお、本来翼部の厚みはもう少し小さいはずであり、そうするとこの程度の脊厚の神庭荒神谷銅剣なら、本来は650~700gを測ったものと推定できよう。

最後に完成した銅剣と、銅剣素材を比較してみよう(第4図)。同範認定の根拠とした脊の幅と厚さにおいては、両者に大きな変動がなく、同範認定の根拠の妥当性を追証したこととなっている。とりわけ刃部研磨の及ばない部位での脊厚はほとんど変化がない。ならば、最も変化の大きい箇所はどこか。何度も繰り返しになるが、刃部の幅である。原因是型ズレと鋒部の鋸型への彫り込みミスであり、両者の相乗効果によって大きな異同を生じている。型ズレは、多かれ少なかれほとんどの製品に認められた。鋸型製作時のミスは鋸造実験にあたってのことである。本来はより小さな変動幅で済んだと見ておきたい。製品の刃部においてさえ、しばしば型ズレの痕跡をその端部に留めている例のある



第4図 鋸上がり状態の銅剣と研磨後の銅剣の比較(黒線: 研磨後)

ことを考えると、かつて弥生の工人たちは、刃部を丁寧に研ぎ出すことよりも、鋳造後の改変をできる限り最小限に努めようとしていたことを窺い知ることができよう。

### 5. 研ぎ終わって

結局、際取りや樋の作出、より良好な仕上げ研磨といった技術は復元を果たせなかった。良質の砥石を想定していればよいのであろうか。それとも砥石以外の道具を用いるべきなのであろうか。あるいは、道具以外に技術の修得が欠けているのだろうか。弥生時代の青銅器生産遺跡・遺構が明確でなく、用いた道具も不明な部分ばかりである。未だ明らかにし得ない技術・道具があってしかるべきであろう。そうでなくては、神庭荒神谷の358本もの銅劍は作り得なかつたはずである。

実験においては、通算23時間要した。技術差と習熟度を勘案しても、1人が1日に1本仕上げることは難しい。2日で1本から3日で2本といったところであろうか。したがって、神庭荒神谷遺跡の358本の銅劍を研ぎ上げるだけで、のべ500人を越える工人が必要となってくる。鋳造にあたっても、意外と同範品が少ない。したがって、労力の省力化は意外と達成されていない。改めて、神庭荒神谷銅劍に傾注したエネルギーのほどを痛感せざるにはいられない。

### 6. 銅劍の研ぎから派生する諸問題

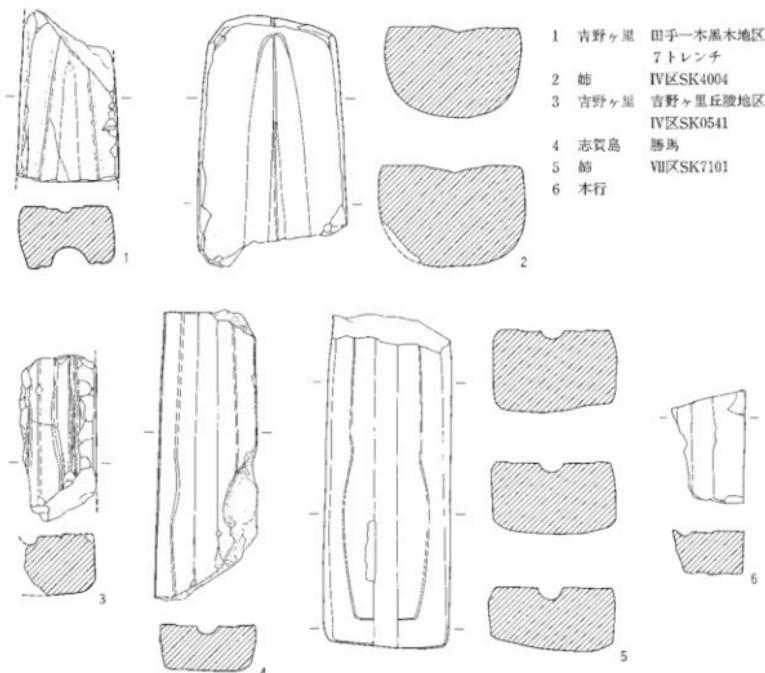
最後に、銅劍を研ぐということから派生する問題に若干触れておきたい。

まず、今回復元した研磨技術は、神庭荒神谷銅劍以外にも適用可能なのであろうか。銅劍それぞれの製品を見ている限り、ここで想定した研ぎ以外の痕跡を積極的に見出したことはない。というよりは、荒神谷より型式的に先行する細形では仕上げ研磨が徹底していて痕跡の確認が困難であり、逆に平形などでは想定した技術の退化が認められるからである。<sup>(9)</sup> 製品からは難しいようである。

では、鋳型ではどうであろうか。研ぎ以前に鋳型の時点で決定されている要素を比較してみよう。樋先端の鋳型への彫り込みを知り得る資料として、吉野ケ里遺跡田手一本黒木地区7トレンチ出土細形銅矛鋳型<sup>(10)</sup>（第5図1）と姉跡遺跡IV区SK4004出土器種不明鋳型<sup>(11)</sup>（第5図2）がある。銅劍ではないが、基本的に製品で同様の樋先端部を形成しているから比較の対象となり得る。吉野ケ里鋳型では、峰先端部を欠いて、やや曖昧なもの、脊が収束して断面菱形の峰部へ転じているようである。姉跡鋳型でも、やはり脊が途中で収束して断面菱形の峰部を形成している。したがって、神庭荒神谷銅劍と同様の研ぎが適用できる。朝鮮半島出土品ではどうであろうか。靈岩出土鋳型<sup>(12)</sup>（第6図1～3）や草薙里出土鋳型<sup>(13)</sup>（第6図4）では、いずれも先すばまりになりながらも脊が峰まで到達しており、日本出土例と異なる。ただし、峰がかなり鋭角的な日本出土例とは違い、峰の外形自体が丸く作られており、身幅も狭い。また神庭荒神谷銅

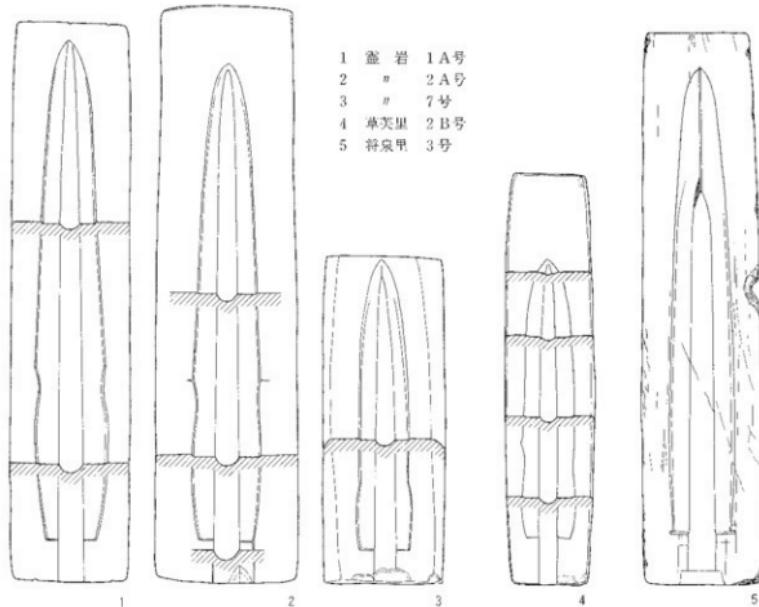
剣からすれば、身幅の割に脊が厚い。このことから、鋒の外形をかなり研ぎ込みさえすれば、神庭荒神谷銅劍と同じ研ぎが、半島出土鋳型による銅劍素材にも適用できると推測される。むしろ、身幅を増した日本の銅劍に応じて製作された鋳型が吉野ヶ里鋳型や姫鋳型であって、列島産でも最初期は半島出土のような鋳型が存在した可能性が少くない。すると、<sup>00</sup>将泉里鋳型(第6図5)のような、脊の収束した半島出土の鋳型が問題となるが、後述する突起位置の特定もなく、研ぎ上がりの銅劍もかなり鋒の長いものになることが予想されるなど、他の鋳型とは様相を異なる。ここでは将泉里鋳型を時期的・地域的に別の系譜と見ておきたい。結論として、神庭荒神谷銅劍を想定した極先端の作出法は、朝鮮半島の細形銅劍・銅矛にさかのぼって適用することが可能である。研ぎの技術自体は大きく変化せず、求めた身幅や脊厚に対応して、鋳型への彫り込みを変化させていったというのが実態であろう。

もう一箇所、鋳型で比較するべき部位として剣方周辺がある。特に突起部がどのように鋳型の時点で扱われているかである。日本出土鋳型でその箇所を知ることのできる鋳型として、吉



第5図 日本列島から出土した銅劍等の鋳型

野ヶ里遺跡吉野ヶ里丘陵地区IV区SK0541出土細形銅劍<sup>(16)</sup>鋳型（第5図3）、志賀島出土細形銅劍<sup>(16)</sup>鋳型（第5図4）、姫遺跡VII区SK7101出土中細形A類銅劍<sup>(17)</sup>鋳型（第5図5）、本行遺跡出土銅劍<sup>(18)</sup>鋳型（第5図6）がある。前三者はいずれも剣方相当の湾曲が既に彫り込まれており、突起部はその湾曲の起点として位置の特定が可能である。突出傾向はないものの、突起位置は鋳型の時点では明らかに意識されている。本行鋳型においては、剣方の湾曲が認められず、突起が二つあって、脊もやや薄めで、通常の細形銅劍とはやや異なるが、突起が既に突出部として鋳型に彫り込まれている。列島產の細形銅劍では、剣方そのものの位置が当初はむしろ強く意識されていたのが、次第にその起点の突起を突出部として鋳型に彫り込むように転じたと推測しておきたい。突起明瞭化の傾向は、むしろ朝鮮半島のほうが顕著である。将泉里鋳型では全く認められないものの、靈岩鋳型や草美里鋳型では明らかにその傾向が窺い知れる。最初期の列島產品がどのような鋳型であったのか判然としないが、いずれにしろ、神庭荒神谷遺跡で認められた突起の位置を既に鋳型の時点で決定しておくという方法は、やはりこれまた朝鮮半島の細形



第6図 朝鮮半島から出土した銅劍の鋳型

銅剣にまで遡り得る技術だったのである。

結論として、現在出土している鋳型から見る限り、神庭荒神谷銅剣の研磨技術は細形・中細形銅剣に普遍化することができ、朝鮮半島にその始源を遡ることのできるものである。すると、細形銅剣を中心と提唱されている「研ぎ直し」といった行為はどのように評価できるのだろうか。これを積極的に認めようとする橋口達也によれば、樞先端位置や突起位置の移動、脊幅や厚さの変動を大きく伴う行為を想定している。しかし、そのような行為は、これまでに復元してきた研磨技術では不可能に近いことは多言を要さない。突起とは言わば研ぎ残し部分であって、これを研ぎ落として新たに別の位置に突起を研ぎ出すには翼幅を大きく減じる必要があるし、何より改めて研ぎの及ばない丸い脊を作り出す必要さえあるのである。樞先端を大きく動かそうとすれば、身幅の大幅な減少を引き起こさざるを得ない。<sup>(2)</sup>とりわけ、元部に刃研ぎの及ばないⅠ式の銅剣を研ぎ直して作り出すことは、ほとんど不可能である。神庭荒神谷銅剣の研磨技術を細形にまで適用できる限り、積極的に大きな研ぎ直しは行わなかった、否、行い得なかつたのである。

神庭荒神谷銅剣において、弥生の工人たちは、研磨という行為に平面形の調整という以上の意識を持っていなかったことを報告では述べた。この意識は細形銅剣にまで遡るものかもしれない。技術的に同等で、しかも利器として使った後で研ぎ直すのにはあまりに不適当な形を作りだしてしまっているからである。そして、その形態のまま、型式変化を遂げているのである。そのような金属器さえ、時として凶器に使われることがあった。そういう背景にこそ意味を見出さなければなるまい。<sup>(2)</sup>

## 7. 終わりに

考古学において、こういった過去の技術復元は非常に難しいものである。358本もの豊富な観察資料をもってして臨んだ、この研磨実験においてすらである。弥生の工人達はどのように銅剣を研いだのか。結局、解明できたようで解明できないまま残った部分も多い。ただ事実として、かつて358本もの銅剣が鋳造され、研磨されたのである。神庭荒神谷銅剣を作った工人達は、銅剣としての形を整えるために、ただひたすらに銅剣を磨いた。そう、研いだのではない。磨いたのである。マツリの道具として、彼ら工人を、また彼らをして銅剣生産に向かわせた人々のエネルギーを歴史の中に正しく評価しなくてはなるまい。

(吉田 広)

### 註

- (1) 吉田広「銅剣生産の展開」『史林』76-6、1993年。
- (2) 橋口達也「弥生時代の輻い一武器の折損・研ぎ直し」『九州歴史資料館研究論集』17、1992年。
- (3) 佐原真「石製武器の発達」『紫雲山』、1964年。同「弥生時代の戦争」『那馬台古時代の東日本』、1991年。

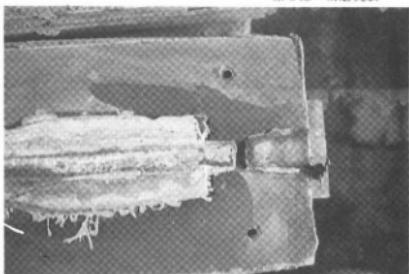
- 田中琢『倭入争乱』、1991年。橋口達也「弥生時代の戦い」『考古学研究』42-1、1995年。松木武彦「弥生時代の戦争と日本列島社会の発展過程」『考古学研究』42-3、1995年。横浜市歴史博物館『弥生の「いくさ」と環濠集落 大塚・歳勝土の時代』、1995年など。
- (4) 石製鋤型による銅鋤で顕著に認められる「外引け」と同じ原理と推測できる（難波洋三「銅鋤」『弥生文化の研究』6 道具と技術Ⅱ、1986年）。
  - (5) 前掲註(1)文献。
  - (6) 川越哲志によれば、弥生時代のタガネは中期中葉に北部九州で出現するが、現時点では確実にタガネと判断されるものは15例に過ぎないという。ほぼ同時に出現するノミがタガネの用途にあてられることも少なくなかったようである（川越哲志『弥生時代の鉄器文化』、1993年）。
  - (7) 特に突起の両側に残る場合が網形以来多い。平行鋼劍になると、棘状突起は言うまでもなく、同様の擦過痕が刃部の企城にわたって残ることも少なくない。
  - (8) 村田裕一氏の御教示による。なお、氏には銅劍を研ぐにあたっての他にも種々の御教示を得た。深謝。
  - (9) 前掲註(7)で述べたように、明らかに仕上げ研磨の退行が認められる。一方で、突起を棘状突起へと変化させて、鍛造による造形としていることも、研磨という工程からみれば退化と評価することができる。
  - (10) 佐賀県教育委員会『吉野ヶ里』、1992年。
  - (11) 千代川町教育委員会『姫跡遺跡』、1985年。
  - (12) 林炳泰「靈岩出土青銅器鎗範について」『三佛金元龍教授停年退任紀念論叢』I 考古学篇、1987年。
  - (13) 国立博物館『青銅遺物図録』国立博物館学術資料集(一)、1968年。
  - (14) 藤田亮策・梅原末治『朝鮮古文化総鑑』I、1947年。
  - (15) 前掲註(1)文献。
  - (16) 森貞次郎・渡辺正気『福岡県志賀島発見の細形銅劍鎗范』『九州考古学』3・4、1958年。
  - (17) 森貞次郎・乙益重隆・渡辺正気『福岡県志賀島の弥生遺跡』『考古学雑誌』46-2、1960年。
  - (18) 前掲註(1)文献。
  - (19) 向田雅彦「鳥栖市出土の青銅器鋤型類」『考古学ジャーナル』359、1993年。
  - (20) 中細形A類銅劍とした菟田八幡宮藏銅劍では、絵画のせいもあって、剣方下端が既に鋤型の時点で決定されていたようである（吉田広「菟田八幡宮藏銅劍をめぐる諸問題」『古文化談叢』33、1994年）。
  - (21) 奇しくも橋口が指摘したように、吉武高木3号木棺墓出土細形銅矛に見られた劍菱形の鋒こそ、既存の極先端に規制された研ぎ直しの尖状を的確に物語っている（前掲註(2)文献）。
  - (22) 橋口達也「聚落立地の変遷と土地開発」『東アジアの考古と歴史』中 調崎敏先生退官記念論集、1987年。

## 挿図出典

- 第5図1・3：註(1)文献。
- 第5図2・5：註(1)文献。
- 第5図4：註(2)森・乙益・渡辺文献。
- 第5図6：註(8)文献。
- 第6図：小川富士雄・難波三『日韓交渉の考古学』弥生時代篇、1991年。



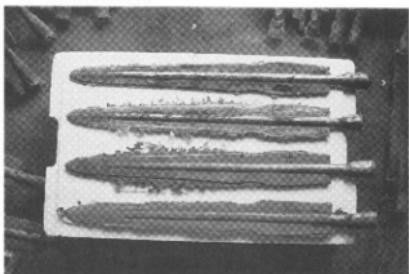
1 石製鉄型の製作



5 鉄込み時の収箱



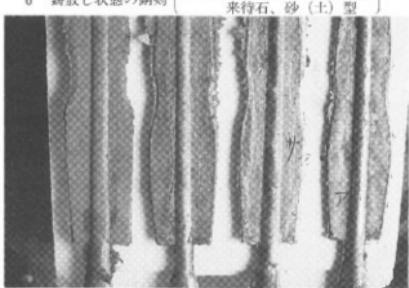
2 鉄型に熱を加える



6 鉄放し状態の銅劍  
〔上から人矢野町産、天草町産  
来待石、砂(土)型〕



3 鉄込み作業



7 鉄放し状態細部  
〔左から砂(土)型、来待石、  
天草町産、大矢野町産〕



4 鉄型を開く

写真1 銅劍の鋳造



8 研磨後の銅劍

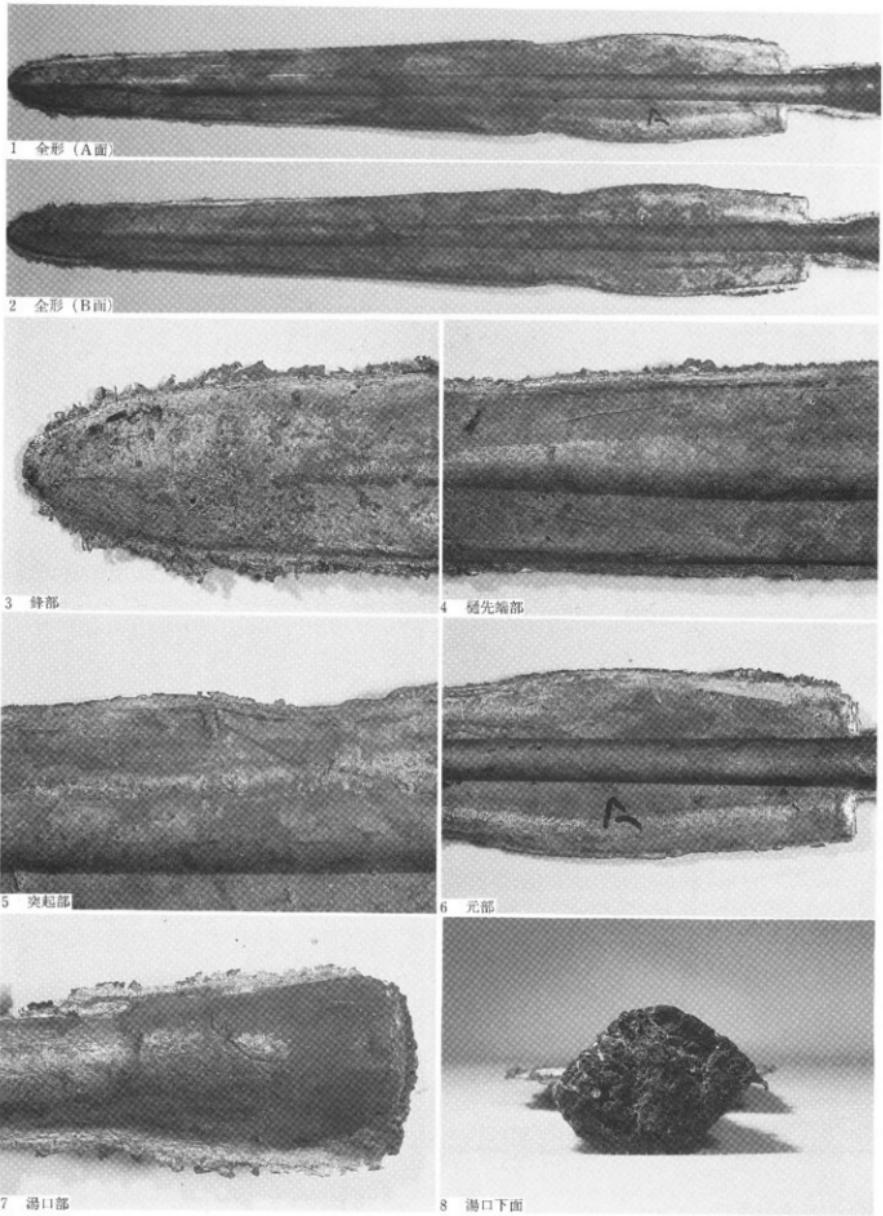
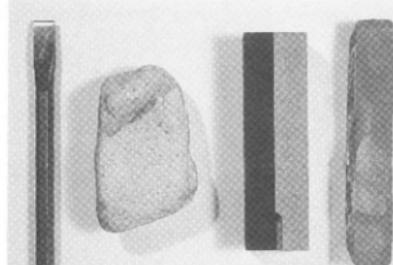


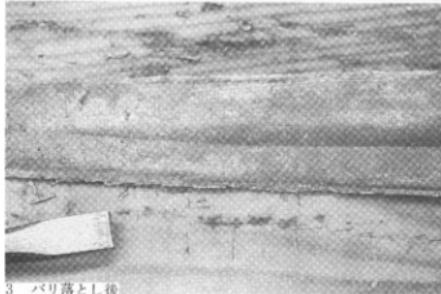
写真2 鎔放し



1 道具



2 パリ落とし作業



3 パリ落とし後



4 端面粗調整作業



5 横先端割付作業



6 横先端割付後



7 突起割付作業



8 突起割付後

写真3 道具・粗整形・割付

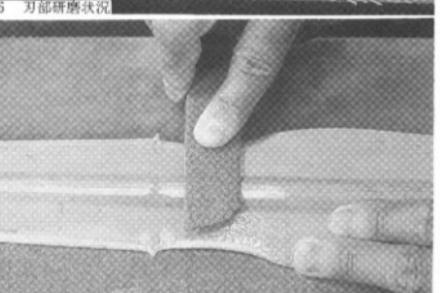
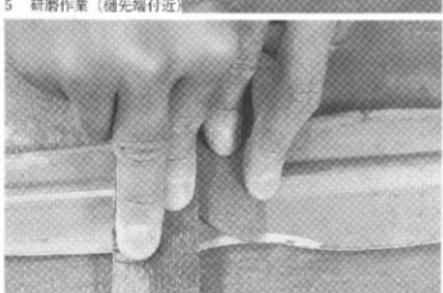
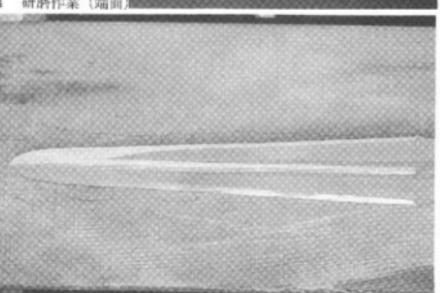
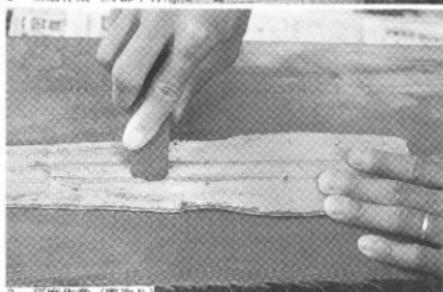


写真4 研磨（仕上げ前）